

日印国交樹立 60 周年 記念事業認定



# 第 16 期

## 日本インド学生会議

### 活動報告書

THE 16th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE  
OFFICIAL BULLETIN



2012

2012年度

第16期

日本インド学生会議

活動報告書

開催地

コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー

開催期間

2012年8月8日から9月4日

# 目次

<b>はじめに</b>	ページ
1. 実行委員長あいさつ	4
2. 実行委員会メンバー一覧	5
3. お世話になった方々からのお言葉	6
<b>第一部 日本インド学生会議</b>	
1. 基本理念	24
2. 概念	25
3. 沿革	26
<b>第二部 活動報告</b>	
1. 年間活動報告	38
2. 各局活動報告	40
<b>第三部 本会議活動報告</b>	
1. 実施要綱	45
2. 本会議日程	48
3. 本会議日録	49
4. 企業訪問	70
5. 分科会報告	74
6. 文化交流・フィールドワーク報告	110
7. ホームステイ報告	117
8. 本会議反省	112
9. 修了書	123
<b>第四部 個人語録</b>	
1. 日本側実行委員からの声	126
2. インド学生からの声	137
<b>おわりに</b>	
1. 謝辞	142
2. 日本インド学生会議規約	144
3. 編集後記	148

---

# はじめに

---

- |                    |   |
|--------------------|---|
| 1. 実行委員長あいさつ       | 4 |
| 2. 実行委員会メンバー一覧     | 5 |
| 3. お世話になった方々からのお言葉 | 6 |

一、実行委員長挨拶

活動報告書を手にとってくださりありがとうございます。ここでは第16期日本インド学生会議実行委員会のメンバーが約1カ月間インドで活動した記録が、当団体の歴史と共に記されています。

今年の日印国交樹立60周年という記念の年であり、我々も記念事業の名をつけさせてもらい、本会議を開催しました。この記念というものはその年に意味があるのではなく、その経過に意味があります。一方で、記念というかたちをとることで人を引き付け、様々な行事を行うことにより、日印のことを知ってもらうきっかけになり、今後も関係が続けようという意気込みにつながるのです。日本インド学生会議（JISC）としましても、この記念の年がきっかけとなり、より多くの方に、インドに興味をもち、知らなかったインドを知っていただきたいと思っています。また、16期の参加者自身にとっても、本会議の経験はインドを知る一歩となりました。この私たちの経験を伝えることで、さらに多くの方にインドと繋がるきっかけが生まれることを期待しています。

16期の本会議を振り返ると、数々の困難とそれを乗り越えた達成感、これからも繋がっていたいインドの友人との出会いが思い返されます。経験者がいない中、手探りで進めた今期の活動の反省点を言い出したらきりがありません。しかし、運営と会議作りの両方を経験し、一つひとつの役割と仕事の大切さや苦勞を感じ、インド人の中で揉まれた私たちは、単にインドを見て歩いた以上のものを得たはずです。その成果をまとめたこの報告書を、中でも参加者の気持ちが色濃く表れている最後の感想部分まで、じっくり読んでいただけたら嬉しいです。

最後になりますが、この第16期の活動があるのは、JISCが16年間続いてきたからであります。当団体の創設発起人である石津達也様、後藤千枝様、長浜浩子様、またインド側のNKK、ABK-AOTS、JNUの諸先生方をはじめ、16年の歴史に寄与してくださった皆様に感謝いたします。そして、第16期本会議の開催にあたりご支援いただいた助成団体、後援団体の皆さま、お話を聞かせていただいた笹井大嗣様、中津雅昭様、サポートしてくださったOBOGの皆様、吉野宏様をはじめ、我々の活動にご尽力いただいたすべての皆様に深く御礼申し上げます。

第16期日本インド学生会議実行委員会  
実行委員長 豊原智恵

## 2. 実行委員会メンバー一覧

	名前/Name	役職/Position	所属/School, Major
1	豊原 智恵 (Toyohara Chie/Ms.)	委員長 President	東京外国語大学ヒンディー語専攻 3年 Tokyo University of Foreign Studies Hindi Studies 3rd grade
2	中嶋 広明 (Nakajima Hiroaki/Mr.)	副委員長／学術局長 Vice-President/Academe	東京大学教養学部理科 1類 2年 University of Tokyo Arts and Sciences 2nd grade
3	奥村 理恵 (Okumura Rie/Ms.)	国内渉外局長 Liaison in Japan	早稲田大学文化構想学部 1年 Waseda University School of Culture, Media and Society 1st grade
4	山口 久美子 (Yamaguchi Kumiko Ms.)	国際渉外局長 International Liaison	東京外国語大学ヒンディー語専攻 2年 Tokyo University of Foreign Studies Hindi Studies 2nd grade
5	馬場 祐作 (Baba Yusaku/Mr.)	広報局長 Public Information	首都大学東京経営学コース 3年 Tokyo Metropolitan University School of Business and Administration 3rd grade
6	日野原 由佳 (Hinohara Yuka/Ms.)	財務局長 Financial Bureau	早稲田大学大学院政治学研究科修士 1年 Waseda University, Graduate School of Political Science 1 <sup>st</sup> grade
7	湯村 将貴 (Yumura Masataka/Mr.)	企画局長 Activity Planning	早稲田大学国際教養学部 3年 Waseda School of International Liberal Studies 3rd grade
8	宮澤 ティナ (Miyazawa Tina/Ms.)	広報局 Public Information	慶応義塾大学総合政策学部総合政策学科 1年 The Faculty of Policy Management, Keio University 1 <sup>st</sup> grade

計 8 名

(第 16 期インド日本学生会議実行委員会名簿)

16th India Japan Student Conference Committee Member より抜粋)

※中嶋はコルカタ会議 8 月 18 日まで

# 3. お世話になった方々からのお言葉

在日インド国大使よりメッセージ

H.E.Ambassador Mrs. Deepa Gopalan Wadhwa

AMBASSADOR OF INDIA  
भारत का राजदूत



29 October 2012



## MESSAGE

I am happy to learn of the 16<sup>th</sup> Indo-Japan Student Conference organized in India.

Student exchange programmes tend to increase the participants' understanding and appreciation of other cultures; provide opportunities to build global citizenship skills and broadening their social horizons.

The fact that the conference took place during the significant 60<sup>th</sup> anniversary of the establishment of diplomatic relations between India and Japan gives it even greater salience. I am confident that such a conference would contribute to the goal of promoting mutual understanding and friendship.

(Deepa Gopalan Wadhwa)

Embassy of India, 2-2-11 Kudan Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102 0074  
Telephone : +81-3-3265-5036 Fax : +81-3-3262-2301; Email: pstoambassador@indembip.org

## 第16期日本インド学生会議に寄せて

在インド日本国大使館参事官 野田 亮二 様

---

第16期日本インド学生会議が成功裏に終了されたことを心よりお慶び申し上げます。

コルカタで始まり、チェンナイ、バンガロール、デリーへと移動しながらの約1ヶ月間は皆さんにとってこれまでの人生で最も刺激に満ちた1ヶ月になったのではないかと思います。さらに、事前の準備や、帰国後の報告書の作成なども含めた活動の全体が皆さんにとっての貴重な経験になっていることでしょう。

このような長期にわたるプログラムを実施するのは、日本においても簡単なことではありませんが、特にインドという地で実施することの大変さは、実際にこの活動に参加した人のみが理解できるものではないでしょうか。

人々の時間に対する感覚や、物事の価値観の相違など、日本人と異なる考え方を持つ人々が存在し、民族・文化・言語の多様性や依然として色濃く残るカースト制度など、日本の社会とは全く異なる社会が存在するという当たり前のことも、日本にいただけでは知識としては入ってきて、実体験として得ることは容易ではありません。

インドにおいて、我々日本人と全く異なる環境で育ってきたインド人学生と議論をすることで、自分の考えを論理的に整理して、英語で相手に伝えることの難しさや、インド人学生がそうしたことに慣れていて、優れていることを実感したのではないのでしょうか。また、世界の中における日本という新たな視野を身に付けることができたのではないのでしょうか。これを機に、テレビのニュースを見たり、新聞を読む際に、これまで以上に、インドや世界で起こっていることにアンテナを伸ばし、国際感覚を磨いて頂きたいと思います。

皆さんは大学卒業後、社会人として生きていくことが求められますが、これからの日本は、いずれの分野においても、ますますグローバル化への対応が求められるようになっていきます。そうした中、この日本インド学生会議への参加によって得た経験や、学んだことは必ずや皆さんにとってプラスの作用をもたらしてくれることでしょう。

今年は日本がインドと国交を樹立してから60周年となる記念すべき年ですが、日本とインドは戦略的パートナーシップを一層強化していくこととしており、近年、経済面においても、ますます結びつきが強くなってきています。また、教育、科学技術・学術などの分野においても、今後、関係が一層深まっていくことが期待されます。そのような中で、皆さんが今後、日印関係の更なる発展に寄与する機会を持っていただければ、とても嬉しく思います。

最後に、皆さんの活動を陰で支えてくれた多くの方々が存在すること、そしてそうした方々に対する感謝の気持ちを忘れないようお願いしてご挨拶とさせていただきます。

## 第16期日印学生会議へ参加された皆様へ

在コルカタ日本国総領事館総領事 川口 三男 様

---

第16期日本インド学生会議が成功裏に終了したことに対し、心よりお慶び申し上げます。

皆様の最初の滞在地がコルカタでした。

実は、コルカタ空港へ降り立った時に、皆様が人の多さ、車の渋滞等にびっくりされたのではないかと、少々心配していたのですが、11日の開会式で皆さんにお会いした時の元気な顔と、楽しそうにインド人学生と語りあう様子を拝見して安堵するとともに、皆さんのバイタリティに感心しました。

当地では、分科会でのインド人学生との意見交換以外にも、NGOの活動を見学、企業訪問もされました。皆様がそこで実際に見たこと、感じたことが、皆様の今後の人生に、かけがえのないものを与えてくれるものと信じています。

これは、インド人学生にとっても同様です。同世代の日本人学生と、長期間ともに行動し、同じテーマについて議論しあうことを通じて、彼らも皆さんから日本人の生活習慣、文化の違いや共通点など、はかりしれないほどの情報と知識を得ているはずです。

特に、今年は日印外交関係樹立60周年であり、皆様も本事業の一環として本会議を開催されました。外交関係と聞くと、国と国との関係を想像し、本会議と関連付けるのに違和感を持たれるかもしれませんが。しかし私は、国家間の関係を支えているのは、政府のみならず、個人間の相互の交流であり、それによって築かれた相互の信頼関係だと思っています。そして、皆様のような若者が果たせる大きな役割がそこにあると感じています。

今回の会議実施に尽力された学生の皆様や裏で支えてこられた先生方、関係者すべての方々に敬意を表するとともに、今後も日印学生交流の重要な事業としてこの会議が継続されていくことを念願しております。

## 第16期日本インド学生会議報告書の発刊に寄せて

在チェンナイ日本国総領事 中野 正則 様

---

第16期日本インド学生会議が成功裏に終了したことを心よりお慶び申し上げます。インドの猛暑のなか、今般、参加された学生の皆さまは、コルカタ、チェンナイ、バンガロールそしてデリーの4都市を精力的に回り、日印間の有意義な学生交流や様々なインドの人々との出会いを通じ、多くの貴重な経験を積まれたものと思います。

日本とインドは仏教を通じた長い歴史と文化の絆で結ばれ、また共に民主主義国家として、近年両国の関係は政治、経済、文化交流等の幅広い分野で発展・拡大を続けています。特に、日印間の経済関係は一層緊密化の度合いを深めつつあり、当州を始めとする南インドに進出する日本企業数は着実に増加を続け、チェンナイを州都とするタミル・ナド州を例にとると、過去3年間に進出日系企業数は65社から240社と4倍近くにも急増しています。これに伴い、当地では日本語学習者の数も飛躍的に増えており、日本語能力検定試験の出願者数だけをとってみても、2003年の約1,500人から2012年には約3,000人まで増加しています。おそらく、チェンナイ滞在中の企業訪問やホームステイ等を通して、こういった日印関係の結びつきの強さを肌で感じとって頂けたのではないかと思います。

また、当地滞在中には、当館への訪問の他、当館と日印学生会議の当地受け入れ機関であるABK-AOTS同窓会の共催による在外公館文化事業「JAPANESE NIGHT」に参加して頂き有り難うございました。皆さまの涼しげな浴衣姿による折紙デモンストレーションや下駄ダンスは、イベントに参加した日本語学習者のみならず、当地主要メディアによる報道を通じて、南インドの各地に日本文化を届け、日本文化の啓蒙活動に一役買うことになりました。

皆さまの将来と同じく、これからの日印交流の可能性は無限です。今後とも皆さまが日印交流の担い手として、活躍されることを切に期待するとともに、今度の日印学生会議の益々の発展をお祈りして、私のメッセージとさせていただきます。

## 日本インド学生会議に寄せて

公益財団法人 日印協会 代表理事・理事長 平林 博 様

---

日本インド学生会議は、今年で16年を迎えました。

この16年間、日本インド学生会議は、時代の波にもまれながらも、学生同士の交流を通じた日印友好関係の増進という確固とした目的を持って、よく頑張ってくられました。本年は、日印国交樹立60周年を迎えて多くの記念行事が行われておりますが、日本インド学生会議は若者レベルで60周年の先鞭をつけたものと、高く評価いたします。

16年前は、1990年代初めに始まったインドの変革（規制緩和、自由化等の経済改革、ルックイースト政策と大国志向への外交路線の変化など）により、インドが国際社会から注目され、また、日本との関係にも希望が見えていた時期でした。しかし、1998年5月、私が駐インド日本大使として着任後2カ月で核実験が行われ、インドは国際社会の批判を浴び、日本との関係も冷却化しました。心ある日本人やインド人は、伝統的な友好関係を復活し、さらに発展させていこうと努力致しました。2000年8月には、私は森喜朗総理大臣をインドにお迎えし、バジパイ首相との間で「日印グローバル・パートナーシップ」が樹立させました。その後は、日印関係は順調に推移し、2006年には「日印戦略的グローバル・パートナーシップ」に格上げされ、政府レベルでも民間各層においても、友好関係は加速されております。

しかしながら、日本人の中には依然としてインドに対する誤解や偏見が少なくなく、またインドの間でも日本への理解不足があることは否めません。現在、両国を担っている人々はそれなりに努力しておりますが、何と云っても、将来は皆さまの様な若者の肩にかかっております。特に、インドでは人口の半分以上が25歳以下と若く、これからはこれらの若い層がインドを支えるようになります。その意味で、日本の若い学生たちが直接インドの学生たちと接し、若者らしく率直に現在と未来を語ることが、日印関係の将来にとって決定的に重要であると考えます。

109年の歴史により日印双方から信頼されている日印協会としてあらためて、日本インド学生会議の皆様に対し、心から感謝いたしますとともに、できるだけ支援をさせていただくこととお約束いたします。今後とも、日本インド学生会議がさらに多くの学生たちの参加と多方面からの支援により、ますます発展していくことを心から祈念いたしております。

## ニガム和子先生よりメッセージ

日本語会話協会チーフパトロン ニガム 和子 様

---

今年日本とインドの外交樹立60周年を記念する年にあたります。

今年カルカッタが誇るアジアで最初にノーベル文学賞を受賞したタゴールの生誕150周年を記念する年でもあり、私が日本語を教えているラマクリシュナ ミッションの設立者である哲学者のスワミ ヴィヴェカーナンダの生誕150周年の年でもあり一年中を通して何かの催し物が行われています。ヴィヴェカーナンダが1893年にシカゴの世界宗教会議で「宗教とは同じゴールに向かう違う道程である」と説いて大きな反響を得ました。その数年後岡倉天心がヴィヴェカーナンダに会うためカルカッタを訪れましたが病床にあった彼は天心にタゴールに会うように勧めました。このようにして近代の日本とインドの文化交流が始まり、その同じ地で印日学生会議の16回期が行われました。

このように考えると学生会議の16回期というのはまだまだ子供のようでこれからどのように成長していくか分かりませんが若者の熱いエネルギーが充満しているには違いありません。

先日13期のメンバーに会った時彼女が言った言葉が忘れられません。

本会議に向け毎日準備に没頭していた時の充実感はそれまでに経験したことがない気持ちで、新しくできたカルカッタと日本の友人は一生の宝物だと言っていました。この学生会議の根本にある国際交流は一人一人つながり大きな輪になることです。この会議がインドと日本の文化交流の一こまになれるようにこれからももっと深く縦にも横にもつながったものになれるように祈っております。

## **M. R. Ranganathan 様よりメッセージ**

**ABK AOTS DOSOKAI Chairman Mr. M. R. Ranganathan**

---

REPORT ON THE ACTIVITIES OF  
16TH JAPAN INDIA STUDENT CONFERENCE (JISC)  
ORGANIZED BY ABK –AOTS DOSOKAI, TAMILNADU CENTRE  
AT CHENNAI, INDIA  
FROM 19 TO 24 AUGUST 2012.

ABK – AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Centre, Chennai , India had been identified by the Indo Japan Chamber , Tokyo / Japan for conducting the Japan India Student Conference in Chennai / India from the year 2009 onwards to discuss and exchange views / opinions on varied topics as detailed below

Education – Artificial intelligence, chronological

Society – Identity caste, immigration

Culture – westernization, media

Economics – global economy, from the viewpoints of local and global

On the other hand on every four years students from India are invited to Japan for the Japan India Students conference in Japan.

As part of the yearlong activities in commemoration of 60th Year of Japan – India Diplomatic Relationship ABK – AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Centre has organized the 16th Japan India Students Conference in Chennai , India from 19 to 24 August 2012 in which we had 7 students headed by Ms. Hiroko Nagahama from different universities of Japan for the Japan India Student Conference (JISC).

The participants of JISC had a comfortable stay at D & A Corporate residency, Chennai. The event was supported by Consulate General of Japan at Chennai, Many Academic Institutions like Meenakshi College for Women, Shri Shankarlal Sundarbai Shasun Jain College for Women, Meenakshi Sundararajan Engineering College & Quaid-E-Millath Government College for Women (Autonomous), Industrial Houses like Nihon Technology Pvt. Ltd & Classic Moulds & Dies, Shopping Malls etc.,

The students were taken Field work at Seva Chakkara a 25 year old Orphanage serving for the upliftment of orphans, destitute, downtrodden, physical and mentally challenged, every left oldsters, street children, etc.

During the course of the conference the students were taken for sightseeing to Mahabalipuram (shore temple), Marina beach and shopping at malls like , Skywalk, City Centre, etc., visits to an I. T. Company M/s. Nihon Technology Pvt. Ltd and to a factory M/s. Classic Moulds & Dies were organized. Where they had group discussions with the employees.

The JISC participants enthusiastically came forward to adjudicate the contestants of the Japanese Speech Contest of Talk Your Way to Japan – one of the major event conducted annually by our centre wherein the winner is sent to Japan totally free on Two weeks Study cum Cultural exchange trip.

We are also arranged an appointment with the His Excellency Mr. Masanori Nakano, Consul General of Japan at Chennai and the JISC participants made a courtesy call on the Consul General on 21st August 2012.

The JISC participants also had the opportunity to meet Ms. Sindhuja Kandamaran, who holds the Guinness World Record by becoming the youngest CEO for the Chennai based animation company called SEPPAN.

Home stay was also arranged for all the JISC participants to know more about Indian cultural, tradition , cookery, etc.,

All the JISC participants were overwhelmed with joy by their participation in the Japanese Night – Vol. 2 (exclusively for the Japanese Speaking persons) jointly organized by ABK – AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Center and Consulate General of Japan at Chennai. Which made them to mingle, interact with the native Japanese community residing in Chennai.

During the valedictory ceremony certificates were awarded to the JISC participants. The JISC

participants enjoyed the Chennai foods as well as the Japanese Obento organized by our centre. Some of our teachers like Mr. Mahendara Varman, Ms. Sukanya, & Mr. Kumar coordinated in the successful conduct of the 16th Japan India Student Conference.

Though the 16th Japan India Student Conference is over the sweet memories behold us forever.

## 第16期日本インド学生会議 殿

東京大学インド事務所 所長 吉野 宏 様

この度は日本からようこそバンガロールにお越し戴きました。学生会議始まって以来初のバンガロール交流が8月25日～28日実現して大変嬉しく思います。

皆さん全員を自宅に泊めてお手伝いしてくれた当事務所シバニ様（早稲田大学 修士卒）と共に感謝申し上げます。

東京大学は、「東京大学インド事務所」をバンガロール市に開設しました。本事務所は、文部科学省による「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30）」の下設立された「海外大学共同利用事務所」として、本学のみならず、日本の大学全体のインド人留学生の受入増加を目指すとともに、インドにおける学界・産業界とのネットワーク強化を通じた、日印の学術交流、産学連携の推進を目的に設置されました。今年2月27日開所式を無事終えたばかりで本年度より本格的に日印学術交流の促進、取り分けインド人留学生誘致活動に尽力しているところです。皆様の日印交流をその一環として、バンガロールで手配させて戴いた次第。狙いは以下の通りです。

1. 皆さんは、“JAPAN AS NO. 1”と言われた1980年後半以後生まれた世代。バブル経済が弾けて日本が難局を迎えた時代に生まれ“ゆとり教育”の名の下に完全週休2日制でのんびりと育ち、拳句の果てに3.11が起きて日本再生を目標に社会に出て生きて行かねばならない宿命を背負っています。衛生状態が行き届いた言わば無菌状態な環境に育ったので、肉体的に免疫不足でタフさに欠けています。今のグローバル世界に生きて行くには、もっと精神的にも肉体的にタフになって貰いたいと思います。米国を目標に働いて来た私の世代と違い、米国一極から多極化した世界に生きる皆さんは多次元の連立方程式を解かねばなりません。益々難しくなる諸問題にきちんと対応して明日を切り開いて貰いたいと思います。

2. そんなこれからの世の中に勝ち残るにはイノベーションがキーワードであろうかと考えます。技術革新と言う狭義な理科系人材の担う課題だけではなく、理系も文系も皆さん全員が人間として生きて行く上で直面する課題を解決する新たなビジネスモデルの創造と理解されます。この人間中心のイノベーションを生む源泉は多様性です。その意味でインドは皆さんにこの多様性を理解する絶好の機会となると確信するのです。そこで2つの

現場をセットさせて戴きました。

●学生交流会：KOYO 会と言う日本語と日本文化を学んでいるインド人学生諸君との交流会。

狙い：皆さんは、チェンナイからバンガロールまで約 370Km 弱を特急シャタブジ号で 5 時間かけて鉄道でのんびりとお越しになりました。現在進められているバンガロールメトロの様な日印鉄道交流の意義と将来性を現場体験から理解出来たと思います。互いに WIN-WIN に組める日印協力関係を議論されたでしょうか？

情報はネットで簡単に得られますが、生きて行く知恵は自ら現場に飛び込んで人と人との交流から学び取らねばなりません。これは一つの機会です。

●企業訪問：インフォシス本社と SONY 技術開発インド独立法人本社

(Sony India Software Centre Pvt. Ltd.) の 2 社。

狙い：世界競争の最前線現場を肌で感じて貰うこと。インフォシスの 成長の背景と世界戦略は？ SONY が再生を図るべくインドの優秀人材を自社に採用して、成長する市場を如何に取り込もうとしているか？どんな目標設定を行い、それを達成する為の手段としてどんなことを考えているのか？ 学ぶことです。

さて、皆さんがバンガロールを離れた後に同世代の若者達から嬉しいニュースが届けられましたので簡単に紹介します。

●9 月 9 日午前 9 時 53 分アンドラ・プラデッシュ州シュリハリコタにある Satish Dhawan 宇宙開発センターからインド宇宙開発機構 (ISRO) によって、インド国産ロケット PSLV-C21 (全長 44 メートル、230 トン) に大阪工業大学が制作した人工衛星プロイテレス (1 辺 30cm の立方体で重さ 15Kg) が搭載されて所定の軌道に打ち上げが成功しました。この大阪工業大学電気推進ロケットエンジン搭載小型スペースシッププロジェクトでは、学生が中心になって電気推進エンジンを搭載した小型人工衛星の設計開発を行っています。インドは世界で 6 番目の宇宙開発大国。先ずは、日印協力の成功おめでとうございます。大いに研究の成果を期待しています。

●9 月 21 日バンガロールで初の日本語フリー雑誌“シバンス”が発行されて 1 冊受領致しました。取材、制作、編集はエンリッチ (株) が募集した日本からのインターンシップでバンガロールに来た大学生と大学院生が行いました。便利なものを作ってくれてありがとう。同雑誌の今後の発展を期待します。

今年の 7 月~9 月はその他、インド科学院大学 (IISc) での日米印韓中 5 大学サマースクール (Civil Engg 分野の先生と大学院生との集い) や日本 4 大学 (京都女子大学、愛知学院大学、北九州市立大学、山口大学) の先生方と国立インド経営大学院バンガロール校 (IIM-B) の先生方との交流会、そして日本留学フェアと地元高校訪問での交流会と国立インド工科大学ハイデラバード校での東大 i-school ワークショップ (イノベーション教育) と盛り沢山の交流会が開催されました。WHO にインターンシップでお越しになりマラリヤの研究 (博士論文) をされた東大の女学生もおりました。一方、皆さんは立命館

大学がデリーで開催した日本留学フェアに特別参加し、日印学生会議の活動を大いに PR され、インドの学生達と交流されたと伺っております。又、南インドには私の知る限りでインド政府から奨学金を戴いて留学に来ている 4 人の日本人女学生とインドで働きながら母校で博士号取得を目指す女子社員が 1 人おられます。

日本からもっと多くの学生がインドに来て学生間の交流がもっと盛んになれば、日本に留学しようとするインドの若者ももっと増えるに違いありません。その意味で、皆様の御経験を広く知らせて戴きたいと思えます。

最後に、今回の皆様のご協力に感謝すると同時に今後ともインドの学生達との交流をより広く、より深く進めていかれますよう期待して已みません。今、グローバル世界の大競争時代を迎えております。どうか皆様に於かれましては、志を高く持って、自分の好きな道を逞しく生きて行かれます様、インドからお祈り致します。

## **Rabinder N. Malik 先生よりメッセージ**

**Rabinder N. Malik, Ph.D.**  
**Visiting Lecturer, Keio University**  
**Executive Officer (Rtd.), United Nations University**

---

It gives me great pleasure to write this message on the successful completion of the 16th Japan-India Student Conference.

I have no doubt that for the Japanese students who participated in this conference it has been a life-changing experience. The interaction and exchanges they had with the Indian students and other sectors of Indian society would have given them a deeper understanding of the Indian customs and traditions. On their part, I am sure that the Japanese students were able to convey some aspects of their own culture to the Indian people they came in contact.

The great strength of this program is that by bringing together the students from India and Japan it makes valuable contributions to promoting friendship and understanding among the peoples of our two countries.

I would like to wish continued success to the Japan-India Student Conference.

Tokyo, 26 September 2012

## 保坂俊司先生よりメッセージ

日本インド学生会議顧問 中央大学総合政策学部 教授 保坂俊司 様

---

日本中が「チャイナリスク」に右往左往している昨今、インドへの注目が増している。しかし、このような安易なインドへの接近は、決して良い結果を生まないことは、過去幾度もインドへのアプローチにおいて失敗を繰り返してきた日印関係で、悲しくも立証済みである。そこには、インドへの関心も、ましてや理解もない冷めた対インド政策、謂わば自己の利益のみを優先する未熟な外交や経済姿勢があった。故に、日印両国の関係は、真に深まることがなかった。つまり、真の日印友好というものは、政治や経済優先のご都合主義的なアプローチでは到底成立しないものであるということである。

いずれにしても、両国の真の友好関係の形成は、一朝一夕には出来ないのである。とはいえ、日印は歴史上のしがらみがなく、むしろ両国の関係は、友好ベースで始められるという天恵の関係にある。ましてや、日本・インド学生会議という組織は、政治・経済の利害を度外視できる学生レベルの草の根交流として始まった歴史があり、謂わば未来の日印交流を背負う人材が集う場所として、今日まで、大きな役割をになってきたし、これからも一層の活躍が期待される。

その学生会議も本年度は、第16期となり、その活動は益々アクティブとなり、かつ民間草の根活動団体として重要な存在となっている。その活動記録は、本報告書に詳しく紹介されている。

学生主体の団体であり、その運営等にはまだまだ未熟な面もあるが、日印両国の盤石な関係形成の大きな礎となる本団体への支援を、各方面の方々をお願い申し上げます。

## 長浜浩子先生よりメッセージ

日本インド学生会議創設発起人 長浜 浩子 様

---

日印国交樹立 60 周年を迎え、これまでたくさんのご縁をいただきながらインドと関わり続けられたことに感謝の気持ちでいっぱいです。40 周年の年にはムンバイでの石黒節子舞踊団（モダンダンス）公演制作スタッフとして渡印することができ、現在のようなインドとのご縁が生れるきっかけとなりました。

本年 60 周年ではバンガロールでの、観世流「能」公演に少しだけ関わらせていただく機会に恵まれ、新たなご縁が広がっています。「能」を鑑賞されたインドの皆様には、消えることの無い日本文化の記憶となったことでしょう。

能楽師の皆様と過ごした時間の中で「文化は人柄に支えられている」と感じました。

バンガロール大学でご縁のあった日本語を学ぶ学生と共に、日本インド学生会議のメンバーも「能」を鑑賞いたしました。同じ宇宙のような空間の中で、彼らはどんなことを感じていたのでしょうか。異国の文化であっても、それぞれの感性で「能」の素晴らしさも共有できたはずです。

インドでは新たな発見と貴重な体験の機会や出会いに恵まれ、私にとりまして飽きることない国であり続けています。

そのような中で、今年 16 年目を迎えることのできた日本インド学生会議は、インド独立 50 周年の記念すべき年にスタートいたしました。その年はマザーテレサが天に召された年でもあり、日本インド学生会議に参加した学生たちが国を超えての理解を深め、助け合い、幸せを考える、そういう活動に育ってほしいと強く感じたことは今も忘れていません。

現在、日本インド学生会議が誕生したコルカタに加えデリー・チェンナイと開催都市も増えました。多様なインドとの出会い、人の温かさに触れながら様々な事を学び、その思いを言葉や文章で表現し、更に多くの人に伝え分ける。そんな活動が今後もずっと続くことを願って止みません。インドに身を置き、更に人間としての力を高める。今期は、そういうことが一番大切だと思ふようになりました。

今期、私は 8 月 8 日にメンバーと同じ飛行機でインドへ出発しました。その 2 日前のことですが、在日本インド大使館では「宮城県女川市での救助活動とインド」という写真展と講演会があり、渡印直前ではありましたが是非うかがってみたいと思ひ赴くことにいたしました。

東日本大震災と津波の発生を受け、インド政府は宮城県女川町に救援・復興チーム（NDRF）を派遣して下さいました。インドとして日本が初めての支援隊海外派遣であった事に、インドとの大きなご縁を感じずにはられません。毛布 2 万 5 千枚・ミネラルウォーターとビスケットを各 10 トン、そして支援隊 46 名の救援チームの献身的な救援支援活動を忘れることのないよう胸に刻ませていただきます。現地での様子は、講演の中で支援隊の活動を支えていた 4 人の通訳ボランティアの皆様と、女川町町長からうかがうことができました。各国のメディアが伝えていたように、「災害時にも規律正しさを失わな

い日本人の姿勢を見習いたい」と、インド隊の隊長がおっしゃって下さったとのことでした。  
通訳ボランティアの4人の皆様は、1年後の今年3月にインド政府からのお招きをいただき、インドを  
訪問し隊員の皆様と再会されたとうかがいました。

このことを機会に、4人のボランティアの皆様はインドの新たな一面を語り継いで下さることと思いま  
す。

NDRFを日本へ派遣して下り、諦めることなく傷つけないように手作業で5遺体もの収容をして下さ  
ったインドの国に育まれた御心に、心よりお礼申し上げます。

日本インド学生会議も、これから学生と学生の対話や活動を支えて下さる多くの皆様のお力をいただき  
ながら、その成果がインドと日本にとりまして財産のような活動だと語り継がれるような一期一期が重  
ねられることを願っています。

これまで16年間、多くの皆さまからの温かなご協力で歩んでくることができました。どうぞ、これか  
らもよろしくご教導いただけますよう、よろしく願いいたします。

## 第16回日本インド学生会議に寄せて

日本インド学生会議 OBOG 会 会長 鈴木 佑輔 様

---

第16回日本インド学生会議も無事に全日程を終えることができました。

インド、日本双方の多くの方々のご支援、ご協力により会議が無事に開催することができたことをここに御礼申し上げます。

第16期日本インド学生会議の日本のメンバーには、インドへの出発前に話をする機会があり、また帰ってきてからも話することができました。出発前は、期待と不安が混じった表情をしていました。帰国後は、落ち着いた目の奥に力のある表情をしていました。「会議はどうだった？」との問いには、「面白かったです」とすぐに返ってきました。

インドへ行き、多くのインドの友人に出会い、一緒にチャイを飲み、食事をし、話すことができたのだと思います。一緒のバスや電車にのり、同じ風景を見、風を感じながら、自分の生い立ちや家族のことを話したのだと思います。時間が経つにつれ、もっと一緒にいたい、もっと話がしたい、もっと一緒に創りたいと「もっと」という気持ちが増えるにつれ、笑ったり、言い合いになったり、涙を流したのだと思います。

出発前は、「インド人の学生」と「日本人の学生」だった彼らは、別れる時には〇〇さんと〇〇くんと名前で呼び合い、お互いにとって他のだれとも一緒にできない人間関係を築いたのだと思います。

今、残念なことに日本は、中国や韓国との関係が悪化しています。日中国交正常化40周年の式典も中止や延期になったことは残念なことに思います。さらには、両国の学校同士の交流や市民レベルの交流さえも中止や延期になったことにはとても残念なことに感じています。

学生会議の出会いは、国として感じていたことを多様な個人の集団として認識させてくれる出会いでもあると思っています。どんなことがあっても、学生会議で出会ったダガーさんの考えはどうだろう、アヌパマさんはどう思っているのだろうかと思いを馳せ、尋ね、そしてお互いを訪ねること、そして話し合うことを続けたいと思っています。

帰国した16期の日本側のメンバーの表情に改めてその思い強くし、また少くないトラブルはあったものの、この16回日本インド学生会議がしっかりとその成功を納めることができたことを感じました。

この報告書を読まれる皆様には、今度とも日本インド学生会議に対して応援を頂けますようよろしくお願い致します。また第16回日本インド学生会議に参加された日本、インド双方の学生の皆さんには改めてその努力と成果に胸を張り、大切にしたいと思っています。

---

# 第一部 日本インド学生会議

*THE 16<sup>th</sup> JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE*

---

1. 基本理念	24
2. 概念	25
3. 沿革	26

# 1. 基本理念

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私ども日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

1、 学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。

2、 上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。

次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的關係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互いに誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生身のインド人、インド文化を体験することができます。

そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。

## 2. 概要

名称	日本インド学生会議（英語名：Japan-India Student Conference）
設立年月	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
顧問	保坂俊司
組織構成	実行委員会、OBOG会、創設発起人(3名)、顧問(1名)、賛助会員 (実行委員会…参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校に所属する学生)
協力団体	インド側パートナー、国際協力ユースネットワーク「絆」
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、お互いの社会、文化、価値観などを理解し合うことで、学生という立場での日印友好関係を築く。そして討議結果や交流の体験を社会に発信し、国際社会に貢献する。
活動概要	事前活動…組織運営、勉強会、合宿 本会議…学生同士のディスカッション、ホームステイ、フィールドワーク、文化交流（毎年日本、インドのどちらかで開催する。） 事後活動…報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集 週に1回ほど定期的にミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書
広報活動	ホームページ、ブログ、twitter、facebook

日本インド学生会議は1997年のコルカタ大会を第1回目として始まり、2012年で第16回目を迎えます。2001年にデリー大会が始まり、2009年から始まったチェンナイ大会も現在まで続いています。プネーで開催したこともあり、2012年はバンガロールにも訪れました。このように、開催年によって開催場所や内容は変わります。

運営は実行委員である学生が行っています。OBOG会、創設発起人、顧問からの助言を受け、学生でありながら、日本とインドを結ぶ団体としての意識をもって活動しています。

対外活動としては、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくため、多くの人にインドに関心を持っていただくために、講演会やイベントの開催などを行っております。また、社会と接点を持って活動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。他の同じような志を持つ学生会議団体とも交流を図り、お互いに切磋琢磨しております。

## 3. 沿革

### 沿革（2012年11月現在）

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足  
（石津達也、長浜浩子、後藤千枝）

#### 第1期

1996年 10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足  
11月 白田雅之氏（東海大学文学部教授）顧問就任  
1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣  
8月 第1期日本インド学生会議本会議  
（於：カルカッタ 8月2日～9月11日）  
11月 第1期本会議報告会開催

#### 第2期

1997年 11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足  
1998年 1月 （財）アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加  
2月 機関紙第1号発行  
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣  
4月 （財）国際教育財団より助成金給付  
第1回総会開催（各種規約施行）  
6月 （財）三菱銀行国際財団より助成金給付  
機関紙第2号発行  
7月 会議前合宿  
8月 第2期日本インド学生会議本会議  
（於：カルカッタ 8月5日～15日）  
9月 （財）吉田茂国際基金より助成金給付  
10月 （財）アジアクラブ主催イベント  
インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加  
第2期本会議報告会開催

#### 第3期

1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足  
機関紙第4号発行  
12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催  
1999年 2月 「同上」討論会第2回開催  
3月 機関紙第5号発行

- 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣  
(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付  
(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
- 8月 福永正明氏(拓殖大学)顧問就任  
機関紙第6号発行
- 9月 本会議直前合宿
- 10月 第3期日本インド学生会議本会議 (於:東京 10月2日~13日)  
機関紙第8号発行  
「ナマステ・インディア」参加
- 12月 第3期本会議報告会開催  
第3回総会開催

#### 第4期

- 1999年 12月 第4期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2000年 1月 「第1回学生会議連絡協議会フェア」参加  
JISC公式ホームページ作成
- 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
- 4月 機関紙第9号発行  
第4回総会開催  
「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCN フェア2000)参加
- 5月 (財)日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
- 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授を迎えての  
ヒアリング開催  
(財)三菱銀行国際財団・(財)吉田茂国際基金より助成金給付  
機関紙第10号発行
- 8月 機関紙第11号発行  
本会議団結式・壮行会開催  
第4期日本インド学生会議本会議  
(於:カルカッタ 8月7日~26日)
- 9月 (財)日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席  
帰国報告会主催
- 10月 「ナマステ・インディア」参加  
(財)インドビジネスセンター主催「日印ITシンポジウム」参加  
(財)日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
- 11月 国際基督教大学学園祭参加  
インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催  
機関紙第12号発行

- 「学生会議連絡協議会合同報告会」参加  
 12月 第4期本会議報告会開催  
 駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催  
 第5回総会開催

## 第5期

- 2001年 1月 第5期日本インド学生会議実行委員会発足  
 2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催  
 4月 SCN フェア 2001 参加  
 (財) 国際教育財団より助成金給付  
 5月 機関紙第13号発行  
 日印議員連盟訪問  
 外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問  
 6月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催  
 日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催  
 岐阜女子大学南アジア研究センター主催  
 「日印 IT シンポジウム」参加 協力  
 7月 機関紙第14号発行  
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付  
 直前合宿  
 国際交流基金より助成金給付  
 福永正明氏顧問退任  
 8月 第5期日本インド学生会議本会議  
 (於：デリー・コルカタ 8月2日～23日)  
 9月 帰国報告会開催  
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付  
 10月 「ナマステ・インディア」参加  
 11月 亜細亜大学学園祭参加  
 機関紙第15号発行  
 12月 第5期本会議報告会開催  
 第6回総会開催

## 第6期

- 2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足  
 2月 第3期メンバーからのヒアリング  
 3月 機関紙第16号発行  
 4月 小野基先生(筑波大学教授)からのヒアリング開催  
 SCN フェア 2002 参加

- 在インド大使館後援名義受理  
 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 5月 保坂俊司氏(麗澤大学)顧問就任  
 (株) インドビジネスセンター後援名義受理
- 6月 勉強会集中合宿
- 7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加  
 (財) 日印協会後援受理  
 (財) アジアクラブ後援名義受理  
 インドセンター後援受理  
 外務省後援名義受理
- 8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
- 9月 本会議直前合宿  
 (財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付  
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付  
 機関紙第 17 号発行
- 10月 (財) 国際交流基金より助成金給付  
 (財) 東京都国際交流財団より助成金給付  
第 6 期日本インド学生会議本会議  
 (於: 東京 10 月 18 日~31 日)
- 12月 第 6 期本会議報告会開催

### 第 7 期

- 2002 年 12 月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2003 年 1 月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成
- 3 月 機関紙第 18 号発行
- 4 月 実行委員交流合宿  
 SCN フェア 2003 参加
- 5 月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 6 月 (財) 国際交流基金より助成金給付  
 勉強会合宿(分科会案作成)  
 学生会議連絡協議会情報交換会参加  
 (財) 日印協会より後援名義受理  
 デリー・コルカタに先遣隊派遣
- 7 月 機関紙第 19 号発行  
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付  
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付  
 (財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付

- 8月 本会議直前合宿  
関係者挨拶回り  
第7期日本インド学生会議本会議  
(於：デリー・コルカタ 8月9日～9月2日)
- 10月 報告書作成  
小学校訪問(社会還元事業)計4回  
「ナマステ・インド」参加  
(財)東京都国際交流財団より助成金給付
- 11月 第7期本会議報告会開催  
「インドの魅力を発見する会」主催パネルディスカッションに  
参加
- 12月 第7期本会議報告会開催

### 第8期

- 2003年 12月 第8期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2004年 1月 第8期日本インド学生会議「本会議案」作成  
学生会議総会開催
- 2月 ミーティング開始
- 3月 大使館主催のパーティーに参加
- 4月 機関紙第20号発行  
OB・OGとの懇親会  
第8期募集〆切(4月末)  
SCNフェア2004(29日)参加
- 5月 メンバー交流合宿(9、10日)  
(財)吉田茂国際基金より助成金給付  
(財)国際教育財団より助成金給付  
(財)日商岩井億歳交流財団より助成金給付
- 7月 機関紙第21号発行  
本会議前直前合宿(31日、8月1日)
- 8月 第8期日本インド学生会議本会議  
(於：デリー・コルカタ 8月11日～30日)  
在コルカタ日本総領事館より後援名義受理
- 10月 第9期実行委員募集開始  
「ナマステ・インド」参加(16、17日)  
小学校訪問(社会還元事業)  
報告書作成(10月末発行)
- 11月 第8回日本インド学生会議報告会開催(28日)

## 第9期

- 2004年 12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2005年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始
- 4月 SCN フェア 2005 (29日) に参加
- 5月 ミーティング開始  
OBOG インタビュー実施
- 6月 合宿実施
- 7月 分科会トピック決定
- 8月 ミーティングを週2回に変更  
本会議直前合宿 (11・12日)  
日本インド学生会議機関紙発行  
第9期日本インド学生会議本会議 (於：東京 8月28日～9月12日)
- 9月 第9期日本インド学生会議本会議終了 (12日)  
コルカタ側メンバー帰国 (13日)  
デリー側メンバー帰国 (14日)
- 10月 報告書作成開始  
日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」に協力 (1・2日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第9回日本インド学生会議本会議報告会 (11日)

## 第10期

- 2005年 11月 第10期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2006年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始 ミーティング開始
- 4月 SCN フェア 2006 参加
- 5月 合宿実施 (26・27日)
- 6月 インド大使就任パーティー  
先遣隊派遣 (10日～19日)  
合宿実施 (23・24日)
- 7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
- 8月 シン大使就任パーティー  
第1回インド知識経済勉強会参加  
第10期日本インド学生会議本会議  
(於：プーネ・コルカタ・デリー 8月24日～9月19日)
- 9月 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2006」に協力

(23・24日)

- 10月 インディアンデイ開催(28日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第10回日本インド学生会議本会議報告会(26日)

### 第11期

- 2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足  
(以降毎週土曜ミーティング実施)  
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年 1月 事業計画書・予算案作成、広報(新メンバー募集)  
アイセック主催インド勉強会参加(7日)、財団渉外・申請
- 2月 広報(新メンバー募集)  
後援渉外・申請
- 4月 (財)国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請  
(財)日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 6月 OBOG会主催 第1回JISCDAY(30日)  
合宿実施(30日・7月1日)  
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、  
在ムンバイ総領事館より後援名義受理  
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション  
先遣隊派遣プネー・デリー(29日~8月4日)  
外務省より後援名義受理、日印交流年イベントとして認定  
日印交流年実行委員より助成申請受理  
(財)国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
- 8月 直前合宿実施(12日・13日)  
第11期日本インド学生会議本会議  
(於:コルカタ・プネー・デリー 8月15日~9月7日)
- 9月 本会議終了(9月7日)、反省会  
日印文化交流祭「ナマステ・インドア2007」に協力(29日・30日)
- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成  
第11期日印学生会議報告会実施(3日オリンピックセンターにて)

### 第12期

- 2007年 11月 第12期日本インド学生会議実行委員会発足

- 第11期メンバーからのヒアリング  
 各種資料作成（事業計画書・予算書など）  
 第1次京都先遣隊派遣  
 IIT同窓会講演会（於：慶應義塾大学）を補助  
 12月 国際開発研究者協会（SRID）学生部にて講演  
 第1次勉強会合宿  
 財団助成・後援の申請開始  
 2008年 2月 日本インド学生会議OBOG総会  
 3月 第2次勉強会合宿  
 （財）日印協会後援名義受理  
 4月 学生会議合同説明会（日印・日越・日韓・日中・日ケ）実施  
 外務省後援名義受理  
 5月 インドセンター後援名義受理  
 京都府後援名義受理  
 第2次京都先遣隊派遣  
 本会議直前合宿  
 （財）日商岩井国際交流財団より助成金給付  
第12期日本インド学生会議本会議  
 （於：東京・京都 5月29日～6月11日）  
 6月 （財）日印協会より助成金給付  
 7月 （財）吉田茂国際基金より助成金交付  
 8月 報告書完成  
 第12期本会議報告会実施
- 第13期
- 2008年 10月 第13期日本インド学生会議実行委員会発足  
 第12期メンバーからのヒアリング  
 11月 各種資料作成（事業計画書・予算書など）  
 実行委員の募集  
 12月 学生会議合同講演会の企画と実施  
 （日中学生会議、日露学生会議と協働）
- 2009年 1月 実行委員の募集  
 定例会  
 2月 日本インド学生会議OBOG総会  
 学生会議合同講演会の企画と実施  
 （日中学生会議、日露学生会議と協働）  
 取材（メンターダイヤモンド学生記者クラブよりウェブ記事の取材）  
 3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施

- 予算案の見直し  
 (財) 日印協会後援名義受理  
 (財) 双日国際交流財団助成金給付  
 (財) 吉田茂国際基金助成金給付  
 4月 (財) 国際交流基金助成金給付  
 学生会議評議会合同説明会実施  
 外務省後援名義受理  
 在インド日本国大使館後援名義受理  
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理  
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理  
 5月 日本インド学会議 OBOG 会主催  
 「キャリアエクステンジ」参加  
 学生会議評議会交流会  
 学生会議合同講演会の企画と実施（日中学生会議、日露学生会議と協働）  
 於：東京大学5月祭  
 6月 (財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付  
 学生会議合同勉強会（日中学生会議、日露学生会議と協働）  
 勉強会合宿  
 7月 合宿  
 8月 先遣隊派遣(8月5日～)  
第13期日本インド学生会議本会議  
 (於：コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日～9月7日)  
 9月 ナマステインディア 2009 出店  
 報告書作成  
 10月 報告書作成、決算報告  
 財団渉外、14期引き継ぎ準備  
 11月 第13期報告会実施  
 学生会議評議会合同報告会実施  
 第14期引き継ぎ

#### 第14期

- 2009年 12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足  
 第13期メンバーからのヒアリング  
 財団渉外  
 各種資料作成（事業計画書・予算書など）  
 定例会  
 2010年 1月 日本インド学生会議 OBOG 総会  
 メンバーリクルーティング

- 定例会
- 2月 財団渉外  
SCN ミーティング  
定例会
- 3月 SCN イベント  
予算案見直し  
(財)日印協会後援名義受理  
(財)双日国際交流財団助成金給与  
(財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4月 (財)国際交流基金助成金給与  
分科会(勉強会)合宿実施(10日・11日)  
SCN イベント(25日)
- 5月 SCN 交流会(27日)  
文化交流会(日舞・ダンス練習)合宿実施(15日・16日)  
入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 ソフトブリッジソリューションズ訪問(25日)  
(財)三菱UFJ国際財団より助成金給付
- 7月 在インド日本国大使館 後援名義受理  
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理  
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理  
分科会(勉強会)合宿実施(3日・4日)  
直前合宿実施(31日・8月1日)
- 8月 先遣隊派遣(8月8日～)  
第14期日本インド学生会議本会議  
(於:コルカタ・チェンナイ・デリー8月14日～9月4日)
- 9月 「ナマステ・インディア2010」協力  
報告書作成
- 10月 報告書完成 決算報告  
財団渉外  
第15期引き継ぎ準備
- 11月 第14期報告会実施(14日、オリンピックセンターにて)
- 12月 第15期引き継ぎ

### 第15期

- 2010年 12月 財団渉外  
各種資料作成(事業計画書・予算書など)
- 2011年 1月 メンバーリクルーティング  
第15期日本インド学生会議実行委員会発足

- 第14期メンバーからヒアリング
- 2月 財団渉外
- 3月 東日本大震災により活動休止
- 4月 予算案見直し
- 5月 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 (財)三菱UFJ国際財団より助成金給付  
合宿オリンピックセンターにて(10・11日)
- 7月 外務省後援名義受理  
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理
- 8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理  
JICA後援名義受理  
公益財団法人日印協会後援名義受理
- 9月 本会議直前合宿オリンピックセンターにて(3日)  
経済産業省後援名義受理  
在日インド大使館後援名義受理  
第15期日本インド学生会議本会議(於:東京 9月10~21日)  
「ナマステ・インディア2011」協力  
報告書作成
- 10月 報告書作成  
財団渉外  
第16期引き継ぎ準備
- 11月 報告書完成決算報告  
第15期報告会実施(26日、東京大学にて)
- 12月 第16期引き継ぎ

---

## 第二部 活動報告

### *Activity report*

---

1. 年間活動報告	38
2. 各局活動報告	40

# 1. 年間活動報告

第16期日本インド学生会議 年間活動（2012年11月現在）

- 2011年 12月 財団渉外
- 2012年 1月 メンバーリクルーティング
- 2月 入会希望者へのオリエンテーション
- 3月 第16期日本インド学生会議実行委員会発足  
第15期メンバーからヒアリング
- 4月 （財）双日国際交流財団助成金給与  
（独）国際交流基金助成金給与  
予算案の見直し  
定期勉強会開始  
ブログ更新開始  
新歓イベント参加 主催：国際協力学生プラットホーム「絆」（15日）  
新歓説明会（29日）  
インド側とやり取り開始
- 5月 新歓イベントビラ設置 主催：YDP Japan Network（5日）  
バンガロール訪問決定  
国交樹立60周年記念イベント認定  
（財）三菱UFJ国際財団助成金給与
- 6月 笹井大嗣氏からのヒアリング  
機関誌第1号発行  
参加メンバー確定（リクルーティング終了）  
事前合宿実施（30日・7月1日）
- 7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理  
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理  
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理  
在インド日本国大使館後援名義受理  
（財）日印協会後援名義受理  
中津雅昭氏による勉強会
- 8月 機関誌第2号発行  
在日本インド大使館後援名義受理  
第16期日本インド学生会議本会議  
（於：コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー 計4都市  
8月8日～9月4日）

- 9月 ナマステ・インドゥア 2012 協力  
報告書作成開始
- 10月 財団渉外  
報告会準備
- 11月 報告書完成  
第16期報告会（於：東京外国語大学 10日）  
総会  
機関誌第3号発行（予定）

## 2. 各局活動報告

### 学術局 (Academic)

局長：中嶋広明

-概要-

学術局は本会議の分科会やフィールドワークで十分な知識を持って臨めるようにメンバーを支援するのが目的だ。またカウンターパートと分科会についての調整も行う。

-反省-

「支援」があいまいでなかなかできなかったように思う。カウンターパートとの調整でも互いの理解が根本から異なることがありかなり苦勞した。十分な引き継ぎだけでなく経験者による取り仕切りが必要だと感じた。

### 国際渉外局 (Public Information)

局長：山口久美子

-概要-

この仕事の簡単な説明をすると、インド側との連絡である。日本人メンバーで話し合ったこと、例えば、日程、分科会のトピック、行きたい場所などを向こうでお世話になる先生方やコーディネーターの方、時には学生たちへ伝えることである。在インドの日本国大使館や総領事館とも連絡をとっていた。インドへ行く前の準備段階でスケジュール調整や後援申請でこなさなければならないことが多くあり、また今年は初の4都市訪問ということでいつもメールチェックをして忙しいと思っていたが、普段の学生生活ではすることのない経験ができた。メールでの言葉遣いやマナーなど周りにアドバイスをいただきながら学ぶことができ、充実したやりがいのある役割だったと感じている。

-反省-

より効率的に仕事をこなすには、まず全体の日程を決めることが重要ではないかと感じた。今回は渡航日程を修正したため、そのときはまだ時期ははやかったが、あとから行く場所を決め、分科会や交流プログラムの日程を入れていくため、少々焦りを感じていた。また渉外では、絶えず連絡をとり続けることも重要ではないかと思う。なかなか返事をせず失礼なことをしたこともあったため、その後は注意して、連絡を受け取ったら確認のメールだけでも送るようにするなどした。

## 国内渉外局 (Liaison in Japan)

---

局長 奥村理絵

局長から一言：仕事はするべき時期に

-概要-

国内に在住されている方との連絡を担当した。7月に後援名義使用許可申請、航空券の手配を行った。またお世話になっている方々へ報告書のメッセージのお願い・報告会のご案内の連絡、会議参加希望者との連絡も行った。

-反省-

後援名義使用許可申請が出発ぎりぎりの7月になってしまった。許可やメッセージのお願い・報告会のご案内は、時間の余裕をもってする必要がある。いつまでに何が必要なのか、そのためにはいつ何をすべきなのか逆算して行動しなければならない。

## 広報局 (Public Information)

---

局長：馬場 祐作

局員：宮澤ティナ

-概要-

私たち広報局は機関誌並びに報告書の発行、本会議終了後に催される報告会の準備と運営、JISCの活動を広めるための広報活動を行っている。Facebook、Twitter、JISC公式 Blog による活動報告や、本会議を中心とした撮影係を担っている。

-反省-

本会議終了に伴い取り掛かる仕事がこの報告書作成である。だが印刷所やレイアウトが決まらず手間取った上に、帰国後はスムーズに文章が集まらなかった。以上の点をふまえ、今後の課題として解決策を見出し、次期 JISC メンバーへ引き継いでいきたいと思う。

## 企画局

局長：湯村将貴

### -概要-

企画局の仕事は、主にインド訪問前に本会議の訪問先を決めることだ。日本側のメンバーと相談し、インドの観光場所や工場にどこタイミングで訪問するかをインド側に伝える。また、日本側の出し物を考え、事前合宿を企画するなど、メンバーの交流促進に力を入れた。今年の事前合宿の場所である高尾の森わくわくビレッジを選定し、そこでなにをやるか考えるのも企画局の仕事だった。本会議が終わった後は、日本在住のインド人の方々と交流するためインド人コミュニティーの代表者の方々と連絡をとった。

### -反省-

メンバーのほとんどがインドに訪れたことのない中で、訪問先を決めるのが難しかった。訪問先は16期の分科会のテーマに添ったものを選ぶ必要があったため、分科会の内容が煮詰まっていない4、5月の段階で動くことが出来なかった。また、JISCは個人旅行ではなく団体行動のため、訪問先については事前にメンバーとよく話し合っておく必要があり、なかなか進まないこともあった。分科会のテーマを理解し、訪問先に不満がないようメンバーのコンセンサスをとることに苦労したが、やりがいのある仕事であった。事前合宿については、早めに場所を決め、予約をとっておく必要がある。メンバー同士が仲を深められるかどうかは企画局の働きにかかっている。

## 財務局 (Financial Bureau)

---

局長：日野原由佳

-概要-

財務局は、日本インド学生会議を助成団体への申請から本会議中のお金の収支を管理する。本会議準備中には助成団体からの助成金受領を行い、インドでの本会議で使うお金の試算をする。そして、本会議中はインドにて学生会議開催に必要なお金の支出を滞在費から移動費、食費まで管理する。本会議終了後には決算作成や来期の助成に向けて申請準備を行う。

-反省-

財務局に決まったのが渡印三か月前で、そこから予算作成や助成団体との連絡を取り始めた。今年はインド開催だったため、滞在費や移動費がいくらかかるのか試算するのが困難だった。加えて、今年度は新たにバンガロールという一都市増えたなかでのお金の運用は本当に難しかった！！インドでは助成金を大切に使うため、滞在費を抑えたり、安いスーパーでお水を買いだんだりとさまざまな場面でメンバーに協力してもらえた。リスク管理については、徹底的に行ったことで無事に渡印日程を終了できた。反省点はもっと早く財務の仕事を行えていれば、分科会や勉強会にもっと積極的に参加することができたのでは、と思っている。

---

## 第三部 本会議活動報告

### *Plenary session activity report*

---

1. 実施要綱	45
2. 本会議日程	48
3. 本会議日録	49
4. 企業訪問	70
5. 分科会報告	74
6. 文化交流・フィールドワーク報告	110
7. ホームステイ報告	117
8. 本会議反省	122
9. 修了書	123

# 1. 実施要綱

事業名： 第16期日本インド学生会議本会議  
(外務省より日インド60周年記念事業 認定)

主催： 第16期日本インド学生会議実行委員会

開催期間： 2012年8月8日(水)～9月4日(火)

開催地： コルカタ 8月9日(木)～18日(土)  
チェンナイ 8月19日(日)～24日(金)  
バンガロール 8月25日(土)～29日(水)  
デリー 8月30日(木)～9月4日(火)  
※開会式前後も含む



助成： 公益財団法人 双日国際交流財団  
公益財団法人 三菱UFJ国際財団  
独立行政法人 国際交流基金

個人協賛： 長谷川 康司 様

後援： 公益財団法人 日印協会

国際交流基金 ニューデリー日本文化センター  
在インド日本国大使館  
在コルカタ日本国総領事館  
在日インド大使館  
チェンナイ日本国総領事館

協力： コルカタ 日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)  
Destiny Foundation/Reflection  
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI  
Jawaharlal Nehru University(JNU)  
東京大学インド事務所  
Bangalore University, Centre for Global Languages, Japanese Courses  
Bangalore University, KOYO group  
INFOSYS  
Sony India Software Centre  
国際交流基金 ニューデリー日本文化センター  
YDP Japan Network「絆」  
外務省大臣官房国内広報課 笹井 大嗣 様  
大東文化大学 中津 雅昭 様

参加学生：

## 日本

第16期日本インド学生会議実行委員会

委員長	豊原 智恵	東京外国語大学ヒンディー語専攻3年
副実行委員長・学術局	中嶋 広明	東京大学教養学部2年（コルカタのみ参加）
国内渉外局	奥村 理絵	早稲田大学文化構想学部1年
国際渉外局	山口 久美子	東京外国語大学ヒンディー語専攻2年
広報局	馬場 祐作	首都大学東京経営学コース3年
広報局	宮澤 ティナ	慶應大学総合政策学部1年
財務局	日野原 由佳	早稲田大学大学院政治学研究科1年
企画局	湯村 将貴	早稲田大学国際教養学部3年

## コルカタ

President	Manasi SINGH	Calcutta University, Jain College
V P (Cultural)	Deya RAY	National Institute of Fashion Technology
VP (Academics)	Saheli BARUA	Calcutta University, RKM
VP (Economics)	Debanka MITRA	IIPM

VP (Society & Governance)	Budhaditya PYNE	Jadavpur University
VP (Event Management)	Anunita BANERJEE	Calcutta University
VP (Finance)	Aritra CHOWDHURY	Jadavpur University
Communicator	Malyashree BHADURI	West Bengal University of Technology
	Sweta AGARWAL	Yadavpur University, J.D. Birla Institute
	Debalina CHATTERJEE	Calcutta University, Shri Shikshayatan
	Pooja DAS	Calcutta University, Lady Brabourne
	Pratishtha CHANDA	Calcutta University, Vivekananda College
	Shatavisha SENGUPTA	West Bengal University of Technology
	Shalini RAKHIT	West Bengal University of Technology
	Sayan MUKHERJEE	Calcutta University
	Sayantana BHATTACHARYA	West Bengal University of Technology
	Soham PAL	West Bengal University of Technology
	Partha DAS	West Bengal University of Technology
	Supratik Sil ROY	West Bengal University of Technology

### チェンナイ

Students of  
 Meenakshi College for Women  
 Shri Shankarlal Shasun Jain College for Women  
 Meenakshi Sundararajan Engineering College  
 Quaid-E-Millath Government College for Women

### デリー

Students of Jawaharlal Nehru University, School of Language, Japanese

Communicator	Vikash PALIWAL	Jawaharlal Nehru University MA 2
	Kaushika SINGH	Jawaharlal Nehru University MA 2

その他 JNU から約 30 名参加

## 2. 本会議日程

日にち	場所	午前	午後	宿泊
8/8(水)	コルカタ	成田出発	デリー乗換、コルカタ到着	ラーマクリシュナミッション
8/9(木)		自由時間	仏教寺院見学、買い物	
8/10(金)		NGO 訪問	ネータージーバワン、マザーハウス、ビルラー寺院見学	
8/11(土)		文化交流会	開会式	
8/12(日)		映画鑑賞	ホームステイ	
8/13(月)		分科会①	分科会②	ラーマクリシュナミッション
8/14(火)		農村見学	木材加工工場見学	
8/15(水)		分科会③	分科会④	
8/16(木)		分科会⑤	ヴィクトリア記念堂観光/ 総領事館 公邸訪問	
8/17(金)		インド博物館観光	閉会式、さよならパーティー	
8/18(土)	移動	自由時間	コルカタ出発、チェンナイ到着	D & A
8/19(日)	チェンナイ	開会式、孤児院訪問	日本語スピーチコンテスト	
8/20(月)		マハーバリプラム遺跡観光	買い物/マリーナビーチ観光	
8/21(火)		総領事館訪問	交流プログラム①/アニメーション会 社訪問/Nihon Technology 訪問	
8/22(水)		交流プログラム②	交流プログラム③	ホームステイ
8/23(木)		鋳型工場見学	買い物/総領事との談話	D & A
8/24(金)		交流プログラム④	ジャパンナイト参加	
8/25(土)	移動	チェンナイ出発、バンガロール到着	自由時間	ホームステイ
8/26(日)	バンガロール	自由時間	バンガロール大学の学生との交流	
8/27(月)		インフォシス訪問	ソニーインド訪問/能鑑賞	
8/28(火)		バンガロールパレス観光	観光/東京大学インド事務所訪問	
8/29(水)	移動	自由時間	バンガロール出発、デリー到着	JNU ゲストハウス
8/30(木)	デリー	日本留学フェア参加	開会式	
8/31(金)		JNU 授業見学	大使館訪問	
9/01(土)		分科会①	分科会②	
9/02(日)		分科会③	分科会④/閉会式	
9/03(月)		アグラ観光		
9/04(火)		チャウラ先生との談話	自由時間/デリー出発、翌日成田到着	

## 3. 本会議日録

～コルカタ～

### 8月8日 奥村理絵

9:30 成田空港集合  
11:30 成田出発  
16:55 デリー到着  
20:30 デリー出発  
22:45 コルカタ到着  
24:00 Ramakrishna Mission Institute  
of Culture (RM) 到着



いよいよ出発の日。空港に時間通り集まって荷物も預けた後、空港で出会ったエアインディアのCAさんと写真撮影をした。無事9時間のフライトを終えてデリーに到着。デリーの空港はとてもきれいだった。コルカタへ向かうためトランジットをする際に問題発生。チケットを受け取る際に、メンバー1人のチケットが別人のものと入れ替わっていることがわかった。少し時間がかかったが、無事チケットを受け取った。その後空港のマックでインド限定マハラジャバーガーを食べた。コルカタ到着後、名札を下げた見知らぬおじさんが荷物を運んでくれたが、チップを請求された。実際にこういうことがあるのだと驚いた。コルカタメンバーの男の子たちが深夜にも関わらず空港まで迎えに来てくれた。彼らとともにラーマクリシュナミッションへ到着。チェックインし、すぐに就寝した。

### 8月9日 山口久美子

コルカタ到着は前日の深夜であったにも関わらず早く目が覚め、朝のティータイムをすがすがしく過ごした。日本よりも湿気を感じるが、ACがなくてもファンと蚊帳のおかげか考えていたより快適に休めることができた。朝からミルクティーを飲むことができて幸せだった。朝食を食べて、ぶらぶら散策した。近くの部屋のバングラデシュ（インドかも）の男性と知り合いになったのだが、この方がとてもいい人で、換金のため店を何件も一緒にまわってくださった。昼食後、文化交流会のためのダンスや歌の練習をしたあと、



コルカタメンバーがやってきて顔合わせ。コルカタ学生は19名だ。自己紹介・おしゃべりのあと、近くの仏教寺院へ連れて行ってくれた。南無妙法蓮華経を唱え続けた。そこからもう少し歩くと、ショッピ

ングモールがある。色とりどりのサリー、アクセサリ、化粧品等見た後インドのドリンクとつまみで小腹を満たした。ヒンディー語の先生が勧めていたジャルジーラーを始めて飲んだが、不思議な味がした。餃子のようなモモも食べた。雨が降り始めたので（このときはまだ雨期）ミッションへ戻り、夕食。私はシャワーを浴びたあと日記をかこうとしてそのまま電気をつけたまま寝ていた。

この日は長崎に原爆が投下されて67年目の日。高校卒業後2年連続で故郷から離れての追悼である。こちらでは私が長崎出身だと言うと皆うなずく。当時の体験を語れる方が少なくなっている中、日本から離れたインドでも関心を持っている人々がいる。日本人として意識していきたいと感じた。

## 8月10日 宮澤ティナ

この日、女子は早朝から、女性のエンパワメントをしている NGO を見学した。Destiny Foundation という団体で、女性の人身売買と奴隷待遇根絶を NGO 方針として掲げている。女性たちがつくるバッグや iPad カバーなどの製品は細かく丁寧な縫い目で揃っていて、彼女たちの器用さを手にとって目にするのができた。少し会話を交えたときに感じたのは、責任者の方からうかがった彼女たちの過去と、現在の彼女たちの笑顔は別物であるということだ。人見知り、もしくは少し怖がる女性もいたが、その多くは私たちに笑顔を見せてくれた。その後インド人学生と文化交流会を楽しんだのち、皆でネータージー・バワンを見学した。ここはスバース・チャンドラ・ボースの旧家で、日本と関わりのある自由インド仮政府やインド国民軍に関する資料



も多かった。その後オートリキシャから徒歩で迷子になりそうな路地を抜けて、マザーハウスへ向かった。私たちが着いたときはお祈りが始まったところだった。お祈りの言葉を聞いた後、隣のブースにある記念館を見て回った。そしてビルラー寺院に移動した。中に荷物を持っていくことができないと聞いて、私たちは二手に分かれて、お互いの荷物を持ちあった。ビルラー寺院で別のグループの参拝が終わるのを待っているときには、女子学生と結婚についての意見交換をすることもできた。早朝から夕刻まで非常に忙しい一日だった。

## 8月11日 日野原由佳



午前はジャダプール大学にて文化交流の一環としてサリーやクルタの着付けとヘナを行った。各生徒は両親サリーを持ち寄り、私たちに着付けを行った。女子はサリー、男子はクルタといったインドの代表的な民族衣装を纏った。一枚の布から創作されたものは圧巻で、サリーをメディアや本でしかみたことのなかった私にはすばらしい経験となった。また、ヘナを用いて手や腕への装飾を行った。結婚式などのセレモ

ニーでインドの女性達はヘナを用いた幾何学模様を腕や足に描くようだ。私たち女子メンバーもヘナの装飾に挑戦した。私はベンガル語とヒンディー語の二ヶ国語で自分の名前を描いてもらった。サリーやヘナは初めてであったが、本場のインド人学生から教わったことからインドの文化を肌で感じたことは貴重な経験となった。

午後は待ちに待った開会式を行った。ダンスの最終確認のために早めに会場入りして浴衣を着つけた。私たちのリハーサルが終わるころにはコルカタ総領事を始め、領事館関係者の方々や、日本人会の方々が訪れ、開会式にはお言葉をいただいた。日本インド学生会議はさまざまな人々の協力と理解によって成り立っていることを改めて自覚することになった。日本側のパフォーマンスは音響などのトラブルがあったものの、開会式を見に来た方々にはねぎらいの言葉をいただくことができた。インド側は演劇や伝統音楽に乗せたダンスを披露していた。終始なごやかなムードで開会式を終えることができ JISC 一同安心した。また、開会式での反省を次都市の式で生かしていこうとミーティングを行った。



8月12日 中嶋広明



いつものようにラーマクリシュナで朝食をとり、いつものように午前10時にロビーに集合する。そしていつものように、行動開始は遅れる。

ところで今日は僕の20歳の誕生日なのであった。という訳で10時の集合から祝いの言葉の嵐。初

めてのことなのでうれしくもあり恥ずかしくもありという気持ちであった。みんなありがとうございました。

その後、タクシーで South City という西洋的なショッピングモールへ行く。インド名物セキュリティチェックという名のスループスの後、コルカタ離れたきれいな館内を通り映画館へ。インド側メンバーが映画のチケットを買ってきてくれ、映画館の中に入った。登場人物の肌がやけに白いのと、音が大きかったのが印象的である。

インド映画を見た後、各ホームステイ先へ移動、と思いきや外に出ると僕の為にケーキを買ってきてくれた。開けてみると名前まで書いてある。僕は家族以外から誕生日を祝ってもらったことがないので、かなりうれしかった。みんなありがとうございました。

そのケーキを囲んで写真を撮り、試食の後、ホームステイ先へ散っていった。スペースがないので僕だけの簡単な話にとどめると、Aritra Chowdhury の家に行ったが、彼は理系かつ東大大学院が選択肢にある学生だったので話があって楽しかったのであった。

## 8月13日 馬場祐作



朝。私は Supratik の家にいた。ホームステイで泊まったからだ。インド人の家族はとてもやさしく私を家族として受け入れてくれた。そして、私のインドの両親から送り出された後、インドのローカルマーケットを見学した。そこはコルカタ中心地のストリートであるゴリアットとは違う空気が流れており、力強さが感じられた。その後ジャドプール大学で初めての分科会が行われた。痛感するのは、英語力の差。彼らは小学生のころから英語を習い、今ではすべての授業を英語で行うという。英

語が分からないことがどれだけ自分の世界を狭めているか思い知らされた。分科会では、通訳の方が各テーブルについており、伝わりづらい部分を補って頂いた。私は、経済の担当であったため、Devanka は欧州危機について、私はグローバリゼーションについてプレゼンテーションし、それぞれのトピックについてディスカッションを行った。また、夜にはフッカバという、香りの付いた煙を吸って楽しむ遊びを紹介してもらった。彼らのうちの1人がデモンストレーションしてくれ、インド人の若者の文化の一端に触れることができた。



## 8月14日 湯村将貴

この日は、コルカタメンバーとの絆が深まった日となった。農村に向かうバスでは、クラブで流れるような音楽を iPod から流し、日本とインド側メンバーのダンスパーティーとなった。農村まで1時間30分ほどだったが、座る暇もなく踊っていたことで、アツという間に目的地、コルカタ北部の Barrackpore に着いた。大型バスから降りて歓迎式の会場に向かうと、すでに日本人を一目見ようと多くの人が集まっており、さながら有名人になった気分だった。赤いきれいなサリーを着た数人の女の子いて私たちを出迎えてくれた。会場の上の階に行くと学校となっており、子ども達が緑色の制服を着て机に向かっていた。生徒達も温かく迎えてくれ、英語は通じなかったものの教室を出るときは優しく手を振ってくれた。しかし、一部の教室には机が無いところもあり、都市部の学校と地方の学校で設備や教育内容に差



があることを感じた。

インド特有の黄麻を使いザルなどの加工品を作っているのを見た後、貧しい人が薬を医者から無料で渡されている建物を見学した。午後は、日本のトイザラスの商品を作っている木材加工工場に行き、一片の木材が製品になるまでの工程を見学することができた。マスクを着用しての見学で、日本で見る商品が、実はインド人など安い労働力によって劣悪な環境のもと作られているのを見ると、モノを大切に使わなければいけないと思った。

## 8月15日 豊原智恵

今日は分科会（2日目）と日本語会話協会（NKK）のパーティーがあった。そして忘れてはならないのが、8月15日はインドの独立記念日だということ。分科会会場のジャダプール大学へ行く途中にも道端にはインドの国旗が飾ってあり、独立記念日の雰囲気町中にあふれていた。分科会の前には国歌ジャナ・マナ・ガナを歌い、独立記念日をお祝いした。午前、午後の分科会で政治・社会グループは、社会の中の女性・移民・NGOについて話し合った。移民は私のトピックで、日本社会の移民や外国人居住者の話をしたかったのだが、話がそれてしまい、もっと事前準備が必要だったと反省することもあった。16時頃分科会を終え、ニガム先生のお宅へ。NKKの設立28周年を祝うために約50人ほどが集まり、歌やダンスの披露があった。日本語協会らしく日本語の歌もいくつか歌われ、私たちも一緒に歌った。NKKに入ってからまだ1か月という子たちとも交流ができ、今後の India-Japan Student Conference のメンバーになってくれるのかもしれないと期待を抱いた。



←独立記念日を祝う国旗

NKK 誕生会→



8月16日 豊原智恵

午前中は分科会のまとめを行い、お昼ご飯を食べてからラジコン飛行機の air show、ヴィクトリア記念堂の見学、夜は領事館での夕食会に招かれた。分科会のまとめ発表は、ディスカッションが終わっていないグループが終わるのを待ち、一度お茶の時間をはさんでからの発表だった。グループの代表者が前に立って発表したが、話し合った時間が2、3日と短く、深い議論に至るのは難しいと感じた。午後、私は国内便チケットの手続きのために、インド側でお世話してくださっている NKK のニガム先生と共に旅行代理店に向かった。インドの旅行会社でやり取りした経験は貴重だったと思う。無事に手続きを済ませた後、タクシーでヴィクトリア記念堂に向かった。着いた時には air show が終わっていて残念だった。記念堂の中庭は広い芝生になっており、学生たちは休日ここでサッカーなどをして遊ぶそうだ。ヴィクトリア記念堂には英領時代の絵画や文物が展示してあり、インドの歴史を感じた。夕方に総領事公邸へ移動し、夕食会に参加した。久しぶりに日本食を見て胸が高鳴った。インド人学生は初めての日本食で、天ぷらが気に入ったようだった。川口総領事と日本とインドの関係や、経済発展についてお話しでき嬉しかった。今後、インドが経済発展していく中で、無くなっていく職が出てくるだろう。そこで働く人は仕事を失い、新しい職を見出すのだろうか……。想像するのは難しい。現実には直面した時にしか見えてこないのかもしれない、そう感じた。



8月17日 山口久美子



朝からメトロに乗ってインド博物館へ。広くてすべて見るのには数日かかるらしく、時間も限られていたためいくつかのセクションしかまわることができなかったが、インドの少数民族のジオラマや様々な動物たちの模型などインド人学生たちと楽しく見て回った。ここには中庭があり、緑で、空気がきれいで、新鮮な気分になれた。次に向かったのはそこから歩いて行けるマーケット。各人ストールやクルターなどお土産として買っていた。

RKM に戻り、昼食・休憩の後は閉会式が行われる会場へ。学生会議に参加した日本・インドメンバーと協力していただいた先生方、また今回関わってくださった方々が集まった。閉会式では委員長の豊原が MOU 締結にサインし、来年もこの学生会議を行うことを示した。メンバー全員が終了証書を受け取

り、日本人が歌を歌った後、インド人メンバーも一緒に『We are the World』を歌った。みんなで肩を組み、本当に家族のように団結していることを実感した。10日間のというインドで最も長く滞在した都市であったし、インド人学生もニガム先生をはじめとして協力して下さった先生方もみんな優しく、一心に向き合ってくさっており、ほんとうに心地よく過ごすことができたので、みんなと別れると思うと悲しくなったが、これが最後じゃないからまた会うから大丈夫、と言われ、本当に素敵な人たちとの出会いに恵まれ、コルカタで過ごすことができて私は幸せだと確信した。この素晴らしい関係がコルカタで止まってしまうのではなく、これからも長く続くようにしたい。



8月18日 湯村将貴

別れの日。コルカタ最終日を迎え私達は、親しくなったコルカタの友人達と離れなければいけなかった。Ramakrishna Mission には、朝からインド側メンバーが見送りに来てくれた。空港に行けるメンバー以外は、ここでお別れだ。とうとうタクシーに乗り込まなければいけない時になると、目に涙を浮かべながら私たちにさよならと言ってくれた。みんなで撮った集合写真は、一生の宝物となった。

チェンナイに到着すると、日本語が非常に堪能な ABK-AOTS DOSOKAI の方達が専用の車を用意して私達を迎えてくれた。私たちの1ヶ月過ごせるだけの重い荷物を持って、彼らが誘導して下さるのでチェンナイの印象は、すでにこのときから良かった。私は、チェンナイという街でどんな人達と出会うのだろうと楽しみになった。

## コルカタでの日々



仏教寺院にて



蚊帳体験



他の都市との連絡



マンゴー丸かじり



ネータージーヴァワン



換金所



ジュート（麻）



農村の診療



NGO 訪問記念樹植林



修了書授与



新聞に取り上げられました。



さよならダンスパーティー

～チェンナイ～

8月19日 日野原由佳



昨夜チェンナイに着いたばかりだったため、チェンナイの町の雰囲気はわからなかった。朝食後、ABK-AOTSDOSOKAIへバスで向かった。DOSOKAIは日本政界の著名人が来訪していることから、日印交流の最先端へ来たのだと思った。開会式ではチェンナイ日程を運営していただいたランガさんにお会いし、彼によるチェンナイのプレゼンを受けた。ランガさんは気さくでやさしい方であり、彼の日本を学ぶに至ったエピソードや、近年のチェンナイー日本関係の見解を伺うこともできた。

開会式を終えて孤児院訪問を行った。インドを多角的に見るという目的の一環として、孤児院を訪問できたことはすばらしい経験だった。両親や片親のいない小学生から高校生くらいまでの子供達が共に勉強している孤児院であった。そこにはたくさんの笑顔があり、私たちの訪問を歓迎しているようだった。私たちもタミル語の挨拶を学び、彼らに話しかけた。また、言葉が通じないながらも日本とインドの国家を両者が歌ったことが印象的だった。短い間だったが、彼らの希望にあふれる目を通じてインドの今後のさらなる発展と社会の底力を垣間見ることができた。

昼食後はABK-ATOSDOSOKAIにおいて日本語スピーチコンテストが行われた。私たちメンバーは審査員という責任を担うことになった。参加者の5分程度に及ぶ日本語のスピーチから日本語の文法や発音などさまざまな角度から審査した。参加者はみな働きながら日本語を学んでおり、



その勉強姿勢には心をうたれることがあった。インド人の語学を学ぶ姿勢に感銘を受けながらも、審査を試みた。審査は拮抗するなかで順番を決定した。一位を受賞したのは努力家と周囲から称されていた男性だった。彼は日本行きチケットと日系企業でのインターンシップを勝ち取った。自国語を熱心にインドで学んでいる人々の姿を見て、日本にはまだまだ外国を魅了するだけの魅力があるのではないかと思った。

## 8月20日 宮澤ティナ



朝から身支度を済ませ、車をつかいチェンナイで有名な遺跡地帯、マハーバリプラムへ向かった。とにかく暑くて、私も日傘をさし続けていた。すぐに喉が渴いた。遺跡の近くへ着いて少し歩くとお土産屋さんの通りが続き、そのそばの緑の芝生の上にヤギがいた。帰り際にはヤギと撮影会を開いた。砂浜の上にそびえ立つ遺跡は、7世紀頃に栄えた都市の跡だというが、今は海と遺跡がメインの観光地となっていた。遺跡に登って写真を撮った。そのまま海の見える方まで歩くと、二人組の日本人

に出会った。彼らも仕事でインドを訪れているようだった。クリシュナのバターボールも見に訪れた。私は体調が優れなかったので車の中で待機していたが、メンバーは車を降りてバターボールを間近で見ていた。その後、その足でマリナビーチへ向かった。ベンガル湾に面する海岸で、12km 続く。また、アンナーサライへ移動し、スペンサープラザを訪れた。インドとは思えないほどのブランドの店からフードコートまでが並び、賑わっていた。この日もまた、あっという間に一日が過ぎた。だが暑いあついチェンナイの日々はまだ始まったばかり。

## 8月21日 馬場祐作



本日は、午前中に在チェンナイ総領事館への訪問、午後 Meenakshi College For Women での分科会、またランガナン氏の会社である日本テクノロジーへの訪問、そして若干16歳の女性が経営しているアニメーション制作会社への訪問とかなりタイトなスケジュールであった。チェンナイの総領事である

中野総領事はとても律儀な印象を受けた。学生である我々に対してもとても真摯に対応してくださった。そして、2つの会社の企業訪問を通じて、これから国として夜明けを迎えるインドの力強さを感じ取ることができた。また私よりも5つも齢が下の方が、社長として活躍する姿を見て、とても刺激を受けた。このタイトなスケジュールをこなした後はご褒美。日本人の方がシェフをしていらして、在チェンナイの日本人も通う、「赤坂」という日本料理屋に連れて行っていただいた。南インドの辛い料理で胃が疲れていた我々にとって、これ以上ないご褒美であった。ここで、たくさん日本料理を堪能して、あと半分さらにインドを満喫しようと思う。

### 8月22日 湯村将貴

宿泊先の D&M を9時30分に出発し Shri Shankarlal Sundarbai Shasun Jain College for Women に向かった。到着すると一人ずつ花をもらい、額にビンディーをつけてもらった。ディスカッションの前の開会式では、歌の披露の後、この学校の沿革や授業内容を教えていただいた。ディスカッションでは、教育を扱いインドと日本の違いをディスカッションした。今まで、インドの女性は家庭に残ることが普通だったが、学生達が仕事を持って家庭と両立したいという話を聞いているとインドの女性の地位が向上していることを実感した。また、農村と都市で女性の社会進出の程度に違いがあることが分かった。ディスカッションが終わった後、学校を案内してもらい、インド楽器ヴィーナの授業やプログラミングの授業、ヨガの授業を見学した。昼食をはさみ、午後は Meenakshi Sundararajan Engineering College で文化に関するディスカッションをした。結婚の話題になるとインドの南部の都市チェンナイだけに Arranged Marriage のほうが良いと言う学生が多く日本との違いを感じたが、結婚はある種の社会的ステータスになるということは一致していた。その後、AOT DOSOKAI でメンバーそれぞれのホストファミリーと顔合わせし、一人ひとりインド人の家庭で夜を過ごした。



### 8月23日 豊原智恵



この日は午前中に工場見学、午後買い物とチェンナイ総領事とお茶会があった。まず10時に、車や飛行機に使われる部品をつくらしている Sudarsan Technologies Inc グループの Classic Moulds & Dies という会社の工場見学に向かった。ここで作られた製品は国外に輸出されているそうだ。私が驚いたのは5S（生理、整頓、清掃、清潔、しつけ）のスローガンが壁に貼られていたことだ。日本の工場研修で

知った5Sを2003年から導入し、今は入社後の新人教育で教え、会社の環境作りに役立っている。80～85%の人が実行できているそうだ。昼食後はT.nagarというショッピングエリアで買い物した後、

15:30～中野総領事のお招きでお茶会に参加した。コルカタの総領事公邸にもお邪魔したが、今回も公邸の美しさに感動した。専門調査員の方やODAのコーディネーターをしている方からもお話を聞くことができ、短時間であったが将来のためになる時間を過ごせた。



## 8月24日 奥村理絵

9:00 D&A 出発

9:30-13:00 Quaid-E-Millath Government College for Women

13:30 D&A 到着

16:30 D&A 出発

18:00-21:00 Japanese Night-Vol.2

22:00 D&A 到着

私たちは初めてインドの国立大学を訪れた。国立なので、学生の中にはヒンディー教徒もいればキリスト教徒もいた。その後モールで昼食をとって買い物をした。昼食のピザハットのピザやラザニア、パスタは、インドというだけあって辛いものが多かった。コーディネーターのクマールはこの日初めてピザを食べたが、あまり口に合わなかったようだった。Japan Night-Vol.2 では、インド人による日本語スピーチ・俳句の発表、演劇・コントや日本語の歌のパフォーマンスがあった。チェンナイに在住する日本人の方々がたくさん来ており、日本人とインド人によるバンド・歌のパフォーマンスもあった。私たちはダンスと折り紙デモンストレーションをした。会場のインド人に折り紙を教えると、楽しそうに折っていた。日本の文化に興味をもっているインド人がたくさんいることがわかって嬉しく思った。ABK-AOTS Dosokai の生徒と会うのはこの日が最後だった。コルカタよりも交流の時間が少なく、もっと話をしたかった。





### チェンナイ→バンガロール移動

早朝4:00に起床し、ホテルのロビーに集合して出発。私たちが滞在したホテルはアパートをイメージしているようで、いつもTVをつけてもらったりチャイをいれてもらったり、快適に過ごすことができた。チェンナイでお世話になったクマとアトレヤさんも一緒にバスに乗り駅へ向かった。列車は6時に出発。朝早い時間帯にも関わらず、最後まで私たちを見送りに来てくださった皆さんと別れ、次の目的地であるバンガロールへと向かった。11時ごろ

バンガロールに到着し、宿泊先のシバニさんと対面した。彼女は現在東京大学バンガロール事務所に勤務しており、彼女の自宅には女子5名が滞在したが、申し分ないほど広く、私たちは日本でも味わえないくらいリラックスして休むことができた。

午後からは、語学研修やインターンシップのためバンガロールに来ている日本人学生がやって来て、一緒に食事をとりながら、こちらでの生活や将来のことについて話した。

## チェンナイでの日々



南インドのミールス



ビーチは遊園地



ヨガの授業



ジャパナイトでCKB48と



ヒन्दウー寺院



孤児院の調理場



開会の儀式



分科会（文化）

～バンガロール～

8月26日 湯村将貴

この日は、バンガロール大学を午前から訪れ、日本語を学んでいる学生と交流した。日本語を学んでいるのは、主に仕事で日系企業に勤めているか自分の勤めている会社が日本とつながりがあるインド人だった。学生といっても社会人の人が多く、ほぼ日本語検定を持っていた。午後は、チェンナイに夏休みを使ってインターンシップに来ている学生30人ほども加わり、インドに関するジェスチャーゲームをして楽しんだほか、吉野さんの解説でインドに関する理解を深めることができた。バンガロールは、日本の軽井沢のような避暑地で過ごしやすく、シバニさんの家に戻るとおいしい料理を振る舞ってくださったので、メンバーの中にはこのままバンガロールにいたいと言っている者もいた。



## 8月27日 日野原由佳



本日のスケジュールはバンガロールー忙しいものだった。というのも、インフォシス、ソニー訪問、さらには60周年の記念行事の一環である能の鑑賞といった詰まった一日だったからだ。まずは、吉野先生の取り計らいによって午前中にインドを代表するIT会社のインフォシス、そして日本の大企業であるソニー訪問から世界の最先端の見学に行った。インフォシスは広大な敷地を駆使し、そこをキャンパスと呼んでいた。私たちはそのキャンパスを周り、インドのソフトウェア開発の源泉というべき企業を学んだ。日本にはないダイナミズムや、戦略的な姿勢はすでに日本を上回っていた。日本

はソフトウェア開発やIT分野においてはインドをキャッチアップしなければならないと率直に思った。一方、ソニーはインドのソフトウェア開発に一目おいており、日本の経営スタイルを保ちつつも世界の多国籍IT企業がひしめくバンガロールに構えることで世界のITの波を独自に捉えているようだった。ソニーでは新入社員の方々と交えて文化や結婚観についての討論を行った。そして夜には、日印60周年記念事業の一環である能の鑑賞のため、Raj Bhavanにいった。たくさんの日本人やインド人の聴衆がいるなかで観世流の能を堪能することができた。私にとって初めての能の鑑賞ということもあり、事前学習をメンバーとした甲斐があった。世界の最先端に触れ、新たなインドの側面を見るだけでなく、日本の伝統に触れることができた濃い一日だった。

## 8月28日 宮澤ティナ

今日は私の20歳の誕生日だった。朝からメンバーと宿泊先のシバニさん親子がHappy Birthdayの曲を歌ってくれた。二十歳をインドで過ごすことになるとは、去年19歳を迎えた頃には思っていなかったので、大変嬉しかった。朝準備を済ませ、バンガロール宮殿へ向かった。カメラ持ち込み料や入場料は非常に高額だったが、大人数ということで一人分まけてくれたりした。展示物も多かった。その足でコマーシャルストリートを訪れた。ムスリムの信仰者が多いようで、ムスクもたくさんあった。建物自体はすごく可愛いデザインだった。



お祈りが始まると人通りも増え、お祈りの言葉がマイクで放送された。

私はそこでサリーを購入した。途中必要なものを買う店に行く途中道に迷い、おもちゃ屋さんに駆け込むと、道を教えてくれるなどとても親切だった。メンバーで持ち歩いている携帯電話にコルカタのIJSCメンバーから連絡があり、誕生日おめでとうのコメントももらった。各々靴やサリー、食べ物を買って、夕食のお店へ移動。高級ブランドの入る大きなビルの高層階にあるイタリアンのお店でさよならパーティーなるものをした。バンガロールにインターンや留学に来ている日本人学生の三宅さんらとシバニさん親子も一緒に料理を楽しんだ。バースデケーキを用意してくれ、メンバーの祐作と一緒に祝ってもらった。最高の誕生日だった。ありがとう。



本日は、バンガロールからデリーへの移動日。バンガロールでホームステイさせてくださった方ともお別れ。5日間本当にお世話になったので、メンバー一同別れを惜しみながら、午後4時、バンガロールを出発した。飛行機の中では、コルカタ、チェンナイ、バンガロールでの思い出を懐かしみ、また最後の訪問都市となるデリーでどんなことが起こるか期待に胸を膨らませながら、2時間を過ごした。そして、デリーに到着。まず思ったのは、暑い。コルカタに戻った

ようであった。そして、空港では今回お世話になる JNU の方2人をお迎えに来てくれていた。圧倒された。彼らは日本語学科の5年生なのだが、2人とも難なく我々と会話してみせた、日本語で。我々が日本人と話しているのかと錯覚するほど流暢であった。そんな彼らとタクシーで楽しく会話していると程なくして、我々の宿泊地である JNU のゲストハウスに到着。移動日は疲れが出る。今夜は早く寝ようと思う。



### バンガロールでの日々



SHATABDI Express で移動



ホームステイ先で



SONY INDIA 社員と



INFOSYS 社内の竹林



ショッピング街の中のモスク



ザクロ

～デリー～

**8月30日 湯村将貴**



JNU の広大なキャンパスの入り口まで徒歩で 20 分歩いた後、3 つのオート力車に分かれて、JAPAN EDUCATION FAIR 2012 のある Delhi Public School に向かった。日本インド学生会議もブースを設けていただき、事前準備の段階からバンガロールまでの写真をボードに貼って、インド人の高校生に自分たちの活動を説明した。会場には、日本の大学から広報に来た大学関係者の方々がブースを出していて、JISC のメンバーが一つひとつそれらを回り、宣伝することができた。また、日本大使館のブースがありお話を伺うことができ、大変勉強になった。その後、開会式のある国

際交流基金ニューデリー日本文化センターに向かった。来賓の方々に祝辞をいただき、本会議最後となる下駄ダンスを踊った。最後だけあって、メンバー全員の息のあったダンスとなった。国際交流基金の方に褒めていただいたときは、一生懸命練習して良かったと思った。インド側からは、インドのダンスが披露され息をのむほど迫力があつたほか、スピッツの「チェリー」を日本とインド側で歌い、開会式は成功に終わった。夜は、JNU 内にある食堂でカレーとナンを食べながら、学生と話をすることができ、本当に楽しかった。

**8月31日 豊原智恵**

午前中は JNU の日本語専攻の授業見学、午後は在印日本大使館でのレクチャーだった。まず 9:15 から修士 2 年生向けのトマール先生の日本史。授業は 9:30 から始まり、日清戦争について先生がひたす

ら話すという授業。申し訳なかったが私たちは終始眠気と戦っていた…。しかし、さすが、院生は違う。寝ている人は誰一人いなかった。11時に授業が終わり、次は少しだけ学部生の授業を見学した。まずは2年生、そして次に11:30から12時まで1年生の地理の授業へ参加した。1年生のクラスには、3人の韓国人学生がいて驚いた。その後は昼食をとり、インド人学生とともに大使館へ。インド情勢や日印関係のレクチャーを受けた。個人的には、担当していただいた堀川書記官や野田参事官の仕事の話が興味深かった。特に、堀川さんは一度民間に就職された後に外務省に入省されており、やりたいことをやろうとする意志の力を感じた。大使館を後にして、バスでデリー最初の観光となるインド門へ向かった。大統領官邸からインド門への道は両脇が芝生で囲まれ、周辺一帯が公園の様になっており、家族連れや若者たちの憩いの場となっていた。その後はオートでJNUに戻り、夕食を食べた。(この夕食がのちに不調の原因になるとはまだ誰も知らないのだった…)



1年生の地理の授業



インド門の前で



大使館でのお話

## 9月1日 奥村理絵

11:00-17:00 分科会

17:30-18:30 JNU 散策

19:00-20:30 モールで買い物

22:00-23:00 レストランで夕食

デリーでの分科会1日目。メンバー2人の体調が悪く、1人は午後から参加してもう1人は欠席した。分科会はインド人学生のインド映画・ファッションについてのプレゼンテーションから始まった。その後日本側が用意したトピックについてディスカッションをした。私は企業の経営やBOPビジネスについてのインド

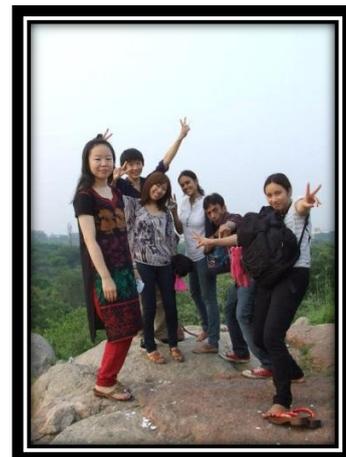


人の意見を聞いたが、日本人とあまり相違がないように感じた。参加していたJNUの学生は3年生以上で修士が多かったが、難しい内容も日本語で理解し話していた。ディスカッションを終えた後は、ダンスをしたり、JNUの学生の日本語での劇『浦島太郎』の映像を観たりした。分科会終了後、大学構内を散策した。JNU構内にはクジャクや牛、様々な鳥がいて、自然豊かで森のようだった。夕方は大学から車で20分ほどのモールへ買い物に行き、お土産の紅茶や3日の朝食を買った。夕食はJNUの学生行きつけのレストランへ行った。カレーやローティーがすごくおいしかった。

## 9月2日 山口久美子

分科会2日目。体調不良のため2名参加できず、日本側は4名での参加。午前中のトピックはインドでの宗教教育、いじめ問題。いじめに関しては、日本で最近話題になっている事柄や自殺についてインド側から多くの質問を受けた。こちらでも、子供に勉強させてよりよい学校、職業に進ませたいという先生や親からのプレッシャーから自殺をしてしまう学生がいるという。午後のトピックのカーストについて、これは日本人にとっては慣れない制度であり、生活や結婚における影響の事実を本人たちから聞くことができた。私自身大学でインドのカースト問題に関して学ぶが、この制度が廃止された今でも未だ根付いているという現実には衝撃を受けた。しかし学生たちの、「私たち若者がこれからの世代を担うものとして考えをかえていく」のだという言葉に頼もしく感じた。

分科会が終わると、閉会式。日本からのお土産の浴衣、日本製消しゴム、キャンディーを配った。日本人メンバーは一人ずつ感想を述べ、マンジュシュリー・チョウハン先生と JICA からの派遣で現在日本語を教えていらっしゃる森山なな子先生からお言葉をいただいた。フォトセッションの後別れた。JNU の学生の日本語レベルは非常に高く、ディスカッションもほぼ日本語で行われたため、これまでの都市で自分の意見や感情を英語でうまく表現できなかった面もあったが、今回はお互いが知りたいことを尋ね、言いたいことを主張できたということで中身の濃い分科会になったのではないと思う。ただ、相手が私たちの母語を理解しているからと言ってそれに甘んじてはいけなかったと感じた。



## 9月3日 豊原智恵

この日は丸1日かけてアーグラへ日帰り旅行をした。朝6:30にホテルの前に集合し、インド人6人、日本人6人の12人で出発！ミニバスの中で朝ご飯を食べつつ、睡眠をとりつつ約5時間かけてアーグラへむかった。アーグラには世界遺産がいくつかあるが、最も有名なのが「タージ・マハル」だ。ムガル帝国の第5代王シャー・ジャハーンが王妃ムムターズ・マハルのために立てた廟で、真っ白な大理石でできているのが特徴だ。私たちは滞在時間が4時間ほどしかなかったため、まずアーグラ・フォート（第3代王アクバルが建設。シャー・ジャハーンが息子アウラングゼーブにより幽閉された場所）を1時間、次にタージ・マハルを1時間ほど見てから、15時近くに昼食をとった。インドの観光地で特徴的なのは、インド人と外国人の入場料が違うことだ。アーグラの場合観光税を含めると、外国人の入場料はインド人の約35倍である！この入場料以外で驚いたことは、世界遺産ということもあり、平日でも観光客や小物を売りつけてくる人の数がとても多かったことだ。この日はとても暑く、皆体力を激しく消耗したが、タージ・マハルを見た瞬間の感動は大きかった。特に病み上がりの二人は前日まで寝込んで、

体力を回復させた甲斐があったに違いない。帰りのバスでは歌を歌ったり、疲れて寝たりしていた。そしてJNUに到着したのは夜中の22時頃であった。

アーグラ・フォート



タージ・マハル



世界遺産のお膝下には靴が散乱…



## 9月4日 豊原智恵

最終日の今日は、午前中にチャウラ先生との対談をし、午後は買い物・授業見学・休憩と自由に過ごした。チャウラ先生は工業系、政治経済系の日英通訳と大学教授をなされている。対談では言語を学ぶこと、インドの若者の勉強への姿勢、インドの外交と日本との関係、先生の今後の日印関係への思いを伺った。日印関係への思いでは、一人のインド人としては60周年を機にビジネス以外でも一般民の交流を増やすべきであるが、仕事上の立場としては、無理して関係を強めるのではなく、お互いのよい文化を受け入れながら、ゆっくりとしっかりした関係を築く方が良いとおっしゃられた。異文化理解は一朝一夕にはいかないため、時間をかけて行わないといけないと思えた。その後昼食を食べた後は、奥村・馬場はインド人学生とシタールを買いに、豊原・山口は大東文化大の授業へ参加し、日野原・宮澤はゲストハウスで休憩をとった。そして18時にタクシーで空港に行き、帰国組の4人は延泊組とインド人学生らと別れを告げ、21:10の便で日本へ出発した。

## デリーでの日々



大学の格安食堂



学生組織の活動が活発



沢山の野良犬



腹痛との戦い



整備された道路



大学内の岩山（デートスポット）



language labo



購入したシタールと

## 4. 企業訪問

### 「Infosys Limited (インフォシス・テクノロジーズ)」

湯村将貴

- 訪問の目的

- ◇インドにおける IT 産業の特徴を知る
- ◇インフォシスが成功できた秘訣とは何か、
- ◇日本企業との違いは何かを探る

以上3つを調査するため、インフォシスを訪問した。

- 概要(会社情報)

- 1、インフォシスは、1981年7人が250ドルの資金でインドのブネー（ボンベイ）に設立された、ソフトウェア開発を専門とする企業。本社のあるバンガロールは、インドのシリコンバレーと言われており、インフォシスの他にもインドのIT産業を代表する企業が集結している。
- 2、店には200人以上が働いており、2012年には名古屋支店を開設した。平均年齢は27歳で、離職率は14%と高い。インド人は、給料がいいポジションに移るのが普通で、これが高い離職率の原因になっている。インドでは、最近優秀な人材の獲得競争が激しくなっているため、インド人の給料が高騰しているという。
- 3、インフォシスが成長したきっかけは、2000年問題を解決するため、アメリカがインフォシスに投資を始めたことである。現在も海外のアウトソーシングを多く請け負っているが、特にアメリカとの結びつきが強い。これは時差が関係しており、アメリカが夜のときに、インドでは昼になる。アメリカの企業にとって、昼に行った業務をインドに回して24時間仕事を進めることができ効率的である。
- 4、成功の秘訣として、汚職が多いインドで透明性を重視したビジネス環境を目指し成功したのが他の企業と差をつけることができた要因となった。インフォシスを訪問した際も、社員の方が Respect (信頼) を重視していると強調していた。
- 5、マイソールに研修施設があり、毎年1万数千人の新卒者がそこで研修を受ける。広さは、約136万平方メートル（東京ドーム30ヶ分）に3種の施設が共存する。内容としては、ホステル：部屋数10,115部屋：収容人数：13,392人、グローバル教育センター：収容人数：14,000人（1棟9500人＋1棟4500人）、ソフト開発センター：インド国内10ヶ所の内の一つ。6ヶ月間のトレーニングしている。このほか、フードコート9棟、各種グラウンドやコート、体育施設、リクレーション施設、プール、映

画館、コンビニがある。

本社バンガロールの敷地にも、インフォシスの敷地の中には、テニスコートの他バスケットボールリンクや鯉が泳ぐ大きな池などが完備されていて、社員がリラックスして働きやすい環境が整備されている。

- ・ インドの IT 産業の特徴

---

インドの IT 産業が、発展している背景として、人材の確保が容易なこと、政府の支援があることの2つが挙げられる。

- 1、 インド人は、イギリスの植民地時代を経験したので英語が話せる。欧米の業務を請け負うのに適した人材を企業は確保できる。
- 2、 80年代、政府主導で「コンピューター政策」が発表された。政策の特徴は、海外向けのソフトウェア開発に力を入れること。アメリカが、まだ IT 産業が盛んでないときからインドの開拓に力を入れ、インド政府と協力してインフォシスのような企業に支援した。計画は成功し、アメリカは IT 産業において、世界をリードすることが出来た。
- 3、 インド政府は、環境整備にも力を入れ、外資を優遇する政策を整備した。また、STPI (Soft Technology Park of India) という企業が進出するための基盤を確保するなど、外資が進出しやすい環境を整えた。具体的には、STPI に認定された企業は、税金の免除や、インド政府との交渉が用意になるといった優遇を受けられる。

- ・ 考察 (学べること)

---

1. インフォシスのように海外の業務を受注しなければ、人口が減っている日本のビジネス環境は縮小していく。日本企業が、日本国内の仕事ばかり請け負っていても、利益が上がらない。インフォシス訪問の後訪れたソニーは、日本の企業との関わりが深かった。一方、インフォシスはアメリカなどインド国内よりも海外との関わりに重点を置いている。インフォシスは、設立当初から海外に目を向け、インド国内よりも海外で成功する事を目標に置いていた。ここが日本人の発想と違うところである。
2. 同じ給料でも、インド人は日本人の半分以下の給料で同じ量の仕事をこなす。グローバル化した世界では、日本人は、自分の仕事に付加価値をつけなくては生き残れない。日本は、製造業などで匠の技が国を支えてきたが、これからは IT 技術に支えられたコンピュータや機械がその仕事を代わりにするようになる。日本の産業は曲がり角に差しかかっている。世界にはない技術を生み出せるかに、日本がグローバル市場で生き残れるかはかかっている。
3. 最先端の技術を持っている国・企業が有利になる傾向が加速している。そのためインフォシスのような高度な技術をもっている企業を取り込み、共にビジネスが出来るかが成功の鍵となる。

## 参考資料

『インドのソフトウェア開発と経済成長の新局面』山崎恭平

<http://www.iti.or.jp/kiho44/44yamasaki.pdf>

専修大学都市政策研究センター論文集 第1号 『インド・バンガロールのIT産業と地域性』、定國 公、  
2005年3月

インフォシスホームページ <http://www.infosys.com/pages/index.aspx>

## 「Sony India を訪れて」

宮澤 ティナ



私たちは8月27日、代表的な日本企業の一社であるSONYを訪れた。場所はインドのシリコンバレーといわれるBangaloreである。Sony Indiaは1994年11月にインドでの事業をスタートさせた。事業開始

当初は緩やかに成績が伸び、後インド経済の成長が始まった2004年4月から2005年3月期までに急激に拡大。2006年頃からは年率30%程度での成長率を見せ、その後も拡大を続けている。ただ、この大きな成長率をどう安定させ、維持するかが重大なテーマである。Sony Indiaも2008年のリーマンショックの影響を受け、世界的な景気後退と売上の伸長も再び緩やかな傾向へと戻った。その後の2010年に訪れた好景気で景気を一気に回復させた。その売上545億ルピー(1ルピー=1.91円換算、約1040億円)。Sonyでも売れ行きの高いBRAVIAは韓国を抑えのトップをとった。サムスンに比べ10%、LGやPanasonicに比べ20%程価格は高いが、それでも選ばれる安心の製品を販売し続けている。そんな日本でもインドでも信頼度の高いSonyでどんな人が働いているのかを確かめることができた。

例えば日本語会話のクラスが用意されていたり、どこことなくオフィスデザインが日本のオフィスに似ていたりするのは日系企業ならではのこだわりなのだろうか。プレゼンテーションを用意してくれ、私たちはそれを見ながら時に質問を重ねた。先ほどまでのインフォシスとは何が違うのかと期待をふくらませ、見学を行った。

日本のビジネス形態とインドのビジネス形態は違うが、日本は其中でどのように問題をくぐり抜け、ここまでのシェアを誇っているのか。非常に興味があったが、時間が少なく質問をするのにも限りがあった。

また、新入社員との交流としてディスカッションも行われ、これも本当に面白かった。日本の企業への考えや日本の文化などについても質問が飛んだ。また機会があれば、Sony Indiaの社員とビジネスに関するディスカッションをしてみたいと強く思う。

次回までにはSony Indiaで働く若手インド人に負けないくらいの表現力を身につけたいと思う。

しかしまだインフラが十分に整備されていないインドで、家電製品を販売するのは実に難しい事業であることは想像の通りである。その難関をくぐり抜けるためにSony Indiaを支えているのは日本から派遣された人材とインド人社員との協力であることは間違いない。でも彼らの絆が大きな企業を築き上げることによって、日本からインドで就職するケースも今よりさらに増えるに違いない。

今回の企業訪問で、ますますインドと日本の仲介に入る職業に興味をもつことができた。ありがとうございました。

# 5. 分科会報告

## 日程

【コルカタ】@Jadavpur University 形式:グループごとに分かれてのディスカッション

8月13日(月) AM分科会①	PM分科会②
(教育) インド史 (経済) ユーロ危機 (社会・政治) エコタウンとエコシティー (文化) グローバリゼーション	(教育) インド史 (経済) Company Management and globalization (社会・政治) 災害対策、カーストシステム (文化) インド文化
8月15日(水) AM分科会③	PM分科会④
(教育) 宗教教育 (経済) クリーンデベロップメカニズム (社会・政治) 社会の中の女性の位置、移民 (文化) メディア、結婚	(教育) 人工知能 (経済) BOP ビジネス (社会・政治) NGO (文化) 文化に関連したグローバル化
8月16日(木) AM分科会⑤	PM分科会⑥
(教育) 自然災害に対する教育、インド史 (経済) まとめ (社会・政治) まとめ (文化) シンボロジー	全体まとめ

【チェンナイ】形式:全体でのディスカッション

8月21日(火)
12:30~13:30 分科会① @Meenakshi College for Women (経済) Company Management and globalization
8月22日(水)
11:30~13:00 分科会② @Shri Shankarlal Shasun Jain College for Women (教育) 宗教教育、いじめ
14:30~16:30 分科会③ @Meenakshi Sundararajan Engineering College (文化) メディア、結婚
8月24日(金)
10:00~12:00 分科会④ @Quaid-E-Millath Government College for Women (社会・政治) カーストシステム、移民

【デリー】@Jawaharlal Nehru University 形式:二グループに分かれてのディスカッション

9月1日(土) 分科会① 10:00~17:00
グループA(経済) Company Management and globalization、BOP ビジネス グループB(文化) メディア、結婚(社会・政治) 移民
9月2日(日) 文化会② 10:00~16:00
グループA・B(教育) 宗教教育、いじめ(社会・文化) カーストシステム

## 日本側プレゼンテーション 教育部門 (Education) I

---

《担当者》湯村将貴

《テーマ》: Artificial Intelligence (人工知能)、History of India (インド史)、Education system in India (インドの教育制度)、Education on Religion (宗教教育)

### 1、 Artificial Intelligence (人工知能)

日本側プレゼンテーション

人工知能の定義

人工知能は、ロボットに代表される、周りの環境に合わせて動作することのできる装置のことをいう。

例として、「NHK 大学ロボコン」に出場するようなロボットから、ドラえもん、ターミネーターも Artificial Intelligence に含まれる。

《問題提起》

次の質問をし、インド側と話し合った。

- ①、 「人間の脳に、コンピューターを移植しても良いか？」
- ②、 「どの程度までロボットが知能を持つことを認めるか？」

①に関しては否定的な意見が多かった。理由として、脳にコンピューターを埋め込むことで人間の本来持っている感情を失ってしまうからという意見が挙げられた。

② を話し合ったところ、人間の知能を基準に賛成と反対に分かれた。

- 1、 ロボットが人間よりも優れた知能を持つことに賛成である。

<理由>

ロボットが人間よりも優れた知能を持つことで、人間の生活を補助し、人間がより良い生活を送れるから。

ロボットが人の会話の通訳をしてくれることで、外国語を学ぶ必要がなくなるから。

- 2、 ロボットが人間よりも優れた知能を持つことに反対である。

<理由>

ロボットが人間よりも優れた知能を持てば、ロボットが人間の職を奪い、雇用を不安定にするから。

ロボットが人間の仕事を肩代わりすることで、人間が怠惰になってしまうから。例えば、ロボットが通訳をすることで学ぶ意欲を失ってしまうなどが挙げられる。

インド側プレゼンテーション (コルカタ)

### 2、 History of India (インドの歴史)

### 3、 Education system in India (インドの教育制度)

□ 奨学金

カーストによって、もらえる金額が違う。低カーストの学生は奨学金が多くもらえ、高カースト出身の学生は比較的金額が少ない。

それでも、それに異論のある学生はほとんどいなかった。

インドの大学

Art, Humanities, Commerce, Science は、3年過程(Delhi University, etc.)

Engineering は、4年過程(IIT・インド工科大学, NIT・国立工科大学, etc.)

Medicine, Law は、5年過程(AIIMS, etc.)

Yoga は、3年過程

Ayurveda (予防医学) は、5.5年過程

## 教育分野 (Education) II

---

《担当者》 宮澤ティナ

《テーマ》 宗教教育

### 《概要》

私の父の国バングラデシュはイスラム教徒の国民が約 90%を占めている。そこではマドラサという宗教学校があり、イマームを目指す学生が大多数である。お隣インドではヒンドゥー教徒が 80%を占める。ここでもまた宗教教育は行われているのだろうか。そんな疑問をもち、このテーマを掲げた。日本の国教は神道であるが、国内には神道に限らず仏教やキリスト教の寺社教会が広がっている。他国に比して日本人の宗教観は強くないという話はよく聞くが、インドの学生はどのように宗教を学び、日々の生活の中で宗教をどのように捉えているのか。それを調査するべく、本会議分科会に向けて準備を進めた。

### 《総論》

インドに到着し、いたるところでヒンドゥー教の神様の名前を聞き、みな神様の存在を大事にしていると感じたインドであったが、コルカタでの分科会で、インド国内においてヒンドゥー教の特別な宗教教育は行われていないと聞いて大変驚いた。キリスト教の学校やマドラサはあるが、ヒンドゥー教を教える授業が特別用意されているわけでもなければ、学校自体もないという。確かに、インターネットで検索しても、そのような学校は発見できなかった。なぜ、インドのような宗教大国にヒンドゥー教の宗教学校がないのだろうか。学生から聞くはなしによると、みながつつも心に神様をおいているので、特別な教育は必要ない。家族からお祈りの仕方を学び、アニメや絵本、文献などで神様の名前や関係性を学ぶ。歴史の授業の中に一部宗教が組み込まれていることはあるが、特別に宗教の講義を設けている学校はほとんどない。きちんとした宗教教育の授業が用意されているとすれば、キリスト教の学校かマドラサであるという。また、宗教を普段どのように捉えているのかについては、日本の学生と同じだと言っていた。お祈りをするときになれば真剣にやるが、普段から特別それについて考えたりはしない。昔の人よりは関心が薄くなってきている様子がうかがえた。アメリカをはじめ、西欧の文化がインドへ流れ、胸のあいたワンピースや短いスカートを履く学生が増えていた。以前母がインドに行ったときは街の雰囲気も変わったという。たったの 5 年足らずで、インドは急成長を遂げ、今ものその最中である。宗教大国といわれたインドも、いつかは宗教の教えを気に留めない国になってしまうのであろうか。かたちだけの宗教、歴史的建造物に付属する宗教という概念。そうになってしまうことをインド学生も寂しく思っているようだった。

また、日本を例に挙げた宗教話題も提示してみた。日本ではインドほど宗教を大きく掲げてはいない。また、お正月には神道の神社と、仏教の寺と双方へお参りに行く。例えば私の通っていた國學院高校のように、国教である神道を教育方針として掲げる学校もある。だが特別宗教心が強いわけではない。インドではヒンドゥー教徒が 80%存在する一方で、日本国民の何%の人口が国教である神道を信仰しているのであろうか。そんな日本の徹底されない宗教観をどう感じるか聞いてみた。それが日本の国のカラーなのであるという意見が多かった。神道自体が、その宗教性を主張しすぎない日本人らしい宗教なのではという意見もあった。国によってというよりは、その宗教を代表する教えがどのような教えである

のか。それが欧米からきた宗教であろうと、中国からきたものであろうと、インドから伝わったものであろうと、物事の教えが国民にどのように浸透しているのかが重要なのではなく、人々が毎日をどのように生きるかの指針であるので、あまり問題ではないとの意見があった。私も今まで、日本人の宗教観についてまとまりがないと感じてきたが、それもまた日本人の特徴であり、研究するには興味深い点なのではないかと感じた。神道や仏教の宗教性を深く学ばないうちから日本人の感性を否定していた自分をつまらない人間であると感じた。ただ、インドのもつ共通の宗教観には惚れ込むばかりであった。機会があれば、何年後かにまた宗教について会議を開いてみたい。その時に、インドの若者の宗教観はどのように変化しているのか、それもまた楽しみである。

<sup>1</sup> 外務省各国地域情勢アジア

バングラデシュ：一般事情 6. 宗教

イスラム教徒 89.7%、ヒンズー教徒 9.2%、仏教徒 0.7%、キリスト教徒 0.3%

(2001 年国勢調査)

[<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>]

<sup>1</sup> 外務省各国地域情勢アジア

インド：一般事情 6. 宗教

ヒンドゥー教徒 80.5%、イスラム教徒 13.4%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.9%、 仏教徒 0.8%、  
ジャイナ教徒 0.4% (2001 年国勢調査)

[<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html>]

## 教育分野(Education)Ⅲ

---

《担当者》宮澤ティナ

《テーマ》いじめ、学級崩壊問題・女性の職場進出

《概要》

こちら私もバングラデシュの学生に聞いていたことをもとにトピックを設定した。バングラデシュでは日本に見るような学生同士のいじめやそれによる自殺、生徒間の殺傷事件や教師生徒間による殺傷事件も起こらないという。日本のそれは小学生の頃から始まり、今では学生自殺者の多くに小学生も含まれるようになった。そんな日本の現状をどう感じるのか、インドでのいじめの実態とは何かを調査すべく、話し合いをした。

《総論》

インドでは日本が国で出しているような自殺の原因追求による集計などは出されていない。聞き込みがすべてである。コルカタの学生に聞いたところ、インドでは小学校から高校までが一貫制の学制なので、仲間うちが変わることがほとんどない。家族の引越しや本人の意識的な再受験はあっても、認める学校も少ないという。そしていじめもないと聞いた。仲間同士で喧嘩することがあっても、それがいじめに繋がることはなく、自然と解決されることがほとんどだという。また、インド国内でいじめが始まるのは高校を卒業し、職業訓練学校もしくは大学へ入学してからのことだそうだ。先輩から後輩へのいじめが始まる。そのいじめも様々で、暴力から始まり続くものもあれば、精神的なダメージを与え続けるものまでであるという。インドの大学はほとんどの場合大きな寮がついており、田舎から出てきた学生はその寮で生活する。かつ、寮の費用はとても安い。例えばデリーにあるJNUの寮の費用は6ヶ月で160ルピーだそうだ(正確かどうかは分からないが、JNUの学生にうかがった)。食事代はかかるものの、ネット代金も電気代さえかからないのだから学生にとっては非常に住みやすい環境であることは確かである。

また、学生間でいじめが始まったらどうするのかという質問については、みんなが当たり前のように見ていたり、支えたりもする。自分が先輩になれば終わるものだから、あまり重く受け止めていないと言っていた。

話を切り替えて、日本のいじめについて話をした。通訳に入ってくださった先生を通して学生に説明してもらった。小学生も自殺してしまうという事実が大変驚いていた。勉強によるいじめから、恋愛、友情、インターネット関係と今では多岐に渡る自殺要因も彼らに伝えた。彼らは、相談しないからそうなると言っていた。相談せず、自分の中に抱えているからそうになってしまう。自分の意見を外へ発信するような癖をつけていれば、周りはその人の力を認めるという。周りに認められなければ、やはりそのようないじめの問題に発展するのではないかという結論だった。

また少し話を切り替えて、女性の社会進出についてどう考えるかを男子学生に聞いてみた。ほとんどの学生の母親は小さい頃から家にいることが当然だったが、女性が国のために働きに出ることは素晴らしいことだと言っていた。インドでも男女差別はまだ残っているが、今の学生の代になると女子生

徒を頼る男子生徒も多いように見えた。コルカタの女子生徒のプレゼンテーションを聞いていても、はきはきとよく話すし、自分の意見をはっきりというし、相手と意見が違ってても良い意味で妥協してそれを認め合っているような雰囲気だった。

バンガロールでも、チェンナイでも、やはり女性は働きたいと意気揚々と述べていた。共働きをして、子供も育てていきたいと。ただ、日本もそうだが、共働きによって生まれた問題が多くあるように、のちのインドでもそれが発生することを考えると、日本の二の舞にならないように努めて欲しいと強く思う。インドは地域で子供を育てる国と覚えていたが、共働きになり母親と地域との関わりが薄くなることによって日本のような核家族化が進み、地域で子供を叱らない社会になってしまうことに寂しさを感じる。インドの国の発展のためには日本と同じ問題を解決していかなければならないのかと、そんな気がしてならなかった。

## 経済分野(Economic) I

---

《担当者》馬場祐作

《テーマ》Company Management and globalization

《狙い》

近年、経済のグローバル化が進んでおり、日本企業が海外進出する例が増えている。それは欧米諸国のみにとどまらず、インドへの進出も進んでいる。例えば、「インドのシリコンバレー」と言われる、インド南部のバンガロールには、ソニーなど日系企業が多くオフィスを構えている。また、その進出ぶりは日常生活をしていても感じることができ、特に自動車産業に関して、それは顕著である。インドでの自動車のシェアは日系企業であるスズキが第1位であり、その他にも、ホンダ、トヨタなど多くの日系自動車メーカーが、インド人によって運転されている。ただ、グローバル化における弊害も度外視できない。今年8月に起きた、インド・スズキ工場暴動に代表されるように、グローバル化によって起きた問題は、今後グローバル化がさらに進むにつれて深刻化していくだろう。この事件をきっかけに、私は日本人とインド人の経済的価値観の違いに関心を持ち、ディスカッションを通じて、この違いを明らかにしていこうと思った。

《概要》

日本人とインド人の経済的価値観の違いを知るために、ロールプレイ形式でディスカッションを行った。順序は以下の通りである。

- ① グローバル化の定義
- ② ガラパゴス問題について
- ③ グローバル化のメリット・デメリット
- ④ 日本企業のグローバル化のケース
- ⑤ ロールプレイ

※ガラパゴス問題とは、グローバル化をする際に、自国のインフラなどに合わせた製品であると、他国に受け入れられずグローバル化に失敗してしまうという問題。

ロールプレイでは、SWOT分析を用いて、その企業をグローバル化するかどうか意思決定する問題と、リスク選好に関する問題の2つを出題した。

《総論》

1つ目のグローバル化するかどうか意思決定する問題では、グローバル化を海外に生産拠点を移すことと定義し、まずは、それにおける品質の低下をどう防ぐかということに焦点を当てた。インド側の見解も日本側の見解も、従業員のトレーニング方法によって解決できるということで一致した。これは自国からトレーナーを派遣するという極めてシンプルなものであり、どの企業も実践しているため、合理

的な判断であると考えられる。次に、量か質、どちらをはじめに優先すべきかという議論を行い、結果はインド側でも意見が分かれていた。私自身の意見としては、まずは質を上げるべきだと考えていたが、まずは量を重視すべきという意見の学生は韓国の電機メーカーの例を用いて持論を展開した。韓国の電機メーカーが作る携帯電話は、インドでとても人気であり、「iphone」人気が根強い日本とは異なり、特に学生の間では、ほとんどが欧州系の有名メーカー製もしくは韓国のメーカー製が使われている。理由は、安いから。韓国メーカー製の携帯電話は価格が魅力なのである。ただ、製品の質に関してはまだまだ改善が必要であり、インドで販売されているあるタブレット式携帯電話は振ると、カラカラと音になるとのことであった。このように、インドにおける韓国企業の販売戦略とは、質を低下させてでも、より低い価格で提供するというものであり、これが受け入れられているということは、インド全体で、質より量を重視しているという考えを裏付けているといえる。日本では、高品質が当たり前という中で、いかにコストダウンを図り、多くの量を売るかという考えが主流であり、インドのそれとは、根本的に異なっている。

2つ目のリスク選好の問題では、ある3つの事業があり、それぞれ成功する確率と、成功による報酬は与えられると仮定したとき、①ハイリスク・ハイリターン②ローリスク・ローリターン③中間、の3つのうちどれに投資するかという問題で、驚いたのは、この事業に失敗しても会社の経営に深刻な影響は与えないという規模の会社と仮定したときに、②ローリスク・ローリターンを選ぶインド人学生が何名かいたのだ。全体を通してみても③中間を選択する人が多く、①を選んでいて私とは全く異なる考えをしていることが分かった。今経済が最も飛躍している国インドで、このようにリスクを回避し、着実な成長を望む意見が多かったのが印象的であった。

総じて、インド人学生と日本人学生の間で、細かい価値観の相違こそあれど、根本的な考え方は同じであることが分かった。ただどちらかというと、インドの方がディフェンシブで、日本人の方がオフェンシブであり、両極端な経済の歩みを見せるインドと日本においては、とても意外な結果であった。

## 経済部門(Economic) II

---

《担当者》 奥村理絵

《テーマ》 ミクロな視点とマクロな視点から

日本側プレゼンテーション

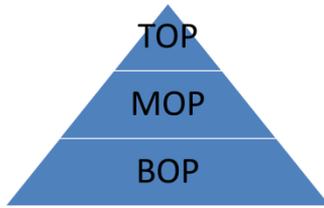
トピック：企業の価値観—企業の社会貢献—

1. CSR 活動について
2. BOP ビジネスについて

《概要》

1. 企業には社会から得た利益を社会へ還元することが必要とされており、そのことを企業の社会的責任 (CSR) という。CSR 活動の内容・形態は企業により様々である。業種をいかして世の中の役にたつということであれば、主にその分野 (例えば衛生) の指導を行ったり、コンテストなどのイベントを開催したりする。業種に関わらず、ユニセフなどの慈善団体に寄付をしたり森林保護活動・CO<sub>2</sub>削減活動・被災地支援を行ったりする。活動形態が様々であるゆえに、細かく定義づけをするのは難しい。現在多くの日本企業が CSR 活動に取り組んでいる。有名なところでは JT が全国で展開している清掃活動「ひろ街」。ここではゲストに芸能人を呼び、人々の関心を集めている。総合商社でも環境活動・被災地支援に取り組むところが多い。こうした CSR 活動はいまや社会になくてはならないものであり、その効果は社会だけでなく企業に対しても期待される。CSR 活動を通して企業のイメージアップを図ることができる。人々は CSR 活動を行う企業に対して好印象をもち、その企業のサービスを利用するようになる。すなわち、CSR 活動は企業と社会双方にとって有益なものになりうる。

2. CSR 活動の延長線上にあるとされ、貧困層への支援として現在注目されているものが BOP ビジネスである。BOP とは、Base Of the Pyramid の略であり、所得別ピラミッド階層の下層を指す (下図参照)。年間所得 3,000 ドル以下が BOP であり、その人口は世界でおよそ 40 億人、市場規模約 5 兆ドルの巨大市場である。BOP 層の大部分はアジア・アフリカが占めている。その巨大な BOP 層をターゲットとしたビジネスが BOP ビジネスである。BOP ビジネスの目的は大まかに言うと「ビジネスとして利益を上げること」「CSR 活動として社会に貢献すること」である。そして階層をピラミッド型からダイヤ型にし、BOP 層を減らして MOP 層を増やすことを目指している。このビジネスの効果は主に「より現地・BOP 層のニーズに合ったサービスが提供できること」「現地・BOP 層の自立を促すこと」である。インドの BOP 層を対象としたビジネスで有名なヒンドウスタン ユニリーバを例に説明する。ヒンドウスタン ユニリーバは衛生環境の向上のために村で衛生知識に関する講習会を開き、村の女性に石鹸・シャンプーなどを少量ずつ小分けにして安価で売らせる。こうすることで貧しい人でも手持ちのお金でそのとき必要な分だけの石鹸を買うことができ、衛生環境の改善になり、現地で雇用をつくることのできる。こちらも CSR 活動と同様に企業と社会双方に対して有益である。



## ディスカッション

### 1. Q. CSR 活動は重要か？ CSR 活動についてどう思うか？

A. <コルカタ><デリー> CSR 活動は重要だ。企業は社会からお金をとって成り立っているので、社会に貢献する義務がある。企業のイメージアップにもつながり、顧客を増やせる。インド企業も日本同様重要視していると思う。しかし多額のお金が必要になるので余裕のない企業は難しい。

### Q. インド企業による CSR 活動の例は？

#### A. <コルカタ>

- TATA (有名な自動車会社) → TATA Nagar (in Jamshedpur)、TATA Cancer Research Centre (in Kolkata) TATA の従業員は無料で利用できる施設
- Birla (大きな企業グループ) → 眼科検診が数年に1回無料 (in 東インド)
- Dr. Debi Sethi (個人経営病院の医師) → 心臓手術の医師として有名、お金のない人に対しては無料 (in Bangalore)

#### <デリー>

- TATA
- Infosys (IT 会社)

### 2. Q. BOP ビジネスは有効か？

A. <コルカタ> BOP 層が雇用を獲得して BOP 層のために仕事をするというボトムアップ型で貧困の解決を目指していて有効だと思う。ビジネスなので CSR 活動よりも金銭面で継続可能だとは思いますが、それだけ多くの人を組織して長く続けるのは難しい。しかし、日本側の「BOP ビジネスを長く続けられれば、その土地で安定的な雇用が確保されて技術・知識をもった雇用者が増える。そのようにして増えた雇用者を用いて他の地域のための仕事もできるし、企業自体もその土地に根付いて利益を得られる。」という意見は正しいと思う。

<デリー> 貧困の解決に対して有効だと思う。しかし、企業が現地と直接結びつくことで仲買人の仕事なくなってしまう。しかし仲買人を用いるには、コストも掛かるし仲買人による搾取が行われる場合もある。それゆえ村人の中から仲買人を雇用し、その仲買人に仕事に関わる村人をまとめてもらうべきだ。また、BOP 層にサービスを利用してもらうために BOP ビジネスの情報をより伝えることが大事である。どれくらい BOP 層に利益をもたらすのかという考慮(雇用も含め)が必要である。

### Q. BOP ビジネスを行うインド企業は？

#### A. <コルカタ>

- Amul (乳製品製造会社) (in Rajasthan and Punjab)
- Verca (in Punjab)
- Society Homes or Poor Homes 提供されるこの家で生活する。大人は働き、子供は勉強する。

(in Chandigarh)

<デリー>

- Amul
- 6 TEN (スーパー) (北は Ludhiana 南は Nagpur まで Delhi も含めインド北東部の 9 都市)
- Amway (美や健康関連の商品や家庭料理器具など)

《総論》

CSR 活動・BOP ビジネスの必要性・有効性に関してインド側と日本側の意見にたいして差はなかった。しかし BOP ビジネスに関しては、実際に行われている国であるインドの学生ならでの、難しさをともなうという意見が聞けた。コルカタ・デリーという都市の学生に聞いたので、地域ごとの差もあまりなかった。

## 社会・政治部門(Society and politics) I

---

《担当者》日野原由佳

《テーマ》カースト制度

### 《概要》

カースト制度はインド固有のヒンドゥー教がベースとなった身分制度のことである。カーストの序列は、上からバラモン、クシャトリヤ、バイシャ、シュードラから成り立っている。また、その序列からも外れた不可触民（アウトカースト）も数多く存在する。カーストは長い歴史の中で受け継がれた結果、インドの社会に浸透している。カーストの序列は変更することができないため、原則として生涯生まれながらのカーストにしかとどまることができない（女性の場合、結婚相手のカーストになる）。これは、カースト内での人の移動や自由を制限するものになりかねない。そのため、カースト制度がもたらす身分差別などはいまだにインドの輝かしい経済発展に影を落とすものであり、今後インド社会がどのようにカースト制度を捉えるかは重要である。インド人学生との対話によって彼らによるカースト制度への捉え方を分析し、問題をどのように解決していくのか青写真を描く。

### 議論のポイント

① カースト制度は現代インド社会においてどのような影響を与えているのか。

経済成長が目覚ましいインドでは、欧米文化の流入や人の移動といったグローバル化によって引き起こされる事柄がカースト制度に何らかの影響を外から与えていると思われる。一方で、国内では教育の拡充や政治プロセスの変化からもカースト制度の影響があるだろう。国内外の変化からカースト制度は変化したのだろうか。また、現代社会にカースト制度は具体的にどのような影響をもたらしたのか。

② カースト制度は今後どのように変わっていくのだろうか。

現代インドの若年層は将来のインドを担う貴重な人々である。彼らはカースト制度とどのように対峙し、カースト制度が引き起こす問題に対処するのだろうか。

### 《総論》

①カースト制度はインドの生活に深く浸透していた。その具体例として、人々の名字でどのカーストの出自なのかわかる。また、バラモン出身の人々は肉食主義の人が比較的多いことからカーストを察することができる。しかし、教育の拡充はカースト制度の歴史や認識を人々に与え、下位カーストへの差別や偏見は減ってきているようだ。下位カーストへは憲法で雇用や教育についての優遇を規定し、これを留保制度と呼ぶ。従来、不可触民として扱われてきた人々への社会進出を促すものである。だが、留保制度は上位カーストの人々からすると不公正であり、カースト制度は影響を及ぼしている。

### 考察

上位カーストによる下位カーストへの差別や偏見は現実的に低下してきている。実際に、バラモンから不可触民までの人々が同じ大学や高校に通っていることも少なくないようだ。しかし、不可触民などへ

の留保制度は上位カーストからの不満をあおっていることも見受けられた。政府は、留保制度と通じて不可触民への社会進出機会を促し、社会的弱者への立場の改善を行ってきたにも関わらず、カースト制度は逆に上位カーストの不満を高めていることも見逃してはならない。カーストは、人々の名前や住居など思いのほか人々の生活に未だに根強く浸透しており、国外からの影響はあまり見られなかった。留保制度に見られるように国内政治要因による変化はあった。

#### 《総論》

②カースト制度は長い年月を経てインドの生活に深く関わり、ときに差別や偏見をもたらし、不満を高めるものでもある。教育機会が増えることによってカースト制度への理解が深まり、どの人々も分け隔てなくコミュニティーを作ることで、カースト制度への新たな価値が付与されることが期待できる。インドでは主流である見合い婚は、カーストを意識した結婚であると批判されることが多い。そのため、恋愛結婚が増えることでカースト意識が低下するだろう。グローバル化により、さまざまな世界を見ることで、カースト制度への問題がさらに明るみになり、今の若年層が社会を支える時代にはさらなるカースト制度への価値観の変化があるかもしれない。一貫して若年層は年配層に比べてカーストの意識は低い。

#### 考察

留保制度のように、彼らは教育や就職の機会でカーストと向き合うことになる。国立大学や国営企業での就職に不可触民らの優遇制度によってカースト制度は新しいカーストを作ってしまったのかもしれない。他方でカーストに対する意識の変化は小さいながらも起こっており、同じカーストの人々の結婚という価値も若年層を中心に恋愛結婚志向へ移行しつつあるようだ。留保制度には賛成や反対の意見が割れたことも、カースト制度にかんする制度施行が困難であることを意図しているようだった。

#### 《総括》

コルカタ、チェンナイ、デリーでの学生との対話から、彼らの視点でのカーストの捉え方を理解することができた。彼らは生まれながらにして、自分がどのカーストに属し、そのカーストが他のカーストとどのように関わっているのかを熟知している。学校などの教育の向上によってさまざまな知識を得ることにより下位カーストへの差別や偏見は少なくなっているようだ。しかし、留保制度にみられるように下位カーストの人々の待遇には、カースト制度そのものへの不信感が見られる。国立大学や国営企業には留保制度が適用されるため、入学試験や就職で下位カーストに指定された人々は優遇される。そのことから上位カーストの人々からすると、不満が出てしまうのは否めない。

カースト制度はとてもデリケートな部分で対話が成り立つか不安の部分もあったが、彼らは真摯にこの問題と向き合い、今後のインドにおけるカースト制度について模索しているようだった。どの学生もカースト制度を深く理解しており、カーストに関係なく友人達とコミュニティーを作っていた。カースト制度は彼らの名字として、家族の歴史として刻まれている。自らの血筋を大事にしつつそれに捕らわれることなく、社会生活を送る彼らからは、カースト制度が新たな価値を持ちつつあることを示しているようだった。

カースト制度は世代や時代ごとにその価値観を変容しながらインドの生活の一部として存在している

ことがわかった。インドは見合い婚が多数を占めるものの、恋愛結婚が増えることでカーストの意識が低下することも考えられる。さらには、インドで目覚ましい発展を遂げる IT 産業などの新しい産業にはカースト制度があまり適用していない。だからこそ、インドの人々はより透明度のある競争を求めて IT 産業へ進出するのかもしれない。学生との対話を行った 3 都市とも都市部の学生だったため、農村部などでは根強いカースト制度の名残があることも考えられる。ただ、インドはカースト制度が残した差別や偏見などの意識を着実に低下させている。このような市民社会が今後さらに成熟し、人口平均年齢 25 歳というインドを変えていくだろう。

## 社会・政治部門(Society and politics) II

---

《担当者》豊原智恵

《テーマ》移民

《概要》

昨今、日本は少子高齢化が進み、将来的に労働者層の不足が問題となる。その解決策の一つとして、外国人を呼び込み労働力を補うことが考えられる。また、日本に住む外国人の数は年々増加しており、いかに共生していくかが課題となっている。一方インドには多くの外国人が住み、州ごとに言語が異なることから州が違えば外国とも言われている。また、インドからの移民はかつてのイギリス領やアメリカなど世界に広がっており、インド人にとって移民の存在は身近なのかもしれない。そこで移民をキーワードに、インド人の移民の受け入れに対する考え方やアイデンティティをどこ求めるかを議論した。特に個人としての考え方を知らるため、法律や制度ではなく個々の意見を聞くことを重視した。

議論のポイント

①日本に労働者として外国人を呼び込むこと、日本への移住について。

日本の少子高齢化問題から、今後労働力、消費力が伸び悩むだろう。そこで外国人が日本に移り住むことで問題の解決につながるのか。一方で、現在日本に住む外国人を取り巻く環境はあまり良くない。日本語の壁、仕事の得にくさ、学校教育、偏見などの課題があるが、外国人の受け入れを増やすべきなのか。また、自分が実際に日本に住む場合、何を問題と感ずるのか。

②外国に住むインド人（インド人移民）やインドに住む外国人（インドへの移民）について。

インド人は世界に広がっている。特にミャンマー、サウジアラビア、アメリカ、イギリスに多く居住している。また、アメリカではインド系移民の政治的影響力が増し、アメリカ政府へだけでなく、インド政府へも圧力をかけている。自分が外国に住むインド人だとしたら、インドに住む外国人だとしたら、何を問題と感ずるのか、言語選択はどうするのか。

③アイデンティティの帰属について。

インドは州ごとに言語が違ふ。州を越えただけで外国のような文化に直面することもある。アメリカに住むインド人の若者の中には、identity crisisを感じてヒンドゥー・ナショナリズムの活動に参加している人がいる。今インドに住む大学生は自身のアイデンティティの帰属をどう考えているのか。

《総論》

①日本の問題について労働者不足を補うために外国人労働者を日本に入れることに関しては、コルカタ、チェンナイでは賛成の声が多かった。インドでは職が少なくなっているし、日本は仕事の条件がいい。最初は日本語を勉強するのに時間はかかるが問題はないというのが賛成側の意見だ。またチェンナイでは、夫と一緒に日本に行く場合、子どもも連れて行き、日本の教育を受けさせる。母語ももちろん教えるが、食べ物など伝統は変えていかないと生活していけないだろうという意見が出た。一方で、外国人

の受け入れに対する課題としては、移民を増やしたいのであれば、日本人はもっと英語を話せるようになるべきだという意見が出た。デリーの学生は日本語を専門に学んでいるため言語が障害になる話には出なかった。より具体的に、物価が高い、日本の文化や規則を受け入れづらい人もいる、外国人の文化が入ることで日本のシステムや文化が消えてしまう懸念、仕事の仕方が異なること（インド人は成果主義だが日本人はいつも仕事のことを考えている人=workaholicが多い）、ベジタリアン向けの食事が少ないことが、日本に外国人を受け入れる際の課題として挙げられた。

## 考察

インドでは多くの人が英語を勉強し、学校の授業が英語で行われることが多い。一方日本では英語は習うが実際に使う場面が少ない。外国人に対しても、日本語を教える取り組みは行われているが、英語で話しかける取り組みはあまり知られていない。日本では英語なしで生きていけるがために、日本人は英語がネックだと昔から言われているが、今後外国人が増えることでその流れが変わるかもしれない。移民が多い国を見てみると数が多くなりすぎていることで失業問題や文化摩擦が問題になっており、外国人労働者の受け入れはそう簡単ではないかもしれない。しかし、世界の国々と関わっていく社会において、外国人を受け入れる体制づくりに力を入れ、共生の道を作ろうとしなければ、すでに手遅れといった事態になるかもしれない。文化の受け入れには時間がかかることを認識し、政府として取り組むべき課題であると考えられる。

②インド人の国外移住に関して、国外に出ることは仕事や学業のよりよい機会を得るために、一つの選択肢としてとらえられている。また、移住先として、英語が通じるイギリスやアメリカに行きたいという意見が出た（チェンナイ）。また、現地の文化を受容しつつ自分の文化も大切に作るバランスが大切だという意見や、子育てはインドで、国外にいてもインドの文化の中で教えたいという意見があり、結婚に関してはインド人と結婚したいという人が多かった。子供の言語選択においては、まずは家族内で日常コミュニケーションとして使っている言語を教え、次に自分たちの母語を教えるということだ。（チェンナイ）

インド国内に住む外国人に関しては、どこの都市でも、外国人がインドに来る際の問題は特に無いようだった。しかし、インドの隣のバングラデシュやネパールからインドに入ることは簡単なため、犯罪が増えているという。これは、インドで犯罪を犯しても国外に出ることで犯人が捕まりにくいためである。また、偽造パスポートで入ってくるテロリストや、不法移民なども問題になっているようだ。一方で、違う州からの出稼ぎ移民の問題もある。低所得地域（ビハール州やウッタル・プラデーシュ州）から高所得地域（デリーやマハラシュトラ州）などへ仕事を求めてきた移民に対して暴力事件が起きている。<sup>1</sup>チェンナイの学生の中には他の州からの移民に対して、自分も移動したいからと移民を肯定的にとらえている人もいた。

## 考察

海外移住の選択肢に英語圏を選ぶのは、やはりインドで英語が良く使われており、言葉に不自由しな

<sup>1</sup> 広瀬ら編『現代インドを知るための60章』2007 明石書店 第36章、39章参照。

いからであろう。また、すでに英語圏の国にはインド人コミュニティができていている場合が多い。日本語教室で日本語を学んでいる学生の中には、日本の大学院も選択肢にあると言っていた。子育てをインド文化の中で行いたいと言っていた学生がチェンナイに多かったことも特徴的だ。他の都市の学生は主張していなかった点である。インド国内においては、他の州や近隣国からの移民が問題となるのは、彼らが地域住民と同じ職を求めてきているからである。日本や他の国から来る人は、自分たちが労働者を求めて来たり、専門的な職に着いたりするため、問題にならないのであろう。また、文化の面では、もともとインドの中で多種多様な文化があるため、外国人の価値観もその中に入ってしまう、または、インドパワーに飲み込まれてしまうのかもしれない。

③3都市の学生によると、インド国外に出ればまずはインド人というアイデンティティがベースとなっている。また、インド人同士では、自分の生まれ育った州や両親の生まれた州など、人によって定義は異なるが、出身州がアイデンティティとなる。3都市の学生の違いは、個人の考えで都市の比較とはいえないかもしれないが、以下のようなようだ。まずコルカタの学生のアイデンティティの階層は「インド人>(ベンガル語、宗教)>州」である。ベンガル人は性格がオープンで unity diversity であることを強調していた。また、括弧で括ったベンガル語と宗教は重要ではないと言っていた。次に、チェンナイの学生は、「インド人>州>教育>宗教」と答えた。ここで教育という言葉が出てきている。言語は州と教育のどちらに含まれるか分からないが、子どもに言語を教える際は、まずコミュニケーションの手段として日頃使っている言葉を教え、次にコミュニケーション言語と母語が異なる場合は母語を教えるということだ。また、肌の色もアイデンティティだと言っていた。そして、デリーの学生は「インド人、州」外国人が相手ならインド人、インド人が相手なら州を意識すると答えた。その次は特になんかということ、宗教はあまり意識しないということだったが、バラモンにはベジタリアンが多く、結婚や食べ物の話になるとカーストが意識されると言っていた。出身州の影響は、食べ物に表れやすくや大学の文化祭では州ごとに模擬店を出すようだ。

## 考察

インド人が出身州を意識するところは、日本で地方や都道府県へのアイデンティティの帰属と似ている。宗教を意識することはあまりないということだったが、食事や結婚、就職の話になるとカーストや宗教による違いが出てくるということは、それがアイデンティティにつながっているのではないか感じた。<sup>2</sup>アイデンティティというものは日頃意識しないこともあり、何をさすのかが曖昧である。議論の前にアイデンティティとは何かを考えるとより分かりやすい話ができただけかもしれない。

---

<sup>2</sup> 分科会報告、政治・社会グループのカーストシステムを合わせてお読みください。

## 文化部門 (Culture) I

---

《担当者》 山口久美子

《テーマ》 メディア／コミュニケーション

### 《概要》

最近では Facebook や Twitter の登場で、人と面と向かって話交流する機会が少なくなっているように感じられる。具体的な数字を提示すると、Facebook 利用者数（2012年7月7日付）は現在世界で約9億人、日本では899万人で世界7位、インドでは4630万人とアジア1位である。メディアの定義は、CD や電話、TV、ラジオなど情報伝達の媒介。この中にコミュニケーションメディアというものもあり、マスメディアやインターネットや電子メールを含むネットワークメディアがある。私がインド人学生に向けて質問した項目は次のものである。

#### ① 何を目的に SNS を利用しているか。

娯楽、友人と話すため、相手を知りたいから、自分を見せたいから、結婚式の招待、イベント作成、誕生日を祝う…

#### ② メリット／デメリットは？

メリット：レスポンスが速い、キャンペーンの利用ができる、友達の誕生日がわかる、近況が知れる、災害時の連絡が可能、外国人とのチャットで言語習得

デメリット：Face to Face でない、中毒、仕事・授業中に使う人がいる

#### ③ これからどのように利用していきたいか。

自分でキャンペーンやビジネスに活用したい

#### ④ SNS の利用において気を付けていることはあるか。

自分の写真や生年月日等プライベートをさらけ出しているため、全体公開をしないで親しい人だけにする、知らない人の友人リクエストを承認しない、たびたびアカウントを変更する。

日本には Facebook のほかに Mixi が存在するが、インドにはどのような SNS があるのか聞いたところ、Orkut というものがあるらしい。次なるコミュニケーションツールとしては、what's up（日本の Line のようなもの）やカカオトークがあげられた。Twitter は日本ほどは普及していないらしく、有名人が使う程度だそうだ。また、なぜ近年このような SNS が広がったのかという質問に対しては、相手のことを知りたい、そして自分のことを知らせたいという感情があるからで、これはひとにとって自然なことだという意見だった。さらにこれらは実生活とオーバーラップしており、いまでは欠かせないものになっているのである。

### 《考察》

私の意見では、Facebook をはじめとする SNS は本当のコミュニケーションとは言えず、人と会って話すのが良いと考えている。インド人学生も、これに反対の人と賛成の人両方いたが、前者の意見は、SNS もコミュニケーションツールの一つであり、人のかかわりがなくなったわけではない、というものだ。ただ、みんな、大事な人や大切な話があるときは直接会って話すのが一番ということだった。日本人はインド人より感情表現が苦手で、仲良くなれないとおしゃべりにならず、SNS

の出現によりさらに拍車をかけていると考えていた。電車の中でもスマートフォンをずっといじっている人ばかりで、現実世界とのかかわりがなくなっているようで問題ではないかと考えていたが、インドでも案外同様のことが起こっているようだ。

## 文化部門 (Culture) II

---

《担当者》山口久美子

《テーマ》インドの結婚について

私は前回インドを訪れた時に、インドの人々の結婚に対する日本人とは違う考え方、結婚観を持っていると感じた。インドでは Arrange Marriage の形態がとられており、これは親が決めた相手と結婚するというものである。映画の中ではよく結婚儀礼の最中に逃げ出して自分の恋人と結婚するというシーンが見られるが、私が会った人で Love Marriage で相手を見つけた人はほとんどおらず、現状を知りたかったのである。カースト制度が結婚の際どう影響するのか、ダウリー制、結婚適齢期について3都市の学生に尋ねた。

① 将来結婚したいかどうか、またその時親が決めた相手と結婚する Arrange Marriage か、Love Marriage か。

《コルカタ》

将来結婚して子供を授かるのは自然で当たり前のことで、恋愛結婚を望む。インドではお見合い結婚やダウリー制が知られているが、これは昔のことで、自分たちは新しい世代の若者であるため、古い慣習にはとらわれていない。このように結婚を考えている学生が大半であったが、中にはしたくないという学生もいた。彼らの意見は、結婚したら自由な時間がなくなる、結婚後相手が実は悪い人だったらと考えると怖い、家の責任をすべて任される、とあがった。

《チェンナイ》

チェンナイでは、Arrange が75%、Love が25%の割合。コルカタとは異なる回答が出た。なぜ結婚したいのかという質問には、それは慣習であり、その質問自体がおかしいと言っているような印象を受けた。

《デリー》

デリーでも結婚したくないという学生は見られず、Arrange か Love かは、Love のほうが多かった。コルカタの学生が言っていたのと同じように、最近では Love Marriage が増えているという。

② 何歳で結婚したいか。

20-25歳、26-30歳、30歳以上で尋ねたところ、26-30歳がどの都市もほとんどで、次が30歳以上だった。インド人のイメージとして、10代や20代前半で結婚すると考えていたため、日本人と同じくらいの年齢なのだと知り、これは意外な事実だった。みんな教育を受け、将来職を得るという意思を持っているためであろう。

③ ダウリー制について

現在インドでは、結婚の際花嫁側が花婿側に金銀財宝を送るこの制度は廃止されているが、インドの家庭では娘が生まれると彼女の結婚のために生まれた時から貯金を始めるそう。それも州や地域によって値段は異なり、デリーの学生に聞いたところ、デリー：500万ルピー、ハイデラバード：300万ルピー、マハラシュトラ：20-50万ルピーということだった。とはいっても最近では自分の結婚のためにお金を稼ぐという若者も増えているようだ。

《考察》

3都市の学生に結婚について話してみて、地域によって差がみられたことが面白く、興味深かった。コルカタの学生は先進的な印象を受け、逆にチェンナイ、南のほうへ行くと保守的で伝統を順守している感が感じられた。

これは、女子学生の長い三つ編みや服装からも感じる事ができた。また、企業訪問を主にしたバンガロールで、SONYのインド社員にコルカタの学生の考えを言ったところ、それは彼らがまだ学生で若いからで、結局は Arrange になるのだと現実的なこと言っていた。Love Marriage を信じている学生たちが将来仕事を初めて結婚のことを考えた時、意見がどう変わるのか、変わらないのか是非知りたいと思った。IJSC の学生のほかにもインド人の大学生の子の話聞いたのだが、彼女は高い階級に属し、親が決めた相手と結婚するため、男の人と一緒に歩くことも、周りから勘違いされるためないという。インドではカースト制が廃止されているといってもまだ人々の心に残っている部分があり、結婚の際色濃く表れ、親は異なる階級の相手は認めないというのが一般的だそう。さらに学生とのディスカッションの中で話してもらったことの中に以下のものがある。

- 同棲は親に秘密とする人もいるが、社会的に良いとはされていない。
- 結婚後新しい家に住むのではなく、両親と一緒に暮らすのが普通。
- 主教の違う相手との結婚は Arrange ではありえない。
- 相手は、教育、お金、職業で決められることが多い。

以上のように、最近では教育の発達と異文化の導入、近代化により学生たちの考え方は変化しており、今後もさらに変わっていくだろうと思われたが、かつてのカースト制度やダウリーがいまだインドの人々の心にあるようにも考えられた。

## 文化部門 (Culture) III

---

《担当者》 中嶋広明

《テーマ》 文化に関連したグローバル化

《概要》

昨今はグローバル化が進展し、多くの論者は多くの若者が英語を流暢に操れるようになって外国へ出かけることを主張している。また、或る問題が一国だけではなく多くの国に波及していきやすいともいう。こうした学生会議が多く発足しているのもその一つである。

今回僕は文化分科会に所属しているので「文化に関連したグローバル化」をメインテーマとし、以下の3つを議論することとした。

### 1、文化とは何か

そもそも、文化とは何かをまず考えておく必要があると考えて設けた。

### 2、グローバル化とは何か

### 3、武道の国際化

2、の具体例として検討した。

《総論》

### 1、文化について

文化とは、単純な物理的な法則に沿った動きや反射ではない人間特有の行動というものを採用した。また、各文化（日本文化、インド文化など）の間の差異をインドメンバーのほうが大きく見ていた。具体的には我々は各文化の差異など人間による恣意的な分割ではないかと主張したのに対し、それでもやはり明らかに異なる部分はあるとインドメンバーは主張していた。

### 2、グローバル化について

各文化が人々による恣意的な分割によるとすれば、「自文化」に統一的な定義などできない。したがって人々の交流が盛んになるにつれ、或る文化領域に属する人が「ああいいな」と思ったことが自文化の発展型なのか異文化などを分けることなどできないし無意味である。しかもそう思う機会も出会う人間の数が増えるのだから増えるはずである。よく考えればこれが文化のグローバル化にほかならない。

### 3、武道の国際化について

武道はスポーツとは少々異なる。もちろん体を使うのがスポーツの定義とすれば武道は間違いなくスポーツである。また良く言われる武道の精神性についてもスポーツに全くないのかといわれればそうで

もない。要するにスポーツとの差は比重の掛け方ものの見方がほんの少し違うだけであると僕は思う。しかしこの差、または案配が実は重要である。また武道は型を守ることを非常に重視する。その型は誰かが昔つくってのものであるのに、である。これらを踏まえて僕は、もちろん武道を知らない人がどういう風に共感し取り入れるかは統制できないけれど、実は正統派（もちろんそれは「正統」などない昔に人がつくったはずである）とされるものもあるのだということの頭の片隅に置いておいてもらえようになって普及してほしいと思うのである。インドメンバーもおおむね同意見であったが僕の変った武道についての考えに興味を持つ人もいた。

## コルカタ側プレゼンテーション 教育部門 (Education) I

---

《担当者》 Partha Das, Aritra Chowdhury

《テーマ》 コンピューターサイエンスと人工知能  
環境に適応できる人工知能の設計と研究

歴史：

ギリシャ・ローマの文献に記述が出てくるのが最初

数値計算を研究した Alan Turing や 法の概念が専門の George Boole は、AI 研究の可能性を広げた。

John McCarthy, Marvin Minsky, Allen Newell and Herbert Simon が Dartmouth College で 1956 年に AI 研究の会議を正式に創設した。当初の目的は、言語の障害を取り除くこと、論理的な問題を証明することだった。

アメリカ国防省が予算を拡大したため、AI 研究が盛んになった。1974 年に業績が悪かったため、予算を削減されたが市場が拡大するにつれ再び予算が割り当てられた。1990 年 AI 研究は、全盛期を迎え 1997 年にコンピューターがチェスの世界王者を破った。

AI の必要性：

繰り返しの多く単調な作業を AI は代わりに行う。人間は限界があるので必要。

人間との違い：

人間は、視覚で捉え理解する。環境適応能力が備わっており、一人ひとりが独立した考えを持っている。感情という抽象的な概念に基づいて行動する。法律という決められた決まりの他に、常識という言葉では言い表せないものも判断基準として存在する。

AI の短所：

人間は、問題に対して事前に対処することができるが、AI は予知することができない。2000 年問題など、コンピューターに障害が出る場合もある。

人間が先にプログラミングしたものでないと問題に対処できない。

AI はデータが事実に基づいていないと判断材料として採用されない。

AI 自体でプログラムを構成することはできないので、判断基準、査定方法から結果まで設定をしなければいけない。

人間の言葉から重要な部分を抽出し、不要な情報を取り除くことができないため、人間の言葉を理解出来ない。

AI の具体的な例：

ASHIMO は、人間のように歩き、言葉もある程度理解することができる。将来、人間と区別出来ないようなロボットが開発される可能性も十分にある。

Terminator, A Space Odyssey by Arthur C. Clarke, Star Wars も AI である。

今後の課題：

1、ロボットも人間と同等の権利を持つべきか？

※この問いに関しては、人間以下に留めて方が良いという意見が多かった。

2、人間よりも優れた能力を持つロボットを開発すべきか？

※ 人間の福祉に役立つならば開発した方が良いと意見が多かった。

4、 コミュニケーション能力の向上、視覚能力の鮮明化、データ処理を高速化し処理に必要な時間を削減すること

## 教育部門 (Education) II

---

《担当者》 Malyashree Bhaduri

《テーマ》 自然災害に対する教育

近年、インドでは災害被害が拡大している。その中でも、洪水や旱魃、嵐、地震が多い。インド政府は、災害対策に関する資料を学校に配布し、災害に適切に対処できるよう徹底している。その内容は、災害が起こった場合、早急な対応が効果的であること、対策を怠らないことが重要と書かれている。

インドでは、60%の地域が地震、12%の地域が洪水、8%の地域がサイクロンの危険にさらされている。このため、学校ではグループワークで災害について学ぶ、あるいは災害に関する本を支給するなどして予備知識を提供している。具体的には、日本の避難訓練に似たものをインドの学校も導入しており、例えば地震が起きた場合は、動かずに揺れが止まるまでその場で動かないなどの徹底である。学校以外のオフィスでも、団体行動を奨励して災害が起こったときでも力を合わせて行動出来る関係を作っておくこと、キャンプ生活を通して野宿のための知識をつけることが奨励されている。

インドでも津波が押し寄せることはあり、学校で津波を理解する取り組みが行われている。教科書を読んで津波の特徴を理解し、避難訓練で20分以内の避難時間を目標とするなどである。インド人は、地域それぞれが災害に対処すべきだと考えている。日本では、政府の責任を追及するがインドでは、まず地域ができることが何かを考える。

インドの子供は、個々で災害に対処できるスキルを持ち合わせており、人工呼吸の仕方や包帯の巻き方も学校で教わるようである。学校では、Do not push, Do not Panic, Listen to the teacher's instruction(押さない、慌てない、先生の指示に従う)ことが教えられている。私は、日本の小学校で学んだことと同じだと思った。また、グループで災害に対処することが教えられていることから、インドにも助け合いの文化があることが分かった。

## 経済部門 (Economic) I

---

《担当者》 Devanka Mitra, Shalini Rakshit

《テーマ》 Euro Zone Crisis

《狙い》

昨今、世界規模で未曾有の経済危機に陥っている。それは、サブプライムローン問題に端を発するもので、決定的であったのはリーマンショックである。そして、その影響を特に受けているのが、ユーロ圏である。ユーロ圏では、共通通貨ユーロを導入している。共通通貨制度にはユーロ圏内での為替変動リスクがなくなるというメリットがある一方、一国が経済危機に陥ることで、ユーロの信用が落ち、ユーロ圏全体が共倒れするというリスクがあり、現在まさにその危機に瀕している。このメカニズムを把握し、日本、インドがそれぞれどのようにこの問題に対しコミットしていけば良いのかということディスカッションする。

《概要》

この深刻な経済危機について、以下の順に説明が行われた。

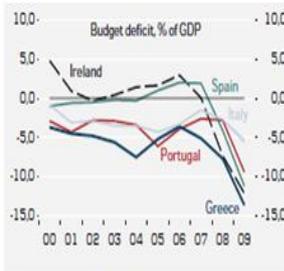
- ① ユーロ圏とは
- ② ユーロ圏危機とは
- ③ PIIG とは
- ④ ギリシャの影響
- ⑤ 現在の状況
- ⑥ 解決策

ユーロ圏とは、欧州連合（EU）の中で、共通通貨ユーロを導入している16の国を指す。ユーロ圏の危機よりも前に、世界的な経済危機が起き、それが2007年から2008年のことである。それにより、ユーロ圏で最も早く影響を受けたのがギリシャである。

ユーロ圏危機とは、ギリシャが影響を受けはじめた2009年から始まり、急速に進行する。ここで、PIIGSとは、ユーロ圏危機の影響が特に深刻化している国の総称であり、ポルトガル、イタリア、アイルランド、ギリシャ、そしてスペインの頭文字をとって呼ばれている。これらの国は危機が起こる前から、財務状況が決して健全ではなかったのだが、ユーロ圏危機が起こり、財政赤字が深刻化し、EUやIMF（国際通貨基金）からの援助が必要なほどになってしまった。以下のデータはPIIGSそして特にギリシャの現在の状況を表したものである。

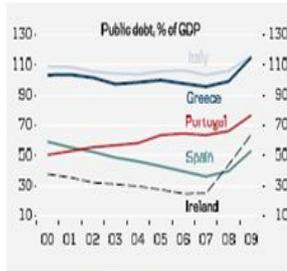
## Large deterioration in fiscal situation in PIIGS

Deficits are dangerously high...



Source: European Commission

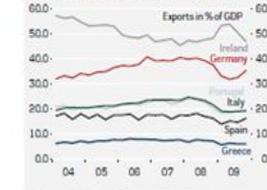
...and debt is rising fast



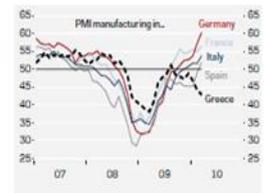
Source: European Commission

## Greece to miss the European recovery

- We expect a moderate recovery in core eurozone during 2010, supported by exports, inventory adjustments and a gradual recovery in final demand
- Germany, especially, will benefit from being a very open and highly competitive economy
- Greece is neither open nor competitive
- Greece is not expected to show positive real growth before 2012. Nominal GDP growth is likely to stay around 0% in the coming years



Source: Reuters Ecowin



Source: Reuters Ecowin

このユーロ圏危機によって、ギリシャは2010年第1四半期での債務額が4316億ドルにもなり、GDPをも上回る額になってしまった。また、スペインでは人口の20%が失業する事態となり、イタリアでも2012年までに財政赤字をGDPの5.3%から2.7%に削減することを目指すため、緊縮財政が可決された。このようにユーロ圏内に大きな打撃を与えている経済危機であるが、この影響は、ユーロ圏に留まらない。インドでは、欧州への輸出額が輸出総額の10%にまで落ち込む可能性があるという。ユーロ圏危機とは、もはや全世界的な問題なのである。

### 《総論》

このユーロ圏危機に関して、今後の動向の予測として2つあげられる。1つは、ユーロ圏全体で経済理念を統合し復興を目指す動き、もう1つは、PIIGSを中心としてユーロ圏が崩壊し、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカなど援助をしてきた国は数千億ドルを失うという動きである。当然取るべき選択は前者であるが、政治的な問題や、債務が増えすぎたことなど、問題は山積である。これに対して、ディスカッションをしたところ、給料の引き下げ、浪費の削減、税率の引き上げ、バンキングシステムの透明化、これらの緊縮的な政策に数年間耐えることでしか解決の道はないという結論で合意した。1997年アジア通貨危機が起こった際、韓国にIMFが介入したことで経済が息を吹き返したという事実は記憶に新しいが、その時の韓国で取られた政策は、高金利政策、リストラ、市場開放など、国民にとっては耐え難い政策ばかりであった。しかし、今回のユーロ圏危機では、規模がアジア危機に比べ大きい為、再建を果たすためにはこれと同様、もしくは超える不利な政策がとられると予想される。ユーロ圏の市民はこれに耐えなければならない。長く厳しい「冬」の時代がすぐそこまで迫ってきている。

## 社会・政治部門 (Society and politics) I

---

《担当者》 Pooja Das, Shatavisha Sengupta

《テーマ》 NGO

### 《概要》

ここ 150 年の間、グローバリゼーションによって生じた技術、社会、文化の交流が、人々の心をより複雑化している。文化的規範や悪法、利己心、無学、社会からの追放、自身が傷つくことへの恐れなどにより、私たちはしばしば、社会の問題に対して盲目になっている。そして、その問題が、どの国においても社会文化経済的な進歩への生涯となることを忘れている。NGO は我々をこれらの社会的な問題から救い出すことができると期待される。

### ①NGO とは

NPO(非営利組織)に含まれ、政府、政党、営利団体から独立し、地域、国、世界レベルで組織されている団体。活動は多岐にわたるが、個人の利益を生まず、営利目的の活動も行わず、自発的に活動する。NGO は人々への直接的な支援の他に、人々の関心を政府へ伝えたり、政策へ主張や監視を行ったり、情報の提供を行うなど様々な分野で活動している。NGO を成り立たせる柱としては、実際に活動を行うボランティア団体、金銭面の支援をするトラスト・チャリティー・財団、その他サポートをする利益目的でない団体、NGO が活動できる法律の 4 つが考えられる。

NGO という言葉は非営利、非政府団体をさす言葉として、国際連合の経済社会理事会でできたが、非政府非営利の活動を行う組織は、古くからあった。国際的な活動をしている NGO は約 40,000 団体だと推定される。インド国内だけでは 2009 年に 3300 万の NGO 団体がある。

### ②インドでの NGO の取り組み

(識字) インドの識字率は 74%である (2011)。しかし、男性の識字率が 82%であるのに対し、女性は 65%と低い。また、都市部が 80%であるのに対し、田舎は 59%と開きがある。そこで政府と協力して農村で識字率を高める取り組みが行われている。ex) Literacy India…恵まれない子供や女性のために、教育、能力強化、雇用の 3 つを目標に取り組んでいる。

(健康) 貧困で苦しんでいる村で、子供への予防接種、家族計画などを教える。貧困と飢餓は密接にかかわっているため、政府や企業も協力して取り組んでいる。ex) Care India Foundation…インド国内外で、精神的・肉体的な一人一人の健康から、家族・コミュニティ・国・世界レベルでの生活の質の向上に取り組んでいる。

(児童労働) 児童労働は子供から教育を受ける権利を奪い、精神的にも肉体的にも子供を利用している。働いても適切なお金が得られないこともある。インドでは都市部でも農村部でも、様々な場所で児童労働を見かける。ex) CRY…地域コミュニティと協力して、子どもの権利に気付かせるべく問題解決に取り組んでいる。

(ジェンダーの平等) 女性も男性も平等の権利が認められているが、教育や女性への暴力などにおいて、ジェンダーの不均衡は残っている。ex) Seruds NGO India…農村に住む女性の能力強化のために、洋裁や

刺繍の技術を教えている。

(家庭内暴力) 古くからのダウリー(結婚する際に女性側から男性側へ贈る持参財)や核家族化も家庭内暴力の一因と考えられる。女性・子供への家庭内暴力は都市部でも農村でも、全国で問題となっている。ex)YWCA…女性や少女の権利向上、社会経済の不均衡、カースト起因の差別などの問題に対し、社会変化と暴力行為の撲滅に取り組んでいる。

(薬物乱用) 薬物依存者はムンバイなどの都市部に多い。(コルカタは少ない) ex)FINGODAP…地域的、国際的な会議やセミナーの開催、トレーニング、ワークショップを通じてドラッグの無い社会を目指している。

(カースト差別) 法律では違法であるカースト制度だが、その効果は弱く、2億人いると言われるダリット(不可触民)は差別を受けている。ex) Dalit Foundation…個々の小さなコミュニティーを基礎とする組織とネットワークで社会変化と南アジアのダリットの権利を守る活動をしている。

その他、老人保護、孤児保護、環境、生活支援などのNGOがある。

### 《総論》

NGO団体はその規模によっては、ボランティアのようにお金が無い中活動している団体もある。インドではNGO団体は政府に登録する必要があるが、登録しても政府から資金援助が受けられるわけではない。NGOの活動資金は寄付金やチャリティー企業がスポンサーになっていることが多いため、将来的には政府レベルで、NGOがより活動しやすくなるルールの制定が必要となるだろう。また、登録はインドのNGOでも難しいらしいが、外国の団体はテロの恐れのためか、より登録が難しいようだ。

インドにはNGOがごまんとあり、もともと助け合いの精神が強いことで発達したと考えられる。一方で、古くから残るカースト、ダウリーなどの慣習が原因でNGOの数が増えたとも考えられる。NGO同士が協力して情報提供などし合う基盤はあるのだろうか。NGOの数が多いインドだからこそ、横のつながりが増えればその力もより大きなものになると思う。

コルカタの学生たちはNGOを手伝うことが時々あるらしい。養護施設や植林を手伝ったと言っていた。また、インドの道端にはごみが捨ててある光景をよく見るが、学生たちはポイ捨てはせず持ち帰るとはっきり主張し、友人がポイ捨てしそうときは注意すると言っていた。もちろんこの意見が一般的かどうかは分からないが、若い世代にはポイ捨ては良くないという意識があることは確かであり、将来は一般的な考えになるのかもしれない。

## 社会・政治部門(Society and politics) II

---

《担当者》 Soham Pal

《テーマ》 災害マネジメント

### 《概要》

インドはその広大な土地がおりなす地理的条件から、サイクロン、津波、地震などの自然災害に見舞われるリスクを持った国である。サイクロンや津波では水害をもたらし 100 万人以上もの人々が家を失った、地震では 1 万人を超す人々が犠牲になるなど災害に対してインドは向き合わなければならない。東日本大震災に直面した日本の行動は防災意識や訓練などの重要性を世界に問うことになった。無論、インドも例外ではない。インドの現状を踏まえつつ、インドの災害マネジメントに対し効果的な対策について検討する。

### 《総論》

自然災害は地球温暖化の進行により世界的に増加傾向にある。インドもその影響を受ける国の一つであるだろう。国内の急速な経済発展により、都市部では開発も積極的に行われている。しかし、都市部では地域によっては開発の程度にも差があり、インフラ制度不足は災害に陥った際のリスクも非常に高くなる。災害の発生は既存の設備を混乱させる以上に人の生死に関わる大きな問題である。よって、防災対策を含んだインフラ設備は不可欠であり、インドはそのインフラ設備投資にもう少し目をむける必要があるだろう。

津波については 2004 年の甚大な被害から、津波警報システムを開発し、スマートフォンへ導入するといった新たな対策を試みている。サイクロンについても家の構造の変化やコミュニティーの連携強化を軸に被害の大きいベンガル地方を中心として取り組んでいる。また、インド北西部での干ばつに対して水循環を効率化させる取り組みが進められている。インドは農産物が重要な産業として国を支えているため、天候の変化にはなるべく影響されないように生産活動を行わなければならない。そのため、限られた資源や特異な地理的状況から生産性のあるシステムを作ることは必要不可欠である。

インドは地域によって災害やリスク管理についての方法にも変化が生じる。それぞれの地域にあったリスクマネジメントを検討し、国のバックアップを獲得し早期に行動を起こすべきである。インドは大国だけに国家レベル、州レベル、地域レベルでのコミュニケーションの強化が求められる。まずはインフラの改善を第一に、災害に対する知識を身につけ、日本のように学校や地域などの防災訓練に取り掛かるべきだろう。

## 社会・政治部門 (Society and politics) III

---

《担当者》 Sweta Agarwal (Kolkata)

《テーマ》 女性の社会的立場

### 《概要》

——女性は世界で1%の富や土地しか所持していない。また世界の収入のうち女性の収入は10%である。

男女の不平等から、女性の社会的立場はグローバルイシューとして問題視されている。インドでも女性の社会的立場については問題となっている。インドの歴史や社会習慣をもとにインドの女性観を理解し、女性の権利や平等の重要性を検討する。

### 《総論》

インドの女性に関する歴史は非常に興味深い。ヴェーダ時代前期には女性は男性と同等の立場や権利を有していたことにある。またヒンドゥー教ではサラスヴァティーやラクシュミーなど女神が多数存在している。このように女性は人々に崇められる存在にもなっていることから宗教が女性の権利を阻害していることはないようである。しかし、時代ごとの支配者の施政により女性の権利は男性とのギャップを作っていた。

独立後のインドでは女性の教育享受機会が増えるとともに、女性の社会的立場や権利について議論が重ねられてきた。グローバル化する世界の流れもインドの女性の権利を主張する後押しになっただろう。現にインドの州知事には女性も選出されるなど、目に見えて女性の社会進出は目覚ましいものがある。だが、一方でダウリー制に代表されるように女性を巻き込んだ社会習慣の改善が求められる。ダウリー制とは結婚時に女性家族側から男性側へ支払われる持参金制度である。日本の習慣でいうと結納に近いものであるが、インドでは持参金が少なかったりすると結婚を拒否されたり、結婚後も家族から受け入れてもらえないなどの態度がとられることもある。持参金を禁止する法令が出されているが、北部などではダウリー制度が今も強く残っているために、地方によっては女兒を妊娠したことがわかると中絶したりするように、男女不平等をもたらしかねない現状がある。同時にインドでの女性の社会的地位の向上を阻む要因にもなっている。

グローバル化や欧米文化の流入、そしてインドの独立、経済発展は女性のライフスタイルを変えることになった。経済成長とともに今後も女性の社会的地位の向上はますます進んでいくだろう。一方で、ダウリー制にみられるような男女の不平等を招いてしまう習慣はインドに根強く存在する。古代から伝わる伝統は尊重しつつも社会の変遷とともにその伝統の改革が必要である。——“*you can tell the condition of a nation by looking at the status of its women*” ——Jawaharlal Nehru

## 社会・政治部門 (Society and politics) IV

《担当者》 Budhaditya Pyne (Kolkata)

《テーマ》 エコタウンとエコシティー

(概要)

### ①エコシティー構想

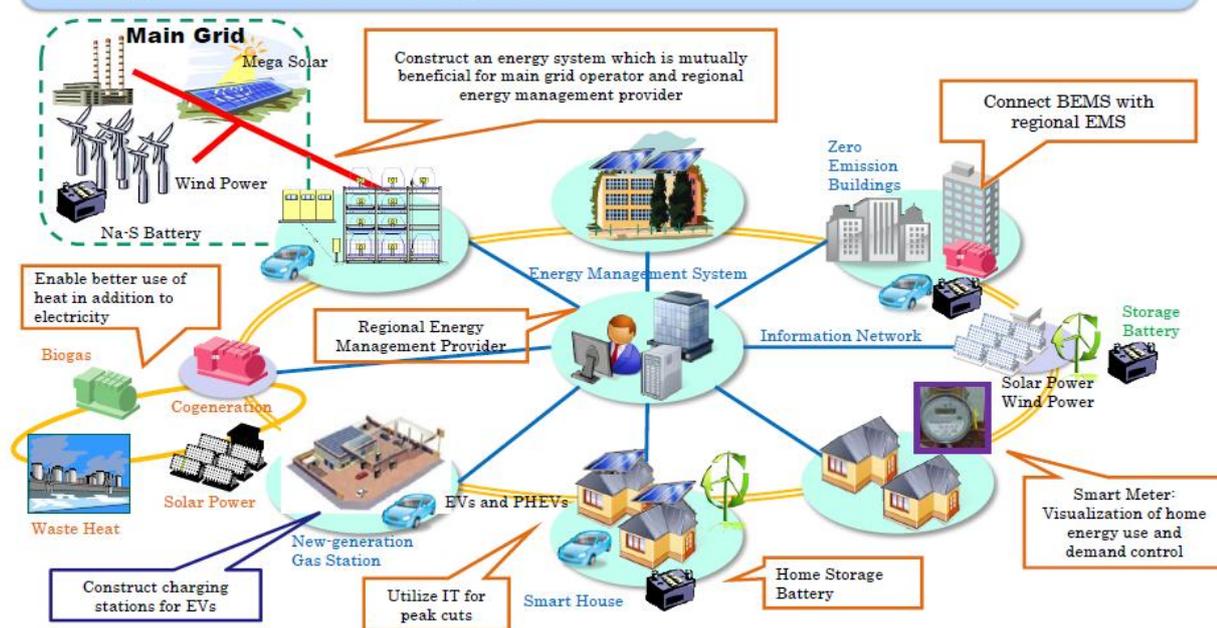
地球温暖化、石油価格の高騰、人口増加（世界の人口 2011 年 70 億人→2050 年 91 億人予想）により生じる、都市部のエネルギー需要の増大、交通渋滞、大気汚染、ゴミ問題などを解決するために、エコシティーが必要である。エコシティーとは、誰もが汚染のない生態系の守られた環境で住める町である。緑、平和、生態保全がキーワードで、すべてのゴミと水が循環するシステムを持つ。また、エコシティーにはスマートコミュニティ（図1 参照）という町づくりが大切になる。

### Image of a Smart Community

図1



*A smart community is a town in which residents, workers and business enterprises carry out sustainable earth-friendly action autonomously, thereby improving the local infrastructure and social system.*



エコシティーを実現するには、政府、地方行政の力が不可欠である。まずはゴミ、水、電気のレベルで、次に交通、公園などの公共施設建設のレベルで考えるべきだ。一方で多額のお金が必要となる。そこで、行政は環境ビジネスやインフラ事業、税金、電力会社への電力販売で収入を得られる。

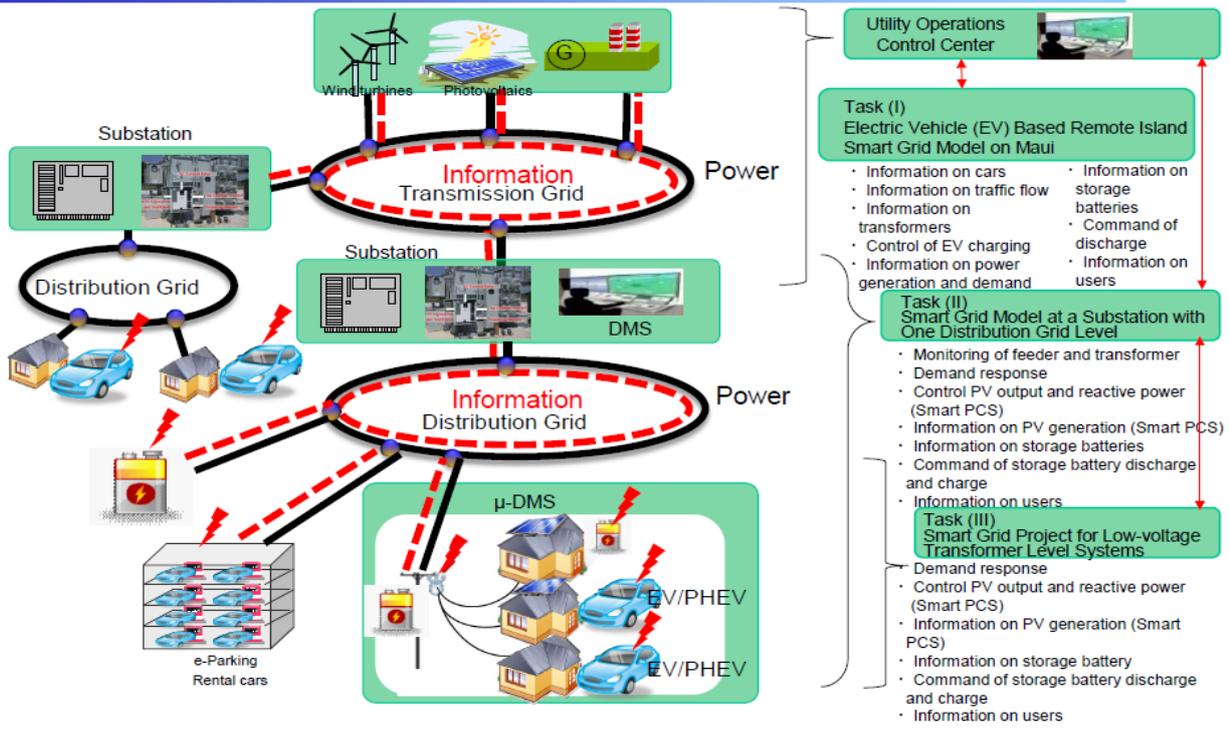
### ②エコシティーを作る具体的な中身

エコシティーを作るには、石炭、石油などを減らしてクリーンエネルギーへシフトすべきだ。クリーンエネルギーとは、風力、潮、水などによって生まれる自然エネルギーだ。また、洪水を利用するなど、水の循環を利用して無駄なく利用することができる。エネルギー、環境などの世界的な問題の解決の鍵となるのが、スマートグリッド技術（エネルギーの流れをコントロールし、ITによって様々なサービス

を可能にする) (図2参照) と、それを使いエネルギーを効果的に使うスマートコミュニティである。

### Smart Grid Project in Hawaii

図2 NEDO



次に、エコシティーの日常生活について考える。そこにはショッピングモールのような大きい店ではなく、15軒の家に対し1つ程度の小さな店があることが望ましい。そうすれば車を使わなくて済む。また、店では繰り返し使えるバッグを使う、プラスチックを包装に使わない、売れない食品や買って使わない食品はレストランに売り廃棄を出さない、生ゴミはコンポストを使い肥料にするなど、多くのごみを出さないポイントがある。そして、エコシティーの交通手段は、ハイブリッドカーや電気自動車である。

### ③エコシティー実現に向けて

現在、実際にエコシティーをつくるために、インドではムンバイの近くの Karjat、日本では、北海道の稚内市、山梨県の北杜市、愛知県の名古屋市などでハウジングプロジェクトや太陽光発電などの取り組みが行われている。

#### (総論)

インドではエコシティーを実現する前に、通常のインフラ改善が先のようにも感じる。しかし、人口の少ない村からエコシティーに変えていけば、開発と同時に取り組むことができる。インドの課題は国として一貫した制度ができておらず、決断に時間とお金がかかる点だ。インドは州政府が州ごとの政治を行うが、大きな改革は中央政府の決断を要する。それでは日本のように、企業が動いて社会を動かせばいいのではないかとと思うが、インドには政治的な対立や政府と企業の癒着があり、土地の買収も会社だけでは行えない。州レベルで企業を中心に働きかけを行うと同時に、中央政府が整備に関わるルールを変更する必要があるのだ。エコシティーは時間がかかるプロジェクトだが、人々の意識の高さが政府

への圧力となるため、人々の意識を高めるところから変えていく必要がある。これは世界的に考えるべき課題である。若者は適応能力が高いため、若者から意識が変わっていくだろう。そのために、まずは環境問題、エネルギー問題に直面している現実と多くの人が向き合う必要がある。

(参考)

図1、図2

NEDO 独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構

[http://www.acatech.de/fileadmin/user\\_upload/Baumstruktur\\_nach\\_Website/Acatech/root/de/Material\\_fuer\\_Sonderseiten/E-Energy/E-Energy\\_Congress\\_ver.F.pdf](http://www.acatech.de/fileadmin/user_upload/Baumstruktur_nach_Website/Acatech/root/de/Material_fuer_Sonderseiten/E-Energy/E-Energy_Congress_ver.F.pdf)

## 6. 文化交流・フィールドワーク報告

### Kolkata(コルカタ)

《担当者》奥村理絵・山口久美子

8月11日

#### ◆文化交流<インド伝統衣装の体験>

女性のアクセサリーや地域ごとにデザインの異なるサリーの展示・説明をしてくださいました。インド人学生もサリー（女性）やクルタ（男性）という伝統衣装を身にまとっていました。私たち日本人学生は、インド人学生にサリーとクルタを着付けてもらいました。

#### ◆開会式

インド人学生の Aritra と Debalina が司会進行を務め、インド人学生側は劇と伝統的なダンス、日本の歌の出し物、日本人学生側は折り紙とダンス、歌の出し物をしました。在コルカタ日本国大使館、日本語会話協会をはじめ多くの方々が参加してくださり、今年は日印国交60周年ということもありコルカタの新聞記者が取材に来て、開会式の様子・JISC/IJSCのことを記事にしてくださいました。

8月14日

#### ◆NGO: Destiny Foundation

Destiny Foundation は女性の経済的力によって女性の売春や奴隷化をなくすことをめざしている NGO 団体で、危機に瀕している女性を雇い、住む場所も提供しています。ここで働く女性たちはミシンを使って布製のハンドバッグや財布を作っていました。これらを販売して団体の維持費に充てているそうです。私たちと何も変わらない彼女たちの笑顔がとても印象的でした。コルカタ在住の日本人女性2人が案内をしてくださり、この NGO 団体の代表者が団体についての説明をしていただきました。

#### ◆村への訪問

村人がチャイでもてなし、歓迎してくれました。村では学校と病院の見学をしたり、村の日常の様子を見たりしました。学校では6歳ぐらいの男女が英語の勉強をしていました。村では陶芸家の作品を見、その陶芸家から記念にと作品をいただきました。

#### ◆Industrial visit to wood curving export factory

高い技術・丁寧な加工で美しい木製製品を作り上げていました。

8月16日

#### ◆ビクトリア記念館と RC Air show

いつものように4, 5人に分かれてオートリキシャーで移動し、ビクトリアメモリアルへ向かいました。

着くとそこには馬車がとまっております、イギリスに来たかのような雰囲気でした。白大理石を使ったイスラム建築の建物で、周りは緑でいっぱいリラックスすることができました。1905年にヴィクトリア女王のインド皇帝兼任を記念して造り始め、1924年に完成したそうで、内部にはヴィクトリア王朝時代の絵画や芸術品、歴史文書などが展示されていました。

メモリアルをまわった後、近くの広場でインド人学生の Supratik が率いる飛行機ラジコンを披露してくれました。その日は天気もとてもよく、みんなで走り回って学生同士大いに楽しむことができました。

#### ◆在コルカタ日本国総領事館へ訪問

中野総領事のもとへ訪問の機会をいただき、日本人・インド人の両学生が向かいました。コルカタの丸紅に勤めていらっしゃる方や日本人会の方なども見られ、貴重なお話をさせていただくことができました。またこの際には豪華な日本料理がふるまわれ、大変おいしくいただきました。日本のものを食べないでまだ10日ほどしか経っていなかったものの、インド人学生にとってもいい経験になったのではないかと思います。

8月17日

#### ◆インド博物館

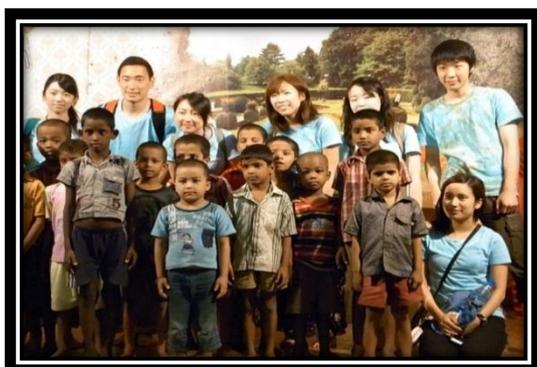
大昔のマンモスなどの動物の骨のレプリカやインド特有の動物の模型、インド地域ごとの人々の生活・文化の展示がありました。エジプト展が開催されており、ミイラが展示されていました。とても広く、すべてを見て回るができないほどでした。

#### ◆閉会式

ニガム先生がインド・日本双方の学生に会議の修了証を渡してくださいました。その後、来年コルカタで会議を行うため、MOUを締結しました。

## Chennai(チェンナイ)

《担当者》馬場祐作・湯村将貴



#### 8月19日 孤児院訪問

我々が滞在していたTNagarから車で数十分の所にある孤児院。4歳くらいの子供から、高校生まで様々な年齢の子供が暮らしている。子供たちは、シャイな子供が多く、照れ笑いしていた。子供たちの目がキラキラしていたのが印象に残った。

### 8月19日 日本語スピーチコンテスト

優勝者は、1週間日本で就業経験をすることができる。過去の優勝者は、この就業経験を通じ、多くのことを学び、日本語講師や、通訳として活躍されている。我々は、審査員として参加させて頂いた。発表者はそれぞれ思い思いのことを慣れない日本語で話していた。



### 8月20日 マハーバリプラム

世界遺産である、マハーバリプラムにて1枚。  
石彫寺院群であるここは海が近く、潮の匂いがたちこめていた。また、砂漠の中の遺跡を思わせるここは、1歩踏み入ると異世界に来たみたいな感覚を想起させた。寺院群以外にも、バターボールと呼ばれる大きい岩が有名。

### 8月21日 Nihon Technology Pvt. Ltd 訪問

Nihon Technology はソフトウェア開発・販売を行う企業である。会長は、ABK-AOTS DOSOKAI の会長でもある Ranganathan 様で、日本の企業のみを対象に IT ソリューションを提供している。新入社員には、日本語の習得を必須とし、日本のビジネス環境に適応出来る人材を育てている。社員の方はディスカッションしたとき、自己紹介を日本語で対応してくださり、和やかな雰囲気の中インドで働くことについてどう思うか話してくれた。

### 8月21日 Seppan 訪問

15歳の Sindhuja Rajaraman 様が CEO を務める Seppan は、チェンナイにあるアニメーションを作る会社である。Sindhuja 様の父親がアニメの制作者で、彼女が14歳の時父親の会社を受け継いだ。Seppan は、従業員10人で40秒ほどの短いアニメーションから3分に及ぶものまで様々な種類を作っている。Sindhuja 様はインド国内の賞を受賞しており、作ったアニメーションを見ても、モラルに関するメッセージ性の強い作品が多かった。日本のアニメに見られていた私は、インドで作られたアニメに見入っていた。

### 8月24日 Japan Night

Japan Night とは、チェンナイ在住の日本人や、日本好きのインド人が集まって「日本語のみで」楽しむ催し物。参加者には、数多くの日本人がいて、とても驚いた。プログラムでは、我々は、映画「座頭市」の主題歌に合わせて、下駄を履き踊ったが、中にはAKB48の曲でダンスするグループがいて、とても完成度が高く、一際歓声を浴びていた。



## Bangalore(バンガロール)

《担当者》日野原由佳・宮澤ティナ

8月25日 バンガロールでの日本人留学生との交流をしました。短期留学から長期留学、中にはインターンシップ生もいました。留学やインターンという私たちとは異なる視点でインドを捉える彼らのバンガロールでの生活や経験から、たくさんの刺激をもらいました。

8月26日 バンガロール大学の学生とバンガロールでインターンをしている日本人学生との交流会に参加しました。バンガロール大学の学生の日本語レベルはとて高く、丁寧語や敬語まで上手に使いこなしていました。食事では彼らと日本語や英語を織り交ぜて会話を楽しみました。また、若林先生を中心として日本語を学んでいる学生と日本人学生インターン、そして私たちが加わり、お互いの思い入れのある写真を披露しました。



### 8月27日 Infosys 訪問

吉野先生ご紹介で私たち日本インド学生会議の Infosys への企業訪問が実現しました。基本的にはインフォシスの方がプレゼンテーションを行ってくれ、私たちはそれを聞いてメモを取ったり質問・発言をして楽しみました。インフォシス敷地内を周り、案内してくださり、非常に好奇心を刺激されました。



### 8月27日 SONY India 訪問

こちらも吉野先生のご紹介で、SONY India(Bangalore)を訪問しました。私たちは Bangalore 支社を訪れ、日本人の社員さんをはじめインド人の社員の方々とディスカッションをしました。内容は様々でしたが、どのトピックでも白熱した討論が繰り広げられ、英語の苦手な私たちでもわかるように時々解説を交えてくれました。また、年内に 55 億ルピーを投資するとの報道もありましたが、Sony のインドへの期待感をオフィスでのスライドを使ったプレゼンテーションから感じ取ることができました。カルナタカ州バンガロールにある研究開発拠点(R&D)ではインド専用と世界マーケットへ向けたスマートフォンやアプリケーションの開発を進めているとのこと。大変貴重な経験をさせていただくことができました。



8月27日 能鑑賞

日印国交樹立60周年の記念事業として行われた、観世流の能を鑑賞しました。デリーとバンガロールで講演されたようです。日本でもなかなか観る機会がない能をインドで観るのは新鮮でした。屋外の講演でしたが、迫力を感じました。

8月28日 日本人留学生やチェンナイで知り合ったバンガロールの日系企業で働くインド人の人々を含めて、食事会をしました。友達が友達を呼び、さまざまなバンガロールで働くインド人や日本人と出会い、彼らの経験を聞くことでインドへの知見が深まりました。

8月28日 東大オフィス訪問

正式には、「東京大学インド事務所」へ訪問しました。所長は吉野宏先生。今回のバンガロール訪問では大変お世話になりました。事務所は日本へのインド人留学生の受け入れ促進やインドにおける学界・産業界とのネットワーク強化を通じた、日印の学术交流、産学連携の推進を目的として設立されました。その目的の通り、現地のオフィスには日本の大学や研究機関のパンフレットやポスターが並び、インド人学生のための素晴らしい環境が用意されていました。ここから多くのインド人学生が日本へ送り出され、これからの日印外交の礎を築く人材が育つことを期待しています。

(参考資料[[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/public01\\_240131\\_02\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/public01_240131_02_j.html)])



## Delhi (デリー)

《担当者》豊原智恵

2012.08.30 日本留学フェア

デリーのパブリックスクールで行われた留学フェア。日本の大学へインド人学生を招くべく、開催されました。11の大学ブースとヤクルトやCASIOなどの企業ブース、書道や京都観光のブースなどが出ており、我々は日本での事前活動の写真と、インドでの活動の写真を展示し、来てくださった方とお話をしました。日本語を勉強している学生が多く来ていたようでした。



## 2012. 08. 30 開会式

国際交流基金デリー文化センターで行われました。外務省からさん、大使館から野田参事官、国際交流基金から田中さんがゲストとして出席されました。インド人学生はインドの古典舞踊カタクとタブラの演奏、日本語の歌（スピッツの空も飛べるはず）が披露され、私たちは世界に一つだけの歌と下駄ダンスを披露しました。



## 2012. 08. 31 授業見学

9時から11時までJNUの日本語専攻修士2年生の授業を見学しました。Tomar先生の日本史の中で、この日は日清戦争が取り上げられていました。その後学部1年生の地理の授業を受けました。この日は都道府県についての解説でした。43の県が、都、府、道が区別して教えられており、日本人との認識の違いを聞きました。



## 2012. 08. 31 大使館でのレクチャー

14時からインド大使館で、インドや日印関係についてのレクチャーを受けました。大使館職員の方の仕事の話も聞くことができ、将来の進路の参考にもなりました。企業でも公務員でも大プロジェクトとなると大人数が動きますが、お金を生み出すのではなく、効率よく使うという点が企業とは違う考え方だと感じました。



## 2012. 09. 02 閉会式

分科会終了後、教室を使って閉会式をしました。学生と先生方のみという形でしたが、閉会式後にプレゼントを渡しあうなどして盛り上がりました。デリー側のマンジュシュリ先生の言葉ですが、日本とインドは近いのです。たったの8時間で来れます。今回の訪問でデリーメンバーと心の距離も縮まったので、この友好関係を続けていきたいと思いました。



2012. 09. 03      アグラ旅行

アグラにある世界遺産タージ・マハルとアグラ・フォートを見に行きました。インド人学生6人と日本人学生7人は6:30にJNUを出発し、約5時間かけてアグラに向かいました。この日はとても暑かったのですが、タージ・マハルを間近にすると、その美しさに疲れを忘れました。



2012. 09. 04      チャウラ先生との談話

チャウラ先生はJNUで日本語を教えているほか、政界など様々なところで通訳として活躍されています。午前中の1時間半ほどの短い間でしたが、言語を学ぶ意味や勉強に対する姿勢、インドの外交、先生の日印関係に対する考えをお聞きしました。

## 7. ホームステイ報告

《担当者》豊原智恵

### Kolkata (コルカタ)

ホームステイ先：Pooja Das

コルカタで初めての家庭料理は、味だけでなく愛情も感じられてとてもおいしかった。ここで食べた甘いヨーグルト「ミシュティードーイ」が私の大好物となった。この日はお父さんの誕生日でもあり、夕食は外でお祝いをした。親戚を含め全員が温かく迎えてくださり本当に嬉しかった。

(Das Family お昼ごはんの写真)



### Chennai (チェンナイ)

ホームステイ先：Chandrakala Shivalingam

若い夫婦と2人の子供のいる家族にお邪魔した。メトロシティの中では保守的なイメージのチェンナイ。その中では先進的なお宅だと思う。旦那さんにチェンナイはコルカタより保守的だと思うというと、どうして?と驚かれた。朝食の南インド料理の作り方を教えてもらったのはいい経験だった。短い滞在だったので、交流の時間を少なかったのが心残りである。



《担当者》湯村将貴

### Kolkata(コルカタ)

ホームステイ先：Sayan Mukherjee

家族構成は、Sayanの父親・母親と父親の母親の4人暮らしだった。父親は、State Bank of Indiaの職員で銀行マンだった。家に到着した時、すべてのドアの上にガネーシャのインドの神様の写真があることに気づいた。インドでは、神様が生活に密接に関係していると思った。荷物を置いた後、Sayanの父親が勤務先のあるコルカタ中心部に連れて行ってくれた。夕食は家で、カレーとご飯を初めて手で食べた。インドのお米は、味がしないからカレーとよく混ぜて食べた方がいいと教えてくれた。デザートには、庭にあるマンゴーの木からとった熟れたマンゴーを食べさせてくれた。

夜話している時、Sayanが日本語を勉強するために日本に行きたいが、英文学専攻の自分が日本で何をしてお金を稼げばいいかという質問をした。私は、学校の先生がいいと思うが、日本の学校では英語は日

本人が教えているため、他の職も考えておいたほうがいいと言った。私は、日本社会を外国人の住みやすい環境にしていきたいと思った。

## Chennai(チェンナイ)

ホームステイ先：VIJAYALAKSHIMI さん

家族構成は、日本語の先生を Meenakshi College for women でなさっている VIJ さん、旦那さんと、子供さんだった。夫婦二人は、お見合い結婚で結ばれ、VIJ さんの親はすぐ近くに住んでいる。ここでもガネーシャの写真が棚に飾ってあり、インド人にとってもっとも親しみ深い神様は、ガネーシャだと思った。上の階に住んでいる旦那さんの父親が、毎日 VIJ さんの家にある神棚にお祈りしに来るらしい。集合住宅のような住まいで、昼はドアの鍵を閉めず、ドアも開けているので、隣に住んでいる人の生活も見えてしまうが、あまり気にしていないようだった。VIJ さんは、日本に来たことがあり、一泊して ABK に戻る際も、ギリギリですれ違うオートリキシャを見て、「日本と全然違うわね」と笑っていた。



<コルカタ>



<チェンナイ>

《担当者》馬場祐作

## Kolkata(コルカタ)

ホームステイ先：Supratik Sil Loy

写真はランチの様子。私1人のために6人のメンバーが来てくれたことに感動。そして、ランチ後も supratik の家に、2人がついてきてくれ、夜遅くまで「Truth or dare」ゲームをして楽しんだ。そこに国境は無かった。ファミリーもとても歓迎してくれ、特にお母さんからは「あなたは私の息子」と言ってくださり、一晩過ごしたただけなのに、別れが寂しくてたまらなかった。



## Chennai(チェンナイ)

ホームステイ先：venkatish

ここでも大切な出会い。彼は、私を寺院に連れて行ってくれた。観光客が来るような場所ではなく、1

人1人が思い思いに祈りを捧げている姿に胸を打たれた。その後、彼の友人を紹介してくれた。インドには本当にナイスガイが多い。写真はファミリー、友人と。ファミリーは私が鶏肉好きと知り、本当に沢山のご馳走を作ってくくださった。バイクでの送迎も「チェンナイ」を車よりも感じる事ができ、有意義であった。



《担当者》宮澤ティナ

### Kolkata(コルカタ)

コルカタでのホームステイでは、Shalini Rakshit さんの家に行った。すごく大きな家で、お母さんもお父さんも優しい人だった。そのまま夜までシャリーニの家で過ごし、お友達が3人来てくれた。社会人



ふたりのうちひとりにはデリーから来た人で、インフォシスの系列会社で働いている人だと聞いた。あともうひよりは学生で、政治を専攻しているとのこと。夜になって街の方まで出た。車を出してくれて、アイスクリーム屋さんへ行った。マンゴーを食べたが、濃厚で美味しかった。その時すでに時刻も遅く、かなり疲れていたため帰りたいたと告げて家へ帰宅した。おばさんに会わせたいといわれ再び家を出て、帰宅後はすぐに眠りにつけた。おみやげの浴衣もすごく喜んでくれた。楽しかった。

### Chennai(チェンナイ)

チェンナイのホームステイでは Mithra Ravichandran さんの家へ泊まった。オフィスに集まり、ミトラが迎えに来てくれた。一度おうちへ向かい、お母さんと対面。食事をいただいてからお話をして、お



父さんが帰宅してご挨拶。車を出してくれて、ヒन्दゥーのお寺に参拝し、本屋さんに向かった。私はインドでタロットカードを買って帰りたかったので、タロットカードとドイツ語の本と文房具などを手にとった。お父さんが気を遣ってくださって、すべて支払ってプレゼントしてくれた。帰宅後、私からも浴衣のプレゼントをした。お姉さんも帰宅していたので、2人分着付けた。とても喜んでくれた。朝方家の周りを散歩して、オフィスで解散した。朝方は涼しいのだなと思って驚いた。楽しかった。

《担当者》 奥村理絵

### Kolkata(コルカタ)

奥村理絵 ホームステイ先：Sweta Agarwal

シュエタの家へ行くため、インドで初めて地下鉄に乗った。シュエタと彼女の姉・妹、友達2人とモールへ買い物に行った。そこでパンジャビスーツを買い、フチカというコルカタの食べ物を食べた。



### Chennai(チェンナイ)

奥村理絵 ホームステイ先：Indhuja Kandamaram

インドウジャと彼女のお母さん、長浜先生とともにマーケットへ買い物に行き、アクセサリやサンダルを買った。インドウジャの家にはお父さんの描いた絵がたくさん飾ってあった。インドウジャが私の腕にメヘンディを描いてくれた。



《担当者》 山口久美子

### Kolkata(コルカタ) Malyashree 家

二人で家に帰って昼食を食べ、家族に会ってから彼女のアルバイト先に挨拶に行った。帰宅後に女の子がメヘンディを施しに来てくれ、叔母さんも会いに来てくれた。マリアシュリーと映画『Kahaani』を観て、ご飯を食べて就寝。日本から来た私を実の娘・姉妹のように接してくれ、インドの家族に対する愛を感じた。

### Chennai(チェンナイ) Sukanya 家

ABK-AOTS の日本語スピーチコンテストに参加したスカニャは、後日行われたパーティーの準備のため夕方おらず、私は疲れて寝てしまっていた。チェンナイでよく見られる curd rice は家庭でも作られるようで、おいしくいただいた。お母さんは先生をされており、近所の子供たちが屋上に集まって宿題をする姿が印象的だった。日本の都会では最近なくなりつつある隣人間での団結を垣間見ることができた。

### デリー、Kaushika のホステル

デリーでは延泊したため、IJSC の女の子の寮にとめさせてもらった。2人部屋で、勉強机とベッドがそれぞれにあり、机は日本語の教科書や雑誌でいっぱいだった。修士課程で授業は少ないといっても課題・勉強量はとても多く、日本人である私が知らない日本のことをすらすら言うインド人学生たちと一緒に生活する中で、自分は生ぬるい環境の中にいると感じた。



### 《担当者》日野原由佳 楽しくて短かったホームステイ



### Kolkata(コルカタ)

コルカタでは大学生で日本語を学んでいる女の子の家へ向かった。家に入ったとたん、家族全員から暖かく受け入れてもらったことがとてもうれしかった。お母さんのおいしくて辛い料理をごちそうになったり、ショッピングや公園、さらにはレストランに行ったりと忙しくて楽しかった一日だった。夜遅くまで分科会のプレゼンを作ったり、インドや日本の写真を見せ合ったりと話がつきることはなかった。

### Chennai(チェンナイ)

私と同じ年で外資系企業に働いている女の子の家にホームステイにいった。初めてのシェアオートに乗り、チェンナイでは有名なヒन्दゥー寺院へ向かった。ヒन्दゥー寺院では寺院の周り方から神様の名前、参拝の方法などを教えてもらった。ホームステイ先ではスプーンやフォークを使わずに手で夕食をいただいた。難しかったが、コツを教えてもらいよい経験となった。翌朝はホームステイ先の近くのヒन्दゥー寺院へ参拝に行った。このようにインドの人々の生活の一部に直接触れることができたのもホームステイの醍醐味だったと思う。



## 8. 本会議反省

### 【分科会】

活発な話し合いができたのは良かった。しかし、自分たちのプレゼン・質問が中心になってしまった。インド人からの質問の時間や、トピックに関わる日本のバックグラウンドを説明する時間を取るべきだった。

コルカタ…多くのトピックを扱ったことで全員が自分の話し合いたいことを話し、何に興味を持っているのかを知れたのは良かった。一方で、1つのテーマに対しトピック数が多く、深い議論ができなかったのが反省点。日本にいる段階で事前知識の共有まで出来ていればよかった。

チェンナイ…4つの大学に行ったため、いろんな学校の様子を知れたのは良かったが、1つ1つの訪問時間が短く学生と交流する時間があまりなかったのが反省点。

デリー…日本語を使えたので3都市の中では1番深い議論ができた。しかし、集中した議論にするために議論中も全体を統括する役割が必要だった。

### 【フィールドワーク】

NGO・企業・遺跡・寺院など4都市を通じて様々な角度からインドを見ることができたのは良かった。フィールドワーク先のアレンジはインド側をお願いしたため、受け身になっていたことが反省点。

コルカタ…女子がNGO訪問しているときに、男子も同じようなNGOなど都市部で役割を担っている団体と交流できればよかった。

チェンナイ…訪問意図が明確でなかったため、工場見学が受け身になってしまったことが反省点。

バンガロール…インド企業やインド進出企業に関する勉強をもっとしておけば尚よかった。

デリー…行政の中心であるため、政治に関するフィールドワークができればよかった。

### 【文化交流】

下駄ダンス・折り紙・歌のパフォーマンスは評判が良くて成功だった。これら以外に、日本文化を伝えるプレゼンをし、文化面の発信をもっとすべきだった。日本語を勉強している人が多かったため、日本語クイズや日本映画やドラマでは分からない自分たちの日常を伝えることも面白かったかもしれない。

デリー・チェンナイに関してはインド人学生と交流する時間をもっと作るべきだった。

### 【その他】

体調を崩したときのために、梅干し・レトルト食品・スポーツ飲料の粉など非常食準備が足りなかった。全員が準備しておいた方がよい。せっかくホームステイをするならせめて1日は交流する時間をとるべき。突然来て突然帰るのは交流もあまりできず、ホスト側にも申し訳ない。

# 9. 修了書

Kolkata 修了書





---

## 第四部 個人語録

### *Impressionistic essay*

---

- |                |     |
|----------------|-----|
| 1. 日本側実行委員からの声 | 126 |
| 2. インド学生からの声   | 137 |

# 1. 日本側実行委員からの声

私とインドと学生会議

豊原 智恵

第16期の実行委員長として、一人のJISCメンバーである私個人として、活動を振り返りたいと思います。

「参加するなら実行委員長をやりたい」といって名乗り出た2012年2月のオリンピックセンター。そこから今までの実行委員長としての責務の出来具合を自己評価するなら、60%。このページを反省で埋め尽くしたくありませんが、もっとこうしておくべきだった、あれもやれたじゃないか、そんな思いは尽きないのです。

今回私たちは秘かに（公表し忘れていただけですが）「さあ君と話そう。(Let's talk with you)」という会議テーマを掲げていました。分科会でのディスカッションはもちろんですが、1カ月の会議すべてを通してインドに暮らす人々と語り合い、お互いのことを知ろうという狙いがありました。会議参加者の中でインド人の友人がいるものは少なく、いたとしてもそんなに多くありませんし、毎日会って話しているわけではありません。それにインドに暮らすインド人と触れ合うことは日本ではめったにできません。同様に、インド人も日本人と頻繁に交流している人は多くいません。また、インド人だけでなく、インドで暮らす日本人の方や他の国の方と話せたことで学ぶことも多くありました。様々なレベルでの交流を通じて、会議テーマは達成出来たと思います。一方で、もっと日本をアピールすべきだったと反省しています。私たちはインドを直接見て経験することができますが、インド人には私たちを通じてしか日本を感じられません。日本のことを全く知らない人、知っている人それぞれに対し、私という個人の日本人だけではなく、日本を伝える、そのような意識が必要だったと思います。

次に、私個人としてのインドを振り返りたいと思います。私は大学でヒンディー語や南アジアの勉強をしており、インドには一度だけ行ったことがあります。座学では学べない、生のインドでそこに暮らす人々を知りたいという思いから参加しました。今回4都市の訪問を通して、人と人との繋がりのありがたさを非常に強く感じました。何せ私たちのプログラムは、現地のカウンターパート、その先の協力者、そしてその方の知り合い…など繋がりによって成り立っているからです。帰国後のナマステ・インドへの参加や南アジア関連の学会への参加を通して、さらに多くの方との繋がりができました。この出会いは私の財産です。こうして沢山の方と触れ合う中で、自分の知識の無さにも気づきます。もちろん、インドで体験して学ぼう！という気持ちで行ったのですが、インドや南アジアについて、もっともっと知らないといけない、と思う自分があります。社会のありようについて深く考えたいという自分があります。大学に入るまでインドに興味が無かった私ですが、この1カ月にインドの引力に引っ張られたような気がします。実は、インド訪問で卒業論文のテーマを深めることが、私の個人的な目的の一つでした。そのために分科会では移民をテーマに選んだのですが、準備不足もあり、思ったような意見を聞くことができませんでした。また、参加できるNGOを見つけることがもう一つの個人的な目的でしたが、こちらは見学させていただいた団体でインターンさせていただける道を見つけました。目的1は達成できず、目的2は道が開けたように見えますが、目的1では自分の未熟さを知り、目的2では参加するに

当たり能力向上の必要性を感じ、どちらも得るものがありました。インドの引力の力を借りて、もう少しその中心に近づいて行こうと思います。

最後に、決意宣言で終わります。私たちが文化交流の出し物として踊った下駄ダンスの本家、早稲田大学の下駄っぱ一ずの掛け声、「頭は低く、理想は高く」。この一節をダンスの練習中何度も聞いていました。私は頭を低くできた自信はありませんが、理想は高く持っていたように思います。それがうまく行動に結び付けられなかった点、アイディアにならなかった点、が悔やまれますが、この思いを大切に、よりよい団体となるよう、今後の JISC の運営をサポートしていきます。今後も理想を高く持った学生が JISC に集うことを期待します！



インドに着いてまず一番に驚いたのは交通に関してでした。車線のない道路ばかりで、たくさんの車がクラクションを鳴らしながら車と車の間をぬって走行していきます。稀にある歩行者用信号をバスや車は無視するし、道路を渡るのにも一苦労でした。インドには人々の交通手段として主流のオートという乗り物がありました。走行中横から吹きつけてくる涼しい風が気持ちよくて、私はオートが好きでした。

また約1カ月インドの様々な場所に行き、たくさんの人と出会って、インドの風習や文化を身をもって体験しました。私たちをお客さんとして迎



えるときにはバラの花やチャイとお菓子を用意してくれました。インド料理がカレーとナンばかりではないことも知りました。プーリーやダール、ドーサやグラムジャムンなどいろんなインド料理が大好きになりました。私の好きなインドの伝統的ダンスや音楽も実際に観聴きすることができました。

農村やNPO、孤児院を訪問するという貴重な体験もしました。都市と農村では生活の様子にすごく違いがありました。大使館・総領事館の方から直接お話を聞く機会もいただきました。インドでの草の根活動や調査員の仕事などの話を聞き、そのような活動に興味をもちました。

そして、何よりも楽しかったのは学生との交流でした。学生とディスカッションをして、インド人学生と日本人学生との考え方の差はそれほどないのではないかと感じました。ディスカッションの他にも、インド学生と趣味や恋愛の話をしたりダンスをしたりしました。言葉がうまく通じないこともありましたが、かけがえのない友達がたくさんできました。

ホームステイも忘れられない思い出です。ホストマザーのおいしい手料理を食べ、ホームステイ先の姉妹と買い物に行ったりおしゃべりをしたり、本当に楽しい時間を過ごしました。ホストファザーが描いてくれた私の似顔絵は宝物です。

慣れない環境での生活で大変な面もありましたが、とても刺激的で楽しい毎日でした。インド人は親切で優しい人が多く、インドがさらに好きになりました。帰るころには「もう少しインドにいたかった」「またインドにきたい」という気持ちでした。今でも必ずインドにまた行きたいと思っています。

「インドに行って、素晴らしい建造物や、まだまだ整備されていない町並み、そしてインド人は何を考えているのか、とにかくインドという国を全部肌で感じたい。」これが私のインドに対する思いであり、この団体に参加する動機でした。そして、この団体を通じて実際にインドへ行けたこと、そして日本インド学生会議という団体の組織の一員として活動していることなど、とても貴重な体験ができたことに、本当に感謝しております。

我々は8月8日から9月5日までの29日間、第16期日本インド学生会議実行委員会の一員として、インドでさまざまな活動を行ってきました。インド人学生との分科会、企業訪問、大使館・総領事館訪問、観光など、日本で過ごす29日間とは全く異なる凝縮された日々でした。そしてそれらの日々は、日本に帰国した今も鮮明に私の中に残っており、帰国してからまだ1か月も経っていないのに、とても懐かしく、また愛おしく思えます。

そして、私はこれらの経験よりも大切なものを手に入れることができました。それは、人とのつながりです。コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー、それぞれの都市で素晴らしい人たちと巡り合い、時には目に涙を浮かべながら別れを惜しみ合った友達もいました。私は、英語がほとんど話すことができません。しかし、そんな私のつたない英語を必死に理解しようとしてくれ、そして一緒に笑いあった友達というのは、一生の財産です。そして、言語が通じなくても、友達ができたという経験は自分の自信にも繋がりました。

私は、インドのような日本とは全く異なる外国に行けば、価値観が一変するものだろうと考えていました。しかし、実際に経験してみるとそんなことはなく、インドに行く前と別人になったかと言えば、全くそのようなことはありません。ただ、海外に対する心の距離はとても縮まったと思います。日本に帰国して思うのは、「国というのは人によってできているもの。だから日本でも海外でも本質は変わらないのではないか」ということです。この仮説が正しいか確かめるために、もっと海外に行きたいと思うようになりました。

このように沢山のことを経験でき、気付きを与えてくれるプラットフォームである日本インド学生会議は代替わりをしながら、これからも続いていく団体です。我々の使命は、日本とインドの架け橋となることの他に、我々の経験を伝え、様々な学生にインドについての魅力を知ってもらい、そしてこの団体を知るきっかけを与えることであると思います。私は、広報局で、より多くの人に、この団体を知っていただけることを目標に活動をしています。広報局の立場から、そして私自身の経験、2つの目線から伝えることによって、少しでも多くの学生がこの団体を知り、そして特に私のように、海外に対して距離を感じている学生が変わって欲しいと思います。

では最後にインド、最高です！

インドと聞いて何を思い浮かべるでしょうか。急速な経済の拡大、巨大な人口、カースト、周辺国との領土問題、IT、ヒンディー語、カレー・・・さまざまな事柄が頭に浮かんできたことを今も覚えています。同じアジアでも韓国や中国のような文化的、地理的な親近感はなく、不思議な国としてたまたまインド。最近では日系企業の進出も本格化し、新聞の記事にもインドという言葉が多くみられるようになりました。しかし、それらの情報を得ても、「インド」の姿はわかりませんでした。というのも、IT産業の目まぐるしい発展がある一方で、貧困問題を抱えるといった側面を持っているからです。あらゆる側面を持つインドを自分の目で見て感じたいと強く思いました。また、インドには私たちが生まれ育った経済停滞期にはない、高度経済成長を背景とした活気があるのではないかと、思いそれを主体的に捉えようと日本インド学生会議に参加しました。

助成団体からいただいた助成金をどう私たちが使っていくのか予算書をまとめるにはインドという国での想定外のリスクを加味しなければならず、それが不透明だっただけに困難でした。実行委員会ではインドについての勉強会を定期的に行いました。8月の渡印までに、大学の試験や課題提出が控えていましたが、学生会議の事務作業にビザ申請と大学の課題を行えたのも今思えば一つの経験として蓄積されたような気がします。

いざ渡印となりましたが、成田からデリーへ向かう機内食のインドのお菓子が辛すぎて食べることができず、出鼻をくじかれた形になりました。1都市目のコルカタでは日本をはるかに超える湿度がインドの香りをかきたたせていたのを鮮明に記憶しています。コルカタの世界一といわれる交通事情には想像を超える渋滞や車線のない道路など驚かされました。学生との交流では10日近くの間毎日行動を共にできたことから、ベンガル人の考えやスタイルを教えてもらうことができました。分科会での一学生が放った「Bengal thinks today, India thinks tomorrow」この言葉はベンガル人の考えや文化を象徴しているようで心に強く残っています。2都市目のチェンナイではコルカタを南下したことで気温はさらに高まりましたが、交通網はコルカタと比べて比較的整備されており、過ごしやすさを感じる程でした。同じインドとはいえタミル語を話すチェンナイの人々は同じアジア人を感じさせる親しみやすさを持っていました。さらに、JAPANNIGHTへの参加は日本人コミュニティによる地域への貢献を目の当たりにしました。日ごろ日本に滞在する私たちには目にする事のない地域でさえも、日本人が日本という国を背負い官民一体となってその国との関係に草の根レベルで寄与する姿勢は感慨深く、日本はまだ世界で通用するのではと思いました。3都市目のバンガロールは1、2都市で築いてきたインドのイメージを根底から覆すものでした。25度近くの過ごしやすい気候に大きなショッピングモールや海外ブランドが入ったビルが立ち並び、ヨーロッパの雰囲気さえしました。また、企業訪問では世界最先端のIT産業を肌で感じ、競争率の高さ、組織規模やそのダイナミズムに日本の弱みを痛感しました。この一端からもインドの潜在的魅力がどれほどの規模なのか、そしてバンガロールが世界経済を左右する都市の重みを背負っていることを理解しました。最後に4都市目のデリーではネルー大学の学生との交流を通じて、留学をせずとも努力をすれば言語は身につけられることを学生自身が証明していました。学問に対する彼らの目はとてもまっすぐで、目的意識を持ち学習していたのが印象的でした。私はデリー滞在の三分の一を体調不良で参加できなかったのですが、学生や先生方のサポートがあり大事には至りませんでした。インドの洗礼だと思いつけ止めています。最終日に訪れたタージマハルは、圧巻でした。

一か月近くの滞在で私が渡印前に思ったインドへのさまざまな側面は実際のインドでも見ることができました。それは個々に存在するのではなく、「多様性」という言葉に現れているように。インドという国が多様性を包括した国であるということでした。日印関係については、日本が先進国、インドが新興国というカテゴリーに分けがちですが、イ

インドは IT などの分野では日本をはるかに上回る実力があるため、日本はその現状を重く受け止めなければなりません。そして、インドが戦っている貧困層の削減、インフラの改善などインドの不十分の部分に日本が補う姿勢を表面化していく必要があると思いました。また学生交流からは、インドにおける私たちの世代がこれから社会の中心となり、中核を担うにあたって、今までのインドとは違った新たなインドを模索していることを感じました。洋服の選択やカースト制度、加えて政治への考え方から変化の兆しを見ることができたからです。インドは若年層の人口が最も多く、さらに日本との関係では歴史的問題はないため、友好関係を築いています、だからこそ私たちはもっとインドのことを知るよう努めることで関係深化がさらに進んでいくのでは、と学生会議を振り返り考えました。その上で、学生会議は単なる人的交流ではなく、日印関係の将来を考えていく過程、そしてさらなる日印関係を築く上で大きなバックボーンとなっていくことを期待し、今後も積極的に携わっていきたいと思っています。この日印国交樹立60周年という節目の年に渡印できたことも、心から嬉しく思います。

最後にこの学生会議が今までにたくさんの方々からの支援により築かれていることや、その歴史をインドの滞在中で痛感することとなりました。改めてこの場をかりて、御礼を申し上げます。ありがとうございました。

「Come and visit us again!」

湯村将貴

「Come and visit us again!」コルカタ空港まで見送りにきてくれたインド側メンバーのデバンコが、何度も僕に言っていた。私はインドに行く前、インド人学生がこんなに私たちを温かくもてなしてくれ、ここまで親しくなれるとは正直思っていなかった。日本にいる間、インド人のネガティブな側面しか聞かされていなかったからだ。「予定通りに商談が進まないことで多くのビジネスマンが、1週間もせず帰ってしまう。」「道を聞いても、間違った方向を教えられる。」「オートリキシャの運転手は、乗る前に確認しないと必ず金額を上乗せしてくる。」これらはすべて事実だったが、それでも私はインドに行き、たくさんの友人を得ることができ、インドの良さを発見することが出来た。

日本では、インドは日本とはかけ離れた国というレッテルが貼られている。しかし私がインドに実際行って見て思ったのは、インドは日本と文化が似ていて、インド人の気質は日本人の性格に重なるという事だった。私も学生会議に参加する以前は、インドは日本とひと味違った国という印象を持っていた。インドという国で思い浮かぶものといえば、高校の世界史の資料集に載っていたようなターバンを巻いたシク教徒が「ナマステ!」と言いながら手を合わせているような光景や、タージ=マハルのような日本建築とはかけ離れた、しかし荘厳な遺産がある国という印象だった。インド人に対しても、私のインド人の友人が話し出すと止まらないほどおしゃべり好きだったので、はたしてインドでディスカッションが成り立つだろうかと思っていたくらいだった。

実際インド行ってみるとインド人は、真面目で勤勉だった。特に覚えているのは、Meenakshi College for Womenで経済のディセカッションをした場面。こちらが説明するスライドにインド人の大学生は熱いまなざしを投げかけて、時々深くうなずきながら熱心に話を聞いてくれていた。インド人の学生に意見を求めた時、積極的に手が挙がるのはよくあることだったし、多くの女学生が熱心にパソコンに向かってプログラミングを勉強しているのには驚いた。またインド人は、自分のことを謙遜し、事実を誇張しないことも日本人の美德と重なる。思い返せば、私は彼らが自分のことを自慢して話すのを見ないままだった。メンバーの中には、インドでも屈指の大学である University of Calcutta や Jawaharlal Nehru University に在籍していた生徒もいたが、自分の学歴をひけらかすようなことは決してしなかった。そして、日印学生会議のメンバーが接するインド人は皆が親切だった。多くのインド側参加者が何度も私たちの体調を気にしてくれた。16期が一人も大事に至ること無く無事本会議を終えることが出来たのは、インド側の協力なしにはあり得なかった。

私はインドに行き、自分の持っている先入観よりも、実際に行って自分で気づいたことを大切にしたいと思った。インドは付き合いにくい面があることは確かだが、日本と似ている面もたくさんある。日本人にとって親しみやすい面も持っているのである。日本とインドは友人になれるという可能性を忘れずに、今回学んだ教訓を自分の将来に生かしたい。

私が日本インド学生会議という団体を知ったのは、インドの気候が雨期に入り始めた今年の6月中旬頃でした。在インド大使館での在日インド大使の送別パーティーに参加していた私は、日本インド学生会議発起人である長浜先生に出会いました。先生を仲介して実行委員長である豊原さんと連絡をとり、私がメンバー入りしたのは7月の初旬で、他のメンバーより何ヶ月も遅れをとって会議に参加しました。

父がバングラデシュの出身であったことから、以前からバングラデシュやインドなどの南アジアに関心がありました。近年ではBRICSという略称で経済発展の著しい国が取り上げられ、学生の世界経済への興味を刺激しています。無論、私もその一人です。今回長浜先生に誘っていただけたことを本当に幸運であったと常々感じています。

本会議に至るまでの準備段階では、遅れての参加であったことから既に様々なプログラムが進んでいて、会議全体の構成や歴史を知るのに大変苦労しました。正直なところ、最初の頃にはメンバーとの信頼関係がなかったので、早稲田大学の下駄ツパーズをモデルにしたダンスも、定期的なミーティングにもやりにくさを感じていました。渡印前には会議以外のことでもスケジュールが立て込んで、自分の中ですべてが中途半端であったように思います。この期間をつかって、必ずインドでの経験のうち今後活かせるようなものを持ち帰ろう、そんな気持ちで渡印しました。デリーの空港に降り立ったとき、私のインドに対するイメージは一掃されました。フードコートにはマクドナルドをはじめ、カレーやピザなどのファーストフード店が並び、空港自体もきれいに清掃されていました。そこからコルカタに渡り、到着が夜中であったというのに学生が空港まで迎えに来てくれていました。コルカタは本会議の中でも10日間と最も滞在期間が長かったからか、4都市の中でも彼らとの日々は強烈なほど心に残っています。父の家があるバングラデシュも同じベンガル地域であるため、なんとなく町並みや人の雰囲気似ていたように思います。何より、インドのベンガル地域であるコルカタとバングラデシュ、この2国はベンガル語を遣いますが、私が聴いていた感覚では双方のベンガル語にはやはり違いがあるようでした。そんな文化の違いにも興味を引かれました。コルカタの長い日々を離れ、チェンナイでは食文化の違いに悩まされました。チェンナイでの食事が口に合わず、体調の優れない毎日が続きました。バンガロールでは吉野先生がインフォシスやソニーインドなどの大手企業を見学する機会を組んでくださり、驚きと感動とほんの少しの悔しさがこみ上げた一日を経験しました。インドの学生のみならず、他国の就活者が目指す場所、環境、敷地内に凝らされた工夫に目を見張りました。続く最終都市のデリーでは、それまでの生活のリズムに限界がきたのか、開会式にもろくに参加できないほど体調を崩し、丸2日ほどJNUのゲストハウスで寝たきりで過ごすことになりました。その間の分科会や文化交流は他のメンバーが代役を務めてくれ、仲間の親切に心から感謝しました。

今、夏の渡印期間を思い起こしながらインドに関する文献を読み返すと、新たな観点と問題点を多く発見することができます。インドに行く前にも文献はいくつか目を通していましたが、やはり、文章だけでインドという大国を理解するのは難しいのだと痛感しました。こう思う、と思い込んでいた自分の意見でさえ、簡単に覆されてしまうような予測のできない国であると感じました。縁があつてか、来年の9月にもまたインドへ行く予定ができ、それに合わせてインド経済等の勉強を再開する意向です。私の通う慶應義塾大学総合政策学部にも今年8月からインド出前講座という特別講義が生まれ、学生の注

目を集めています。今後ますますインドとの戦略的パートナーシップを強めていくために、私たち学生が主体となって日印関係を日本側、インド側へそれぞれアピールする活動を続けていくことが理想であると考えます。将来的な日印の基盤に大きく貢献できるよう、これからもこの日本インド学生会議をみんなで支えていきたいと感じています。

多大なるご迷惑をおかけしたみなさま、および、共に渡印してくださいました長浜先生をはじめ実行委員のみなさま、本当にありがとうございました。これを機に、日印国交樹立 60 周年の歴史が、100 年、200 年と続いていきますことを心から祈りながら、感謝の言葉とさせていただきます。

私にとってインド訪問は2度目のことで、今回日本インド学生会議のメンバーとしてインドに行けるとなり、渡印前は早くいきたくて待ちきれないほどでした。大学でヒンディー語を専攻していることもあり、日本でもインドや南アジア関連のフェスティバルや催し物に普段から参加し、インド人と話すことも好きでした。前回訪れたときは、現地の学校訪問や訪問挨拶などありましたが、ラージャスターンほぼ全域での観光がメインでした。ですから、この学生会議では単に世界遺産を見て回るだけでなく、より深くインドと関わるができるのではと考えていました。

今回の旅で私が気を付けていたのは、「インド人はこうだ、インドはこんな国だ」と考えないようにしたこと。これは、私が母のように慕っているインド人の女性から言われたことで、並んでいる列で前の人を抜かしたり、嘘をついたりするのはインドで育ったからではなく、家庭内のしつけだから、その人個人を見なければ相手のことはわからないのだと教わりました。1ヵ月と1週間のインドでの生活の中で、このことを心に留めておいたことで、インドの学生やコーディネーター、その他会議とは関係ないインドの方とも、固定観念や先入観に縛られることなく楽しんで交流できたのではないかと思います。

日程表を見るとわかるように、休みの日は1日あったかどうか分からないくらい、毎日のように予定が組まれており、大変充実していたと思います。第16期は、歴代最長期間の訪問で、さらにバンガロール訪問も増え、得るものも大きかったです。まず、4都市、広大な土地を持つインドの東から南、北まで回ったことで、人々が異なった言語を話していることはもちろん、食事や服装にも違いが見られ、同じ国でも外国、というのはこういうことなのかと納得しました。しかしその中で共通していたのは、参加したインド側学生や協力してくださった方々の尽力の大きさと、人を思いやるあたたかな心です。日本人学生は7名と少数であるのに比べてインド人学生や関わっている方はとても多く、各都市で多くの人々に出会いました。私が出会ったたくさんの人との思い出は本当にすてきで、彼らへの感謝はここで書くにはもったいないくらいです。日本から来た私たちに、兄弟姉妹のように、娘のように接してくれました。

インドで生活してインドの方と向き合う中で痛感したのが、日本の幸せな環境です。これはいいことのように聞こえるかもしれませんが、裏を返せば甘やかされているということです。このことを私が身をもって感じたのが、本会議終了後滞在を1週間延長して過ごしたデリーでの生活の中です。私たちはデリーでJNUの学生と分科会や交流を行い、ゲストハウスに滞在しましたが、会議終了後は学生のホステルに宿泊させてもらっていました。そこで過ごす中では、英語やヒンディー語より圧倒的に日本語を多用していました。学生たちが流暢な日本語を話し、日本語以外を使う必要がなかったのです。日本人はお金さえ出せば海外へ行くことができますが、向こうではそのような都合なことはできないのが実状で、だからこそ学生たちはスカラシップを勝ち取って日本へ行きたい、そのために必

死で勉強する。私は身近で彼・彼女たちを見ていて自分はこれでいいのかという危機感さえ覚えました。先進国と言われている日本も、人口が減り、若者の能力が低下していったら良い方向に向かうことはできません。向上心・競争心を持って切磋琢磨する環境が必要なのではないかと感じました。

また、私が学生たちを見て自分もこうなりたい、と思ったことの一つが、目上の人への敬意です。日本人の中には自分の親のことが好きでない人がたまにいますが、向こうでは親はもちろんのこと、血がつながっていれば迷わず助け、彼らのために勉強や仕事に励むという姿が見られます。近年は日本のように核家族が増えつつあるというインドですが、家族を思う気持ちは変わらないようです。また、家族思いであるだけでなく、先生や先輩など目上の人に対しても心から尊敬しているという印象を受けました。横だけでなく縦のつながりが強く、先輩は後輩の面倒をよくみており、学年問わず仲が良いようでした。その姿を見て、私は、人生の先輩である人の話には耳を傾け、敬意を払うということを実践したいと思いました。これは当たり前のことかもしれませんが、彼らのように心からそう思うことが大事なのだと思います。

今でもインドで撮影した写真を見て思い出にふけることがありますが、実際、そのときは本当にインドに来ているのか信じられていませんでした。飛行機で約8時間の遠い国ですが、ただ人と場所が変わっただけで、あとは何も変わらないような気がしていました。食や生活の中での文化は日本と大きく異なりますが、私の場合何事も受け入れてしまうので、あまり辛いことを感じることもなく伸び伸びと過ごすことができました。インドでの長いのではと思っていた生活は、振り返ってみればとても短く、それでいて内容の詰まった素晴らしい経験となりました。これからも自分の興味のある分野について学ぶことはもちろん、日本に関心を持っている学生たちに少しでもよりよい情報を提供できるよう、日本の、自分の身の回りにあることにもさらに気に留めて生活していきたいと思っています。

最後に、この学生会議はひとりの力で成り立つものではなく、多くの方々に支えられてできています。インド内だけでなく、準備の段階から、普段することのないメールや諸申請等する中で、長浜先生をはじめとしてメンバーみんなやOB・OGの方々に多くアドバイスを受け、学ばせていただきました。学生会議とは言いながらも、半社会人のような体験ができ、このことは今後活かさないことはないかと確信しています。本当にありがとうございました。私は将来、再び必ずインドへ行くだろうと思います。そのときにはインドで出会った学生、先生方、関わってくださった方々に会えるのを今から楽しみにしています。

## 2. インド側学生からの声

### **Kolkata(コルカタ)**

---

- Manasi Singh President of The 16th India-Japan Student's Conference

The 16th India Japan Student Conference had come to a close on the 17th of August, 2012 and it has been a great honour and a unique experience. We have met and interacted with the Japanese students and have become fast friends with them.

On behalf of the entire Indian Team I would like to thank our Japanese friends for gracing us with their visit and taking such a great interest in our culture, heritage and way of life.

It has been our utmost pleasure to learn about Japan from our friends of that same land. We have come to know a lot more and we are confident that the friendship that is engendered from such conferences shall strengthen the bonds between the two countries even further.

I would like to extend my heartiest thanks and gratitude to the Consulate-General of Japan, Kolkata for their constant help and support. I would also like to thank Mr. Partha S. Mitra, Mr. Jayanta Kumar Saha, Kazuko Nigam Sensei, Ruma Sensei, Reema Sensei, Poonam Sensei, Papiya Sensei, Mr. Alope Basu and all the other individuals who have graced us with their ever-present support and without whom this Conference would not have been as successful as it has.

- Aritra Chowdhury

Report on 16th IJSC 2012

The 16th India Japan Student conference was held this year at Kolkata from 8th August to 18th August. 8 Japanese members and 19 Indian members participated in the conference. I was one of the Indian members and I thought that these were 10 days of unalderated fun. The conference was very well organised by the Kolkata members.

Following the day on which they arrived, we went to visit a Japanese Buddhist temple in Dhakuria and interacted with the students for the first time. The next day we had a small

cultural exchange program followed by sightseeing to Netaji Subhas Museum, Mother's house and Birla Mandir. On the 11th, the opening ceremony was held to commemorate the start of the conference. The next day, that is on the 12th we went for a movie at South City Mall, which proved to be really enjoyable. In the afternoon, the Japanese team members left for their home stay programs. Everyone really enjoyed the experience. The table discussions started thereafter. The four major topics of the table discussions were academics, economics, society and governance and culture. Some serious topics were discussed on each of the four tables and everyone showed how well they had prepared their presentations. The 14th saw a visit to an NGO at a village called Nilganj. It was an enriching experience for both the Indian and the Japanese contingents. Then, we went to a wood carving export factory at Ultadanga and were really surprised to see the quality of the products that were produced there. The next two days involved 3 sessions of table discussions. After the end of the table discussions on the 16th a short sightseeing trip was planned to Victoria Memorial. In the evening, we were all invited for a delicious Japanese dinner at the house of the Japanese Consul General, Kolkata, Mr. Mitsuo Kawaguchi. On the following day, we went to the Indian Museum at Park Street. The closing ceremony was held in the evening a Sayonara party was arranged. Everyone was sad to part with the Japanese team the next day who left for Chennai to continue with another leg of the conference.

The time we spent with each other was really worth cherishing. The friendships we made will hopefully last a long time. We got to learn a lot about the Japanese culture and I am sure they learnt a lot about us. I feel that the two cultures are like the two sides of the same coin and I am certain that in future the close bond between the two countries will grow to be even stronger and better. It was really a wonderful experience for all of us, one which we will not forget for the rest of our lives.

- Malyashree Bhaduri (Communicator)

Message for the 16th India Japan Student Conference

The 16th India Japan Student Conference started from 11th and continued till 17th August. It was a great honour for me to be a part of this conference. This conference provides a platform for exchange of ideas and culture between the students of both the countries. This year was special as it marks the 60th anniversary of India-Japan diplomatic relations. I think both the Indian and Japanese teams gained an insight into each other's culture and traditions.

The conference started off with the opening ceremony on 11th August which turned out to be a grand success. Before that we had a short cultural exchange programme with the Japanese team trying out traditional Indian outfits and mehendi which was a hit with everyone. Everyone enjoyed the Japanese team's song 'Sekai ni hitotsu dake no hana', cultural dance and origami demonstration. Perhaps the most enriching experience was the homestay in which we took our Japanese friends to our homes for experiencing the Indian culture and our way of life which proved to be both fruitful, enjoyable and unforgettable. The following week was full of activities ranging from sight seeing, visiting an NGO, table discussions, trying out Indian delicacies, clicking pictures together, learning new vocabulary both in Bengali and Japanese, dancing at the masquerade sayounara party . Somewhere in the middle of this busy week a beautiful friendship emerged between both the teams which will further strengthen the bonds between the two great countries of Asia – India and Japan.

I thank all the members of the Japanese team , the Indian team, Nigam sensei , Nagahama sensei and all those who made the 16th India Japan Student Conference a big success.

23.9.2012

## **Delhi(デリー)**

---

- Vikash Paliwal (JNU MA2)

デリーで行った 16th JISC 交流は、とてもいい勉強になったと思います。経済、教育制度、文化等色々なテーマについて話しました。日本側が色々なことを教えてくれて、誠にありがたいと思っております。この交流のお陰で日本文化や教育制度等について深く知ることが出来ました。それは勉強にも役に立つと思っております。

更に、日本側の学生たちと友達になって嬉しい気持ちになりました。また、すぐ、こんな交流があったらいいなあ！！

- Sneha Hambarde JNU (MA1)

2012年9月1日行った交流会では、日本人の大学生ぐらい年の学生たちが来て、色々な話について相談しました。

その話で、日本人の若者達の考え方と意見よく分かりました。日本人の友達と一緒にたくさん楽しんで、一番感動したのは、日本であれ、インドであれ、両国の若者達は同じ考えであると思います。それだけではなく、外国人も最近、インドにとって深い興味をもっていて、インドに来る外国人、特に日本人が増えているように思います。

Sunil Paswan (JNU 学部 3 年)

About round table discussion

On 1st and 2nd sep we had a round table discussion with the japanese students who came to india from reputed universities of japan. The students were almost in their teenage but they were extraordinarily talented and looked very mature and as if they had left their age way behind in terms of their knowledge. It was really a great pleasure to have such kind of discussion session with them. These students came and we had a healthy discussion. With their grace we got to know the culture difference. They showed keen interest in india's tradition customs beliefs and lifestyle etc. They also gave us lots of information about their culture. We discussed over very common issues of cast system reservation in Indian universities, dowry problem. It was very pleasant feeling when they said that they like the rich culture of India. Such a discussion session was very fruitful to us as it was in Japanese language also we could improve our level of Japanese language

I am very grateful to my center for organizing such an amazing interaction cum discussion session and giving us privilege to participate in it. I also want to thank our Japanese friends and request them to come JNU again.

---

# おわりに

---

1. 謝辞	142
2. 日本インド学生会議規約	144
3. 編集後記	148

# 1. 謝辞

第16期日本インド学生会議の活動において、私たちは非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けていただきました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点が多々あります。そのようなとき、皆様からの助言が、私たちをより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々をはじめとする、多くの方々にご尽力いただき、第16回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心より御礼申し上げます。今後、第16期実行委員は、任期を全うした後もOBOGとして日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

2012年11月

第16期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

記)

助成            公益財団法人 双日国際交流財団  
                  公益財団法人 三菱UFJ国際財団  
                  独立行政法人 国際交流基金

個人協賛      長谷川康司氏

後援            公益財団法人 日印協会  
                  国際交流基金 ニューデリー日本文化センター  
                  在インド日本国大使館  
                  在コルカタ日本国総領事館  
                  在日インド大使館  
                  チェンナイ日本国総領事館

協力            コルカタ 日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)  
                  Destiny Foundation/Reflection  
                  チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI  
                  Jawaharlal Nehru University(JNU)  
                  東京大学インド事務所  
                  Bangalore University, Centre for Global Languages, Japanese Courses  
                  Bangalore University, KOYO group

INFOSYS

Sony India Software Centre

国際交流基金 ニューデリー日本文化センター

YDP Japan Network 「絆」

外務省大臣官房国内広報課 笹井大嗣氏

大東文化大学 中津雅昭氏

顧問 保坂俊司氏

創設発起人 長浜浩子氏

日本インド学生会議 OBOG 会

以上

## 2. 日本インド学生会議規約

### 日本インド学生会議規約

#### 前 文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

#### 第一章 総則

##### 第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。また、省略名称として「JISC（ジスク）」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第〇期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第〇期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「〇〇年東京（カルカッタ）大会」などの名称も使用する。（〇は英数字とする。）

##### 第二条 活動

(一) 本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催
5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

(二) 本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

(三) 本団体公式マークを以下のようにする。



### 第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議 規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

「日本インド学生会議 実行委員会規定」

「日本インド学生会議 OB・OG 会会則」

「日本インド学生会議 会費規定」

「日本インド学生会議 創設趣意書」

「日本インド学生会議 基本理念」

「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」

「日本インド学生会議 長期計画案」

## 第二章 構成員および組織

### 第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

### 第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

### 第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者（石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏）の3名である。

### 第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

### 第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

### 第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認められたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

### 第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

#### 第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

- 一、役員の選出および罷免
- 二、役員の退会
- 三、予算および決算
- 四、顧問の委託
- 五、規約の改正
- 六、その他必要と思われる事項

また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上（但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める）の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択することができる。

主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

#### 第十二条 任期および会計年度

##### (一) 任期および会計年度

実行委員会は、来期の本会議の六ヶ月前に改組し、その後一年間を任期および会計年度とする。

##### (二) 業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

#### 第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

#### 第十四条 個人情報の管理の努力規定

各構成員は、本団体の活動に際して知り得た個人情報（個人に関する情報であつて、個人が識別可能なものをいう。）について、みだりに団体外部および他の構成員に漏洩することのないように努めなければならない。

### 第三章 処分

#### 第十五条 処分

- (一) 長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。
- (二) 総会は、長期に渡り実行委員としての義務を果たさない者、または前文に掲げた主旨及び目的に著しく背く言動・行動その他日本インド学生会議の運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員に対して、規定の有無にかかわらず、3分の2以上の賛成で、強制退会を含む適切な処分をすることができる。
- (三) 前項の処分についての発議しようとする構成員は、まずOB・OG会事務局および、各期代表世話人に事実の調査の申立をしなければならない。
- (四) 前項の申立を受けたOB・OG会事務局および各期代表世話人は、申立人、被申立人（処分の対象として申立をされた者。以下同じ。）および他の構成員に対し、意見の聴取を含む事実の調査をおこなう。
- (五) 総会は、処分についての議決を、OB・OG会事務局および各期代表世話人の調査にのみ基づいてする。申立人、被申立人、その他関係人・OB・OG会事務局および各期代表世話人が認めた者は、第11条の規定にかかわらず、議決権を有しない。

### 第四章 附則

#### 第十六条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

#### 第十七条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月

第二回改正 平成 12 年 4 月

第三回改正 平成 16 年

### 3. 編集後記

本報告書を作成しはじめたのは帰国後9月末頃でした。あれから約一ヶ月あまりが過ぎ、日本での生活が戻りつつあります。インドで感じた光、匂い、味、音、触れたものすべてをこの報告書に記載することはできません。しかし、ふとした時にこの報告書を手に取り、インドでのあの一ヶ月を思い起こすことができたなら、どんなに懐かしく感じるのかと思います。長年日本に住んでいた人間が別世界であるインドに行くとなんを思うのか、インドに行って何をインプットし、これからの生活で何をアウトプットできるのか。日印関係の架け橋になろうという学生の意志をこの報告書から読み取っていただければ幸いです。

日本インド学生会議第16期の渡印につきまして支えてくださったみなさまへもう一度深い感謝の気持ちを述べさせていただくのと同時に、これからの日印関係が更なる発展を遂げますよう祈りを込めて、ありがとうございました。

2012年11月2日

第16期日本インド学生会議 広報局 宮澤 ティナ

第16期日本インド学生会議報告書

2012年11月発行

編集 実行委員長 豊原 智恵

広報局 宮澤 ティナ

発行 第16期日本インド学生会議実行委員会

代表 豊原 智恵

印刷・製本 株式会社 エイト通商